
炎色の萩

neco@秘書検勉強中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎色の萩

【Nコード】

N2686U

【作者名】

necoo@秘書検勉強中

【あらすじ】

時は戦国。

群雄割拠する武将達の時代。

そんな中ある日、武田軍に所属する忍『猿飛佐助』の下に、とある少女『小萩』がやって来た…。

「猿飛佐助はどこにいる…。」

その少女の目的とは如何に？

1 (前書き)

今回は一部をお載せしました。

話をまとめ、続きを書いたので、前回の内容がそのまま入っております。お手数をおかけして申し訳ありませんが、スクロールを繰り返すと続きが入っておりますので是非諦めずにお読み下さい。
なお、キャラ崩壊が激しいです。オリキャラも多数出てきます。

第壹卷

「探し人は……」

山奥に、獣がいた。

獣は息を漏らさず、ペースも乱さず……淡々と静かに夜の森を疾走する。

しばらく進むとやや開けた場所に出た。

蒼い月光が獣の体を蝕み、シルエツトが黒く浮かぶ。

獣は人の形をしていた。

その線の細さと小柄な体つきからして、まだ子供と分かる。

しかし……その子供が宿す双眸は完全に獣のそれだった。

子供は抜け出た森の方を見る。その厳しい表情を月が照らした。

月に光るは、幼さなさの残る整った顔立ちとその鼻の上に走る横一線の傷。

つい最近に負傷したのか、瘡蓋となつていても僅かに血が滲んでいた。

格好も尋常では無い。

首に襷褌を纏い、着ているのはズタズタに引き裂かれた地味な小袖の着物。

その全部が返り血と垢で汚れていた。

追っ手が来ない事を確認した子供は、先に伸びる崖からの景色を見る。

眼下には武田信玄が領有する甲斐の里が広がっていた。

子供は首から垂らした小さな袋をそっと握り……ぽつり、と初めて言の葉を紡いだ。

「…猿飛…佐助」

月が雲に吞まれ、辺りには闇が広がる。

そして子供は何一つ躊躇せず、崖から飛び降りた。

後は夜が何事も無かったかのように更けるばかりである。

「皆の者おおお！！朝でござるうううううううううう！！！！」

甲斐の上田城にて暑苦しい男の声が、鶏よりも先に朝を告げた。

男はひとしきり叫ぶと、満足そうな顔で汗を拭う。

どうやら日が登る前に起床して庭で鍛錬をしていたらしい。

男の名前は『真田幸村』。

武田菱の旗の元、六文銭を首に掛けて甲斐の虎『武田信玄』に仕える武田軍きつての紅き大将だ。

「今日も変わらぬ平和な朝でござる！そなたもそう思わぬか、佐助！！」

「はいはい、旦那はとりあえずさあ…早く着替えてくれ。それ、洗濯するから」

佐助と呼ばれた、幸村よりもやや年上の男が洗濯物を抱え廊下を渡つて来た。

名前は『猿飛佐助』。

真田十勇士を率いる忍隊の『隊長』兼幸村の『世話役』。いや、本職は武田に仕える忍だが戦も無い普段は世話役に回っている事が多

い。

というより、世話役が殆どだ。

幸村は自分の部屋に戻って着替え始めた。その頃には城にいる皆も起きて騒がしくなる。なにせ今日は珍しく戦も無い束の間の『休み』だからだ。しばらくすれば家族に会いに家臣達の殆どが城を降りるだろう。

そんな景色を眩しそうに、佐助は少しだけ目を細めて呟く。

「うーん…俺様も休みが欲しいねえ、ついでに給料も」

「佐助え、朝餉の時間でござる！！」

「はいはい、今持って来るから旦那！」

佐助は慌ただしく洗濯物を桶に放り込むと急いで厨房に駆けていく。そうして佐助はいつも通り『家事炊事』に精を出すのだった。

それからずつとしばらく後、空に茜色が差す頃…

「旦那あゝ、もうそろそろ止めにしたくない…？」

「御館様が見守る中、鍛錬の手を抜く事などこの幸村が許さん！うおおおおおやかたさばあああああああ！！」

幸村は朝から晩まで鍛錬をしていた。

もはやそのバイタリティには誰も驚かない。

この真田幸村という男は、『気合い』と『根性』で何度も立ち上がる大将なのだから…。

しかし、幸村の鍛錬に付き合わされた（巻き込まれたとも言つ）佐助は顔に疲れが出ている。

「うーん…でもね旦那、とりあえずもうこんな時間だし。俺様は夕餉の支度あるから旦那はもう休んだ方がいいって」

「む、もうそんな時間か！」

幸村が言うと同時に彼の腹の虫が盛大に鳴り響く。

「……………お腹が空いたぞ！佐助、飯だ！！」

「切り替えはやっ！？」

道具を片付けながら佐助が突っ込んだ。

仲の良い主従である。

そんな二人を無感情な瞳が二つ、隠れた場所からひっそりと見ていた。

あの獣…もとい子供である。

それから子供が本格的に動き出したのは深夜になってからだ。気がつかれぬ様に城門の屋根を伝うその姿はさながら猫の様。

子供は何かを探しているらしい…仕切りと目だけを動かしてあちこちを視認する。

「どこだ…猿飛、佐助はどこに、いる…？」

どうやら佐助を探しているようだ。

何の為か分からないが、子供の表情は微かに焦っているようにも見えたと。

向こうからやって来る足軽の目をやり過ぎそうと、一番高い木の枝の茂みに子供が隠れたその時…

「何かお探し？俺様、良かったら協力するぜ？」

背後から声を掛けられた。

驚いて振り向く子供。

目と鼻の先に『猿飛佐助』本人がいた。

「こんばんは」

「…！？」

子供はクナイを手に木から飛び降りた。佐助も逃がさんとはかりに追いかける。途端に辺りが騒がしくなった。

「曲者だああ！！であえ、であえ！！」

「ひっ捕らえろ！」

あっという間に囲まれる子供。

「副将！如何なさいますか！」

足軽の長らしい男が佐助に指示を仰ぐ。

「大丈夫、ここは俺様一人でなんとかするから。とりあえず、他に侵入者が居ないかどうか巡回頼むわ。但し、旦那は起こすな。厄介

な事になる」

「はっ!!!」

足軽の団体は散り散りになって城門へ駆けてゆく。

子供は目の前にいる佐助を警戒して動かない。

「んじやま、仕事しますか」

佐助が先手を取った。

放たれた複数の手裏剣を子供は器用に回避し、代わりにクナイの雨を降らせる。

が、一流の忍である佐助の目を欺くには些か技量が足りないようだ。クナイが佐助に容赦なく降り注いでも、微風の薙ぐかのように全部あしらわれる。

「アンタ、何が目的でここに来た？」

子供は佐助を黙ったまま睨み、数歩下がって距離を取る。

「沈黙：ね、忍としてはまだ見習いつて感じか。やれやれ、俺様も舐められたもんだな。見習いに取られる程、俺様の首は軽かあねえぜ？」

佐助は糸のついた大振りの手裏剣を二つ構える。

子供も同じ様に忍刀を持ち構えた。

「…人」

ここで初めて子供が返答した。

「人、探しに来た。だから…そこを、どけ。邪魔だ」

「人って誰だ？」

「教える道理は無い」

子供はそう言つと、指で『印』を結ぶ。

すると、不可解な光景が佐助の前で起こつた。

子供がすう、と消えたのだ。正確に言えば影に沈んだ、と言つべきか。

「この技…まさか！」

佐助の顔に焦りが出た。

どうやら技を知っているらしい。

佐助が驚く間、彼の背後の影にも異変が起きていた。

影が塀の影と重なった瞬間、その間から小さな手がぬつ、と浮かび上がったのだ。

「何っ?!」

気付いたのも束の間、忍刀が佐助を貫く…様に見えた。がしかし、刃が触れたその瞬間に佐助は煙の様にかき消えた。

「なーんてね、どうやら分身とは見破れなかったらしいな。ま、技の質は悪くない」

消えた筈の佐助が現れ、今度は逆に佐助が手を掴んで影から一気に引きずり出した。

当然、影からは子供が現れる。

佐助は子供の抵抗をよそに慣れた手付きで素早く木に縛り付けた。

「残念だが、その技には見覚えがあるんだわ。そもそもさ、それ…

甲賀の技だし。で、答えてもらおうか。誰を、探しているだ？」

「僕は口を割らないぞ」

「いや、答えてもらわないと。じゃあ、質問を変えよう…誰が命じた？」

「さあな…」

子供は縛られても尚、無表情で頑なに拒む。

「ふざけるなよ？俺様、こつ見えて疲労困憊でぶつ倒れそうなんだわ。だから」

「殺したければ…殺せばいい!!」

「物騒だな、おい…」

「僕を、殺すなら…名前を問いたい」

「はあ…？いや、殺しやしないって」

「名前を、問う！」

「はあ……つたく、猿飛佐助って名前、知らない？」

ここで初めて子供の表情に変化が出た。

「な……」

「ん？」

「さるとび、さすけ……？」「だから言ってるじゃん……。もしかして、アンタが探していたのって俺様？」

子供は目を泳がせ、逡巡した後ゆっくりと首を縦に振った。気まずい空気が二人を包む。

「んーと……それで俺様に何の用？」

沈黙を破ったのは佐助だった。

子供は口調を改めて答える。

「『猿飛佐助』に会えと父上からの命で来ました」

「その親父さんの名前は？」

「八夜嵐雪」

「嵐雪……？あの『鼬の嵐雪』か？」

佐助にとって、その人物の名前は懐かしかった。

「はい……」

「そりゃあ俺様からして兄弟子に当たる人だよ。道理で甲斐の技が出来る訳だ。顔もよくみれば似ているし……で、その嵐雪から何て言付かったんだ？」

「首に掛かっている袋を渡すようにと」

佐助は子供の拘束を解いた。解いても安全とみたのだろう。

子供は首から下げていた小さな袋を取ると佐助に渡した。

中身を見る。中には小さく折りたたんだ紙が入っていた。嵐雪からの手紙である。

「ふうん……成る程……。アンタ、名前は？」

「……こはぎ。小さな萩で小萩です」

やや小さい声で答える子供。

「女みたいな名前だな」

「僕は女ですよ」

「…………えっ？」

佐助は思わず面を上げた。子供、もとい小萩をまじまじと見る。父親に似たやや凜々しく感じる目鼻立ちは少女より少年を思わせる。着物も男物の小袖であった。

佐助はどうやら彼女を『少年』と間違えたらしい。

「俺様としたことが…！いや、でも何で男の格好？というより口調…！」

「僕は女ですが、しばらく男として育てられたのです。『小萩』とは亡き母上がつけた名前で、父上に引き取られてからは『鷹丸』という名前で忍の修行を受けました」

「なるほど…で、嵐雪は今どこにいる？」

「播磨の戦に巻き込まれて、死にました」

小萩は簡潔に言った。

「…詳しく聞かせて貰おうか」

「それは…………無理です」

「何故？」

「思い出せないのです。気がついたら、父上は僕の盾になって…」

小萩は頂垂れた。

「わかった、大丈夫だ。手紙によると、嵐雪は俺様に小萩…あなたの世話を頼んでる。無くなった真相なら後でも解明出来るしな」

「え…父上が…？」

小萩は目を丸くした。

佐助は小萩に手紙を返す。そこには確かに我が子の行く先を案じた父親の文章があった。

「これからは此処、武田がアンタの家だ。来いよ、部屋を案内する。確か、空き部屋があった筈だから…と、その前に騒ぎを静めないと」

佐助はさっさと歩き出し、足軽達に警戒を解くよう命令した。

「猿飛殿…いえ、猿飛師匠…！」

佐助は足を止め振り返る。

「お世話になります!!これからの師事、宜しくお願いします!!」
小萩は声を張り上げて深々とお辞儀した。
それを聞いて佐助は笑って言った。

「ああ、こちらこそ宜しくな、小萩!」

この日、武田に新しい仲間が増えたのを幸村が知るのは翌朝に起床してからだった。

亡き父の命により、猿飛佐助に弟子入りする事になった見習い忍の小萩は、久々に穏やかな睡眠を取ることができた。

やがて夜が仄白く明ける頃、小萩はふと目が覚める。

夢から現実に帰る瞬間、微かに血の臭いがした。

風呂に入ってもまだ体に染み付く臭い……自分は何か夢を見たのだろうか。

小萩が思い出そうとすると、刹那に瞼の裏に橙色の炎の瞬きが浮かび上がる。が、それだけだった。

小萩は考えるのを止めて布団を畳むと顔を洗いに井戸へ向かう。

基本的な場所は、もう佐助に案内して貰ったのだ。

小萩は井戸の桶を拾うと水を汲み上げる為に井戸の底に放り投げた。

…カラカラカラ

「顔に傷：あーはいはい、小萩の事ね。いつけね、旦那に教えるの忘れてたわ」

「なぬ！」

「ちよつと待つてな、大将。そいつ、怪しい奴じゃないからさ……」
佐助は釜戸に灰をかき入れ、幸村と一緒に外に出る。

外には小萩がいた。顔を洗っている。

やがて気配を察したのか、振り向いて佐助に挨拶した。

「おはようございます…：師匠」

「はいはい、おはよ。昨日はよく眠れたか？」

「はい、十分に」

「そつか。あ、小萩…この赤い寝間着着たのが昨日言っていた真田の大将だから」

佐助は背中につけて離れない幸村を前に出す。

「ほれ、大将。目の前にいるのが小萩：知り合いに頼まれて引き取つたんだ」

「何故、客が来たのに俺を起こさぬ！」

「いや…もう遅かったし。てか、寝起きの旦那は厄介だし」

「それとこれとは話が別でござる！」

幸村は佐助に詰め寄った。かなりご立腹の様子。

しかし、幸村は小萩の方に向き直って改めて自己紹介をした。

「先程の無礼、すまない。それがしの名は真田 源二郎 幸村にござる！ところで『おはぎ殿』、そなたは見習いといえども中々の実力を持つ御仁と見受ける！是非とも稽古の相手をお願いし…：」

「……………おはぎ、じゃなくて小萩です！」

小萩の顔が険しくなった。

名前を間違われた事がよほど気に食わないらしい。

ここで佐助が慌てた。

「素で間違えるなよ、真田の旦那！『おはぎ』じゃなくて『小萩』！後さ彼女、女の子だから…：」

「なぬ、女子でござったか？！てつきり男だと…この幸村、一生の

不覚!!」

「そうやって勝手に地雷を踏むなあ!!」

幸村は派手に驚き、佐助は手を顔に当て信じられないと首を振る。

「……………」

「すまない小萩、旦那は悪気があったわけじゃないし…根は良い奴だから許せ!な?」

「僕の名前はおろか見た目で判断するなんて、最低です」

小萩はそっぽを向いた。

「ああもう!ほら、旦那謝って!元はといえば旦那が悪いんだから!!」

「す…すまん、小萩殿!!」

幸村は慌てて再度謝る。

彼女はやっと向き直った。

だが、険しい目付きは相変わらずだった。

「…今度間違えたら許しません。では、僕はこれにてとさっさと部屋に戻ってしまう。

その背中を見て佐助はため息をつく。

「はあ……………どうしたもんかね、あの子…」

「佐助……………俺は、嫌われたのか?」

「さあね…とりあえず、旦那はやる事があるでしょ?」

「それでござった」

「わかればいい。じゃ、俺様は台所戻るから。くれぐれも壁とか壊さないように。修理大変なの!」

「うむ、承知した!」

幸村が鍛錬の準備し始めると同時に佐助も元の台所へ戻っていった。さて、佐助が台所に入ると、さつき部屋に戻ったはずの小萩がいた。佐助は少し驚く。

「お、どうした?」

「さつきはすみませんでした。僕も大人気無かったな、と思いまし

て…」小萩は俯いて言った。その顔には悔しさが浮かんでいた。

「いや、あれは大将が悪い」

佐助は冷めた大根を再び煮込みながら言う。

「まあ、すぐむくれたのは良くなかったな…」

「…面目ないです」

「謝るなら、旦那に謝れ」

「はい…」

小萩は立ち上がると佐助にお辞儀した。

「改めて真田殿に謝りに行きます」

「行ってこい」

小萩は台所を出て行った。

「ふん…！ふん…！」

庭では相変わらず幸村が鍛錬していた。真紅の柄が特徴的な二本の槍を振り回している。

その姿にしばらく小萩は言葉を忘れて見ていた。

多彩な幸村の技に魅せられたのだろう。だが、本来の目的を忘れてはいけない。小萩が勇気を振り絞って声をかけたその時…

「やつほお、ユッキー！！相変わらず蹴りやすい背中だね！！」

と黒装束の見知らぬ人物が幸村の背中目掛けて蹴りを入れた。当然、幸村は吹っ飛ばされる。

「ぐはああ…！！そ、その声は…空夜殿！？」

蹴られながらも彼はその人物の名前を呼んだ。

空夜と呼ばれる人物は不敵な笑みで

「正解！」

と言うやいなや持っていた風呂敷包みを幸村に差し出した。

「はい、若からの伝言と野菜の差し入れ。『それ食って元気になりやがれ！！』だとさ！」

「うむ、忝ない！！小十郎殿の野菜はいつ食べても美味しいでございます！」

「てか、ユツキーの後ろにいる子、誰？ユツキーの小姓？」

空夜は小萩を指差して幸村に問う。

幸村が振り向くと小萩が困惑して立っていた。

仕方ないので幸村が小萩の変わりに紹介する。

「佐助の新しい弟子の小萩殿にごさる！小萩殿こちらは……」

「あー、はいはい！俺の名前は双月空夜。奥州の伊達政宗に仕える忍さ。俺もさす兄の弟子だったんだあ。そうすると、あんたから見て姉弟子か。という事でよろしく！」

空夜は小萩に自己紹介した。姉弟子という事からしてどうやら『女性』らしい。

「よ、よろしく……お願いします……」

なんとかそれだけ言って小萩は幸村の後ろに引っ込んでしまった。

幸村に朝飯の時間を伝えるべく、佐助がまたもや来た。「旦那、朝飯出来……おお、空夜！野菜の差し入れか？ちようど足りねえと思つてたんだ。せっかくだから朝飯食って行けよ」

「やったあ！久々にさす兄の飯だあ！！これぞ役得！……ふふふふふ！！」

空夜は佐助の誘いを満面の笑みで受けると、我先に部屋へ駆けていった。

それを見て幸村が

「ああ！空夜殿！！抜け駆けは許さないでございます……！！」

負けじと猛スピードで追いかける。

「……………」

「……………」

残された佐助と小萩。

佐助は本日二度目の大きなため息をつき、小萩は啞然とした表情で二人の背中を見ていたのだった。

「師匠……あの人……」

「うん？あの人って…空夜の事か？」

「はい。僕の姉弟子だと言っていました」

「ああ、なるほど。確かにアイツも俺様の弟子だな。態度はデカい
がなかなか面倒見はいいぜ？弟もいたしな」

「弟？」

「海斗って言う名で瀬戸内の毛利の旦那に仕えてる」

「ほう」

「まあ、そっちに関しては追々話すから今は飯にしようぜ。な、小
萩」

佐助は小萩を連れて幸村と空夜の声が喧しい部屋へと向かう。

余談だが、佐助が作った朝ご飯はとても優しい味がする、小萩はそ
う思った。

結局、空夜はご飯を食べた後、団子を土産に奥州へと帰り、小萩も
佐助の家事手伝いをして慌ただしい一日が終わろうとしていた。

小萩が寝静まったその夜、幸村と佐助は珍しく寝ていなかった。ど
うやら佐助が幸村に昨日の顛末を教えているらしい。「…という訳
だ、大将。結果、小萩は俺様の弟子として引き取る事になった。が、
問題は…」

「御館様に小萩殿をどう紹介するか、だな！」

「いや、違うから。とりあえず人の話を真面目に聞こうか、旦那…」

「む、違うのか？」

「まあ、それもあるな…一応御館様には伝えたんだが…如何せん容
体を考えないと」

「まさか、御館様の身に何かあったのか…？」

「そうじゃない。むしろ前よりは回復している。明日、小萩に挨拶
に行かせるさ」

「その時は俺もついて行くぞ！」

それすらも拒絶するのでなかなか直せない。
もはや手の打ち出しようがなかった。

「いやあああああああ
！！！！！！！！！！」
！！父上から離れる

ふいに虚空を見つめ人間らしい言葉を血のように吐くが、悲鳴にかき消されてよく聞こえない。

何があったのだろうか？否、彼女は夢で何を見たのだろうか？何に怯えてるのか？

佐助は狼狽えた。

そんな中、幸村だけが暴れる小萩を強く抱きしめて彼女の耳元で悲鳴に負けないように叫んだ。

「小萩殿！！！！目を覚ますでござる！！！！！！」

「だ、旦那……？！」

佐助が止めようとしたが幸村は尚も叫んでいた。

「ここには、怖いモノもござらんし、只の悪夢でござる！！！！例え小萩殿のお父上が居なくても、俺達が居るでござる！！！！だから目を醒ませ！！おはぎ殿！！！！」

幸村が一際声を張り上げた刹那……小萩の悲鳴が止み、大人しくなつた。

あんなに強張っていた手や足も次第に力が抜けてゆく。

やがて小萩が唇から弱々しい声で返事した。

「ちがひ、ますよ」

「……！？」

「おはぎ……じゃなくて、小萩……です」

掠れた声でそれだけ言うと小萩は糸が切れた人形みたいに弛緩した。完全に意識を失ったらしい。

「小萩殿？……小萩殿！？」

「大丈夫だ、旦那」

佐助が小萩の首に手をあてがい、確認する。

「気絶したただけだ」

「何：！？」

「命に別状は無い。まあ、念の為に鎮静薬は飲ませる」

「小萩殿は…戦で何か見てはいけないモノを見たのかもしれないでござるな…」

「かもな。なら、自分で封じた記憶が蘇った可能性も…って旦那、いつまで小萩抱いてるんだい？俺様から見ても…かなり際どいんだけど？」

そこで幸村は改めて小萩を見た。

小萩は暴れたせいで寝間着が乱れ、肩がむき出しの格好である。それに気づいた幸村は赤い顔で叫んだ。

「は…破廉恥でござるうううう！！」

小萩をつき離し、いずこへ去って行った。

「あーあ、行っちゃまった…。旦那もそろそろ免疫つけるべきだろうに…」

佐助は小萩の寝間着を直し、彼女の容態が落ち着くまで看病したのだった。

2 (前書き)

一部誤植がありましたので訂正します。

第貳卷

「橙色の瞳」

佐助と幸村が起きて話し合っていた夜、小萩はある夢を見た。否、失われた記憶の断片を見ていたと言っべきか…。

記憶は一面の火の海から始まる。

播磨の城の中、辺りには累々の屍。天井や壁には刀傷の痕がついている。だが、それもじきに火に飲まれて消えてしまっただろう。それはつまり戦、乱世に蔓延る道理。

そして、今は自分がその渦中にいる。

小萩は死臭や火薬の混ざった焦げた臭いに顔をしかめた。

『小萩』

目の前には父親がいた。煙のせいで顔も見えない。が、声でわかる。『父上？』

呆然と立ち尽くす彼女に、父である嵐雪は自分の首に巻いていた布を小萩の首に巻き直した。そして

『すまん、小萩。許せ…』

そう言うや否や、嵐雪はクナイを取り出して小萩の顔を横一線に切り裂いた。

『……………あ』

視界が更に赤くなる。流れた血が火のように熱かった。

「の術が完成した。これでお前は強くなる。逃げる、これを甲斐の猿飛佐助に届けるのだ！」

と言つて嵐雪は小さな袋を小萩に手渡した。

小萩は傷の痛さと流れ出る血の熱さに呻きながら、なんとか堪えて袋を受け取る。

「……ですが、父上……も逃げないと」

「僕はいい……先に行け……」

「そんな……!？」

「行け！行くのだ!!」

父親はクナイを片手に後から来た追っ手と鏢迫り合いながら小萩を煙が少ない外へと突き飛ばす。

「父上!!」

煙の中、次第に朧気になる幾人の影……記憶はそこまでである。自分が「覚えている限り」、父親は炎に飲まれ死んだのだ。

甲斐への道中、何度も見た夢。しかし、さつきとは別の記憶が小萩の目の前に広がった。

それは、全然記憶に無い光景 ……

辺りは相変わらずの火の海。

今度はそこから外れた所にいた。

火薬や血の臭いも先程と全く一緒。

そこでさつきと違うものがある。

それは、火の中に横たわる真新しい死体達……

惨たらしく殺された追っ手の死体と自身の父、嵐雪の死体がそこにあった。

「……………!？」

小萩は言葉を失い、そのまま父に駆け寄ろうとする。しかし焼け崩れた柱や煙、宙を舞う火の粉は彼女をなかなか近付けさせない。

それでも力の限り叫んだ。

そこで端と気づく。自分の手がまだ乾かぬ血で汚れていることに。

彼女はまた叫ぶ。

声に出さなければ何かが音を立って崩れてゆくを感じるからだ。
掻き消したかった。

気が狂いそうなこの状況を。

そんな時、背後からの声が小萩を呼んだ。

『目を覚ますでござる、小萩殿！！』

誰の声だろう…？

聞いた事がある声。

ああ…この声は………

「さ、なだ殿？」

そして…今、自分は…？

自分は今、どこにいる？

そこで小萩はふと、我に返った。

「…帰ろう」

これは悪夢だ。

そうだ、そうにちがいない。

そう考えている間もずっと幸村の声が小萩を現実に戻そうと呼びかける声が喧しく頭に響く。

「ああ、夢なんだ…」

小萩は声がする方へと向かった。

その時、小萩は気が付かなかった。

現実へと向かう自分の背中を、一つの影法師が炎の中から見つめている事に。

影には恐ろしい程明るい橙色の瞳が二つ、危険な光を宿して瞬いていた。

小萩が現実に帰ると、そこにはけたたましい叫び声と音が溢れていた。意識が朦朧として何の音かは分からない。ただ、何故なのだろう…幸村が今にも泣きそうな顔で

「ここには、怖いモノもござらんし、只の悪夢でござる！！！！例え

小萩殿のお父上が居なくても、それがし達が居るでござる！！！！！
だから目を醒ませ！！おはぎ殿！！」
と言っているのだけは、はっきりと分かった。

小萩は飛んでしまいそんな意識の中でなんとか返事をした。その瞬間になつて

嗚呼、自分は一人では無いのだ…と安心感に包まれた気がした。

結局、小萩が目を覚ましたのは翌日の昼過ぎになつてからだつた。
うつすらと目を開ける。

同時に障子がカラリと開いた。

「おはよう」

佐助である。少しだけやつれ、目の下にも薄い隈があつた。

小萩は

「おはようございます」

と言おうとして、自分の声が掠れて出ない事に気が付く。

(昨日僕は何かしたのだろうか？体の節々も痛い…)

彼女は困惑して色々考えを巡らせる。

しかし、それでも思い出せない。

佐助はそばにあつた小さな土鍋を引き寄せると小萩に渡した。蓋を

開けると中身はお粥。

「無理に言わなくていい、これ食べな」

佐助が差し出した手には引っ掻き傷など生傷が目立つた。

思わずその傷に視線がいく。

すると佐助は傷を隠すようにして笑顔で誤魔化した。

「ああ…これ？これは、なんでもない」

傷を見て、小萩は昨夜何があつたのか…否、自分が何をしたのかを
思い出した。脳裏に浮かぶ必死な顔の幸村と佐助や、部屋に響き渡
る絶叫。

あれは自分が叫んでいたのだ。恐らく手の生傷はそんな自分を止める時に負ったもの、と刹那に推測する。

推測して、小萩はとても悲しげな顔をした。

その場で謝りたくても…声が出ない。

それをもどかしく感じる。

「小萩？」

佐助はひどく狼狽した。

彼女を傷つけまいと誤魔化しても、もう通じない。

けれども、佐助は何て声を掛けたらいいか解らなかった。それでも彼は彼なりに何とか言葉を絞り出す。

「小萩、お前は悪くない」

「そうだぞ！」

いきなり障子が開いて幸村が飛び込んできた。

こればかりは佐助も驚く。

「旦那？」

「小萩殿は悪くない！悪いのは小萩殿が見た夢でござる！」

「はあ？」

そんな暴論は聞いた事も無いぞ、という言葉で佐助はギリギリで飲み込んだ。

小萩は涙を拭くのも忘れてぼかんとしている。

それを見た佐助は、小萩は啞然とした顔が一番多いと思ってしまった。

（まあ規格外な旦那を見るとそうせざるおえないのも解るが…）

結局、佐助は沈黙を選んだ。自分の出る幕ではないと感じたからだ。

「元氣出せ！！小萩殿！！」

幸村は無理やり自分の小指を小萩の小指に絡めて『指切り』をする。やはり幸村の手にも生傷があった。

「もう自分を責めてはいけなくてござる！約束だ！！」

幸村によって無理やり約束させられ、小萩は只頷くしかなかった。でも、不思議と涙は止まっていた。

それを見て幸村も笑顔になる。

「じゃあ早速御館様に挨拶に行くでござる！」

「ちよつと旦那…！先に着替えさせようぜ？寝間着じゃヤバイ…。

それにご飯！」

「あ…：そつでござつた。これは失礼もつした！」

「はいはい部屋から出ようね、大将」

佐助は幸村に部屋から出て行くように促すと、綺麗に畳まれた着物を小萩のそばに置いた。

「空夜のおさがりですまねえな…：とりあえずそれ着てくれ。丈は詰めたから大きさは大丈夫のはずだぜ？」

そつ言つて佐助も部屋を出て行つた。

小萩は急いでお粥を食べると用意された着物の袖に腕を通す。もう、二人に心配をかけさせてはならないと彼女は心の中で自分を強く戒めた。

「真田 源二郎 幸村、入ります！！」

「うむ、入れ」

幸村が襖の前でお辞儀して部屋に入った。後に次いで小萩も入る。

部屋には岩のような男がいた。

小萩が新しく仕える事になる『主』武田信玄である。

信玄は幸村に向かい合うようにして胡座をかく。

幸村より一回りも二回りも大きい体格は見るものに威圧感を与え、

思わず小萩は居住まいを正した。

「御館様、隣にいるのがこの度佐助の弟子になつた小萩殿にござい
まする！」

小萩は深々とお辞儀した。声が出れば、自分が名乗るべきなのだが、
ここは幸村に手伝つてもらつた。

「小萩：か。良い名前だ。僕は武田信玄、甲斐の猛虎と呼ばれている。そなたの父からの使い、御苦労だった。ここは気に入ったか？」
信玄は先程のしかめ面から一転して笑顔で小萩に話しかけた。

面食らいつつ小萩は声が出ない分、力強く首を縦に振り肯定の意を主張した。

「御館様、只今小萩殿は喉を痛めて話す事が出来ないのをごさいます」

「うむ、佐助から事情は聞いている。大変だったな。喉が治れば、また来るが良からう。小萩よ…今は養生し、それから存分に修行するがいい。忍としての働き、期待している。もう、下がって良いぞ。幸村は残れ」

小萩は再び御辞儀すると静かに部屋から退室した。

「お帰り。御館様は怖かったか？」

外に控えていた佐助が話かけた。

小萩は笑顔で首を横に振った。

「そうか、良かったな。あ、小萩さ、ちよいとこっちズレて。…もう、もうちよつとこっち…うん、避難完了」

佐助は小萩の手を引くと自分の方へ引き寄せる。

小萩が動いた数瞬後に、ズガンつと盛大な破壊音と爆風が小萩の頂を撫で上げた。

振り返ると赤い色の弾丸が綺麗に飛んでいく最中であった。

「ぐああああああああああああああああ！！！！」

弾丸の正体は幸村だった。

空へ放たれつつも大声で元気に叫んでいる。

そして慌てて散らかった部屋を見ると

「ふ…甘い奴め」

信玄が拳を前に突き出した姿で不敵に笑っていた。

何があつたのかは小萩にも否応なしに解った。

「……………」

「小萩、そこにいると危ないよ」

佐助が（今度は肩を掴んで）半ば強制的に自分の庇護下に引き寄せた。

その目の前を

「お・や・か・た・さ・ばああああああああああああああああああああ！！！！」

と戻って来た幸村が再び叫びながら、信玄に向けて蹴りを入れようとした。

その時、視界が突如真っ暗になる。

「……………」

「小萩の精神衛生上、良くない物だから規制中だ。音が聞こえても気にするな、絶対に」

どうやら佐助が、手で小萩の目を覆ったらしい…。耳に入ってくる幸村と信玄の訳解らない叫び声や拳の応酬としか思えない生々しい音が響く中、ふと小萩は思った。

（僕はここでやっていけるのかな…本当に…）

そんな彼女の心配に答えるように佐助は呟く。

「安心しろ。俺様も最初は思った、仕える先を間違えた…ってな。

ほい、もういいぞ」

一気に視界に光が戻る。

気がつけば音が止んでいた。

見ると幸村と信玄が二人で庭に大の字に転がっているではないか。

「まあ、アレだ。『気にしたら負け』ってヤツ？」

佐助が笑顔でそう言うと、慣れた手つきで二人の手当てをし始める。小萩曰わく、その笑顔は悟りを開いた仏陀のような笑みだったそう…。

彼女は自らの師匠、佐助の苦勞が少し解った気がした。

そして明日から本格的に修行に入る事を佐助から言い渡された。

やがて夜になり、小萩は寝る直前に一抹の不安を抱いた。

すごくぼんやりとした…嫌な予感がするのである。
でも、そんな不安も寝入り時の心地よさに掻き消えてしまい、彼女は次第に眠りの国におりていった。

その頃…安芸の『宮島』にて一つの不穏な動きがあった。

「それで、例の者は見つかったのか？」

「似たようなのはね…。裏はこれから取るつもり」

巖島神社の境内。

月下の瀬戸内海を眺める二人の男。

片方は髪が短く、もう片方は長い髪を後ろに束ねていた。

「早く見つけろ…。我を待たせるな」

髪が短い方の男の名は『毛利 元就』。

中国地方の平定と毛利家の復興という野望を持つ『智将』である。

「わかったよ、もっさん…」

向かいでからかうように答える彼の名前は『双月海斗』。

名前の通り、奥州にいる空夜の弟である。

若いがもう立派な策士で、元就の助手を勤めている。

幼さがわずかに残る顔つきは空夜に似て顎の線が細く、中性的である。

「だから我を『もっさん』と呼ぶでない！」

「良いじゃん、ケチ！」

「黙れ！！して、昨今の播磨の不審火…そこにあの『化け物』がいたのだな？」

「…らしいね。まだ子供だけど、戦力は申し分ない。特徴は銀の髪と顔にある横一線の傷だとさ」

「『鼬の嵐雪』が残した『化け物』の力…我の策に利用しない手は無い」

「…ふうん」

「どうした？」

「別に。どうもしないよ、ただ…もっさんは相変わらずだなあ、って思っただけ」

海斗は一人微笑む。

元就はそれを無視した。

相手を煙に巻く、それが海斗の得意技と知っているからだ。

「元就様……ひゃうっ?!」

奥から来た巫女が二人の目の前で派手に転けた。

彼女の名前は『ひなた』。

元就の従姉妹にして、『風を呼ぶ』不思議な力を持つ巖島神社の巫女である。

だが部下の間では、その能力よりも『何も無い所でよく転ける』事で知られているが…。

「ひなたちゃん？大丈夫？」

海斗が心配そうに除き込む。

「あ、はい！大丈夫です！」

真っ赤になった額を撫でながら、彼女は元気良く返事をする。そんな彼女の様子に、元就はため息をついた。

「……呆れて物も言えぬわ。…少しは巫女としての威厳というものを…」

「まあまあ…いつもの事でしょ、もっさん」

海斗が軽薄な口調で答える。

「だから、『もっさん』では無い。何度言えば解るのだ…そこに居直れ！切り捨ててやる！！」

「も、元就様！？」

「嫌だよ、面倒くさい」

「何！？」

「ふ、ふふ二人とも止めて下さい…！！」

そうしている内に瀬戸内の夜も更けていった。

2 (後書き)

友達からの指摘で気がつきました。お見苦しいものをお見せしてすみません。

3 (前書き)

皆さんのキャラがぶっ壊れています……

第参卷

「風来坊」

早朝、とある森 …

その開けた場所に、一人の男が立っている。

迷彩柄の忍装束に鉢金といういでたち……猿飛佐助である。

「四十、四十一、四十二、四十三……」

どうやら数を数えているらしい。

「四十五、四十……」

ガサツ…

森の奥から一人、現れた。

「師匠、見つけました」

小萩だった。

着ている修行着は泥だらけで、手には巻物を握っている。

どうやら隠された巻物を探すという修行の一環のようだ。

「おう、ご苦労さん。次は泥だらけにならない努力が必要だな、小萩」

「はい！」

小萩が武田に入ってから、もう1ヶ月が経過した。小萩は佐助の師事によって術に磨きをかけている。手合わせもなかなかのもので、時には空夜とする事もあった。元々、彼女自身が忍である父の手解きをうけていたので佐助が教える事は少ない。

それが普段から仕事が多い佐助にとってありがたい事だった。佐助は彼女に約束した通り事件の手掛かりを探っている。だが、正直に言って著しい進展は無い。それが次第に佐助の悩みの種になりつつあった。

修行を終え、館に帰ると幸村が待っていた。

「佐助、話があるでござる」

「わかった。小萩、ちよつと席を外してくれるか？」

「はい、分かりました。では真田殿、僕はこれにて」

小萩が去るのを見送り、幸村は佐助に耳打ちした。

「小萩殿の事で何か分かったことはござるか？」

「いや、これが全然…」

ため息をつきながら佐助は答えた。

「そうか…」

「手掛かりが少ない上に、何より彼女の記憶が欠けているのが難点さ…」

「小萩殿の記憶？」

「まあでも手掛かりになりそうなもんはあつたぜ、旦那。嵐雪の手紙の中にな」

「なんと…?!」

「手紙の暗号を解いたんだ。小萩は播磨から来たらしいから、かなりの距離をほとんど寝ずに来たみたいだな」

「播磨といえば細川殿の領地にござる！」

「ああ、だが落城された。小萩の父親はその時の戦で巻き込まれた

んだと…そこまでは小萩も覚えているらしい」

大名達が群雄割拠するこの戦国乱世に、その手の落城話は数多あったので二人はさほど気にしなかった。

「それでだ、大将。その落城話には一つ奇妙な噂が流れている…」
「…噂？」

「播磨に現れた化け物…噂によれば、あつという間に兵を蹴散らし、火を放つて城を崩したらしい。城下では『毘沙門天の使い』だとか騒がれているのさ」

「それは何とも不思議な話でござるな」

「不思議な話なら、もう一つ。旦那は小萩の年を知っているか？」

「いや」

「十五か十六らしいぜ」

「な…?!」

幸村は目を丸くした。

「正直俺様もびっくりしたさ。なにせ、あいつの外見は十過ぎにしが見えなかったからなあ。生まれつきなのか違うのか、原因は不明だ…」

「じ、十五、六ならもう年頃の女子でござる…!」

「はいはい、そんなことはさておき、俺様は播磨を偵察しに行くから少し城を留守にするぜ。幸い、御館様からの任務もあるしな。くれぐれも屋敷のもん壊すなよ？後、着物もちゃんと畳むこと!」

「承知したでござる!」

「あと、小萩には播磨に行ったつてのは秘密つてことで」

「それも承知した!」

「頼んだぜ、旦那」

「どれくらいで戻る予定なのだ？」

「一晩か遅くても二晩だな」

そう言つて佐助は夜が明けないうちに播磨へと飛び立った。

翌朝、小萩が佐助を探しに幸村のもとにやって来た。

「おはようございます真田殿。師匠はいらつしやいますか？」

「小萩殿、佐助は任務で出かけたでござるよ」

「任務ですか…。僕も手伝いたかったです」

「佐助の帰りを待つのも立派な任務でござる」

「そうですね？」

小萩は首を傾げる。

「今日は佐助が居ないから修行も進まないでござろう。小萩殿、これを機に城下を案内するでござる！」

小萩はきよとんとしつつも

「あ、はい…！」

とついでいった。

「うわぁ…」

初めて見た甲斐の城下の町並みに小萩は感嘆する。

ちなみに彼女は外行きの着物を持って無いので、幸村が子供の頃に使っていた赤い着物に袴の格好で出歩いている。

おかげで信玄からも「幼き時の幸村を思い出すな」と言われ、少々むくれ気味だったが、普段と違う景色を見て彼女の気分もガラリと変わった。

「いい所でござろう？」

「はい！こんな大きな城下町は初めてです！」

「なら、はぐれないよう手をつなぐでござる！」

幸村は小萩の手を掴んだ。

「え…ちよつ、真田殿！？」

「まずは団子屋からだ！！」

幸村は小萩を引きずる形で元気よく町へ走って行く。

こけそうになる度に小萩の悲鳴がわずかに漏れたのは言うまでもない。

「団子とお茶を二つ頼むでござる！」

甘味処に入るなり幸村は注文した。

「あらあら幸村様、今日はどうなされたのですか？そちらのお方は…？」

「新しく城に入った小萩殿にござる。今日は城下の案内で来たのだ」

「はあ…こはぎ…あれ？でも、この子…男子ですよね？」

団子屋の娘は目を丸くする。

すると小萩は消え入りそうな声で答えた。

「…僕、女です…」

「えええ？！し、失礼しました！！」

この手の質問は道行く人々に何度も言われたので慣れてきた。

それでも小萩は泣きたくなかった。格好もさることながら長い髪も後ろに括っているので、確かに自分でも男にしか見えないのだ。

「あの…どうして男子の格好をなさっているのですか？」

「新しく来たばかりなので着物が無くて…真田殿から拝借を…」

「そうなんですか？お可哀想に…」

娘が団子とお茶を出しながら、小萩に話しかけてくれる。

甘味処で食べた団子は佐助が作ったのと同じ位美味しかった。

その後、二人は見世棚の品物を見て市場の中を歩き回り、そこで沢山の珍しい物を知ったが、何よりも道行く人々と親しげに話す幸村が眩しくみえた。

その光景を見て、小萩は不意に佐助から言われた事を思い出す。

『旦那はな、人を疑えないのさ。素直過ぎるんだ。だが、御館様と民を思う心は誰にも負けない。守るモノがあるから強い。俺様はそう思うから仕えているんだぜ。お前にも、いつか分かるよ』

「そっか…」

小萩はやっと自分の師匠の言葉を理解した。

「僕にも守るモノがあれば…強くなれるのですね」

そう思い小萩は幸村の元へ向かおうとして、一人の老人が目映った。

何かを探しているのか、大きな箱を下ろして草むらを一生懸命にかき分けている。見るに見かねて近づいた。

「何かお探ですか？」

老人に尋ねたその刹那、背後から何者かが小萩の鼻に布を押し当てた。

「な……………!?!?」

布には薬が染み込まれているらしい、意識が一瞬で遠のいていく。なんとか抵抗しようと、小萩は力を振り絞って腕を突き出した。

が、虚しく空を掴んだだけ…。

しかも、死角に入っているのか、幸村を始め人々は気付いていないのだ。

(さな…だ、どの…)

やがて薬が廻って小萩の意識が落ちた。

「久々の商品だ。傷つけるなよ！」

「は！」

老人と男は小萩を素早く箱に収めると足早に退散する。

その跡には小萩の髪紐だけが落ちていた。

その頃、甲斐の道中にて…

「ふわああ…。なんか面白い事ないかねえ…。な、夢吉？」
派手な格好をした男がこれまた目立つ『大太刀』を肩に担ぎ、ふらふらと歩いていた。

彼の名前は『前田 慶次』。
恋に生き、相棒の仔猿『夢吉』と共に諸国を漫遊する傾者^{かぶきもの}である。

「キキッ」

夢吉は返事をするかのように鳴いた。

慶次は、とある理由で『上杉 謙信』の世話になるべく、のらりくらりと旅をしている最中である。

「しっかし、疲れたなあ…。謙信のとこまで後何日かかるんだっけ…？まあいいや！夢吉、途中の茶屋で休むか？後、甲斐に寄ったついでに赤いお兄さんにでも挨拶しとかないとな！」

「キキッ！」

「よし！そうと決まれば頑張るぜ！！！」

そう言つて慶次が大太刀を傾けた時、運悪く、通行人である男達に鞘の端が当たってしまった。

「うお!？」

男がそばにいた老人を庇った為、背負っていた箱の紐が切れてしまい荷物が弾き飛ばされる。それらはやがて片側の土手に落ちて見えなくなってしまう。

「ああ…!？荷物が…!！」

青くなる男達の顔。

これには慶次も慌てて近寄った。

「あいやすまねえ、おっちゃん達!!荷物は俺が取ってくるからそれで勘弁な!!！」

素直に謝罪して、急いで荷物を取りに行く。

そんな慶次を見て男達は気まずそうに言った。

「あ、いや…荷物は儂らで…！」

「いいつて、いいつて!!！」

遠慮する男達を無視し、慶次は軽々と荷物を持ち上げる。

「ん…なんだ？このデカイ箱…爺さん、これ、なんか入ってるの？慶次は最後に持ってきた大きな箱を上下に揺らそうとすると、慌てて老人が止めた。

「揺らしてはなりません！それは中に大切な品物が入っているのが故に、壊れてしまつては商売になりますね！」

「あ、そうなのか…?すまねえ。はい、荷物はこれで全部だよな？」

突如の老人の訴えに慶次は再び謝ると、男に箱を手渡す。しかし先程の衝撃のせいで壊れたのか、いきなり箱の上蓋が外れて転がった。当然、中身が飛び出る。

「し、しまった!?!?」

箱の中身は一人の子供……つまり、先程誘拐された小萩が縛られた状態で箱に収められていたのだ。小萩は無理やり薬で眠らされているのでピクリとも動かない。

「爺さん、これは……?!」

「み、見るな!?!?!何でもないわ!」

焦った男と老人が小萩を箱に戻そうとする。だが、慶次の方が速かった。あっという間に彼女を自分の背後に置いたのだ。

「中身が子供……てことは、お前ら『人買い』だな!?!」

さっきの明るく快活な表情とは打って変わり、慶次は怒りを露わにする。

「だとしたらなんじゃ!?!行け、彼奴の腕をへし折ってやるのだ!」

「へい!?!」

老人の命令に従い、男が襲いかかった。けれども慶次は

「答える！何が目的だ！！」
誤解を解こうとしたが、彼女は聞く耳を持たない。
たじたじになった慶次に、小萩がクナイを投擲しようとしたその瞬間……

「おはぎ殿おおおおお！！」

小萩の視界が反転した。

幸村が小萩に突進してきたからである。

小萩は幸村に抱きかかえられる形で吹っ飛ばされた。

「息災でござったかあああああああ！！？」

呆けつつ微かに慶次は呟いた。

「真田の……赤いお兄さん？」

そんな慶次の存在を無視し、幸村は涙目になって尚も叫ぶ。

「いきなり居なくなっただけで心から心配になり申したでござる……
ては迷子になられたのだな！！」

「真田殿……」

呆気にとられた小萩。けれど名前の訂正は忘れなかった。

「だから『おはぎ』じゃなくて『小萩』です！！何度言えば気がすむのですか！それと迷子じゃありません、拐かされたんですよ！！
！あの男に……！！」

小萩が真つ赤な顔して怒鳴り、呆けたまま座り込んでいる慶次を指さす。

「へ？俺?!」

再び面食らう慶次。

「ま、前田慶次殿!？」

やっと慶次の存在に気が付く幸村。

「…知り合いなんですか？」

仏頂面のまま小萩が聞いた。

「ああ!この方は前田 慶次殿にごぞる」

幸村が驚愕の表情で答えた。

「確かに俺は慶次だけど…。逆だよ、逆!俺は犯人じゃなくて、この坊主を助けたの!」

慶次は必死に弁解した。

「なんと!拐かされたのでござるか?!一体誰が?!」

「爺さんと若い男の二人組だったぜ」

「嘘だ!こいつが犯人だ!」

「いや、違うって!そうだ!さっき若い方倒したからそいつに聞け

ばいばい!!」

慶次は地面に倒れ伏している男を指差した。だがそこには誰も居ない。

「居ないじゃないですか!!」

「うっそおお!?!」

「すまぬ、慶次殿…。まさかこんな形で再びあい見えようとは。辛いがこの幸村、そなたを捕縛しなければならぬ」

「僕も手伝います」

「違うから!!二人共そんな目で視ないでくれ、頼む!」

慶次は悲鳴を上げ首を横に振った。

その後慶次は、なんとか目撃者を発見して二人の誤解を解いたのだ。
った…。

3 (後書き)

慶次……登場しましたね……。本当に、慶次ファン、幸村ファンの皆さんごめんなさい。

小萩の誘拐騒ぎの後、とりあえず三人は適当な飯屋に入った。席順は小萩と幸村、そして向かい合う様に慶次。

三人共、無言のままだった。

「と、とりあえず慶次殿の疑いが晴れて良かったでござる！！」

頑張って幸村が話しかけるが、二人の反応はというと

「あ、ああ……………」

「……………そうですね」

どんよりとしていた。

それでも三者三様、腹の音だけは仲良く同時に鳴り響いたので、何か注文する。

「坊主、好きな頼みな。俺が奢るからさ！」

慶次はお向かいでお茶を飲む小萩に話しかける。が、

「……………」

無視された。

見かねた幸村が注意する。

「…慶次殿、小萩殿は女子でござる」

「え…?!」

固まる慶次。

その様子を小萩は猫の様に目を細めて見ていた。

「す、すまねえ…!」

「いいです。言われ慣れてますから」

目も合わせずに返される。口ではそう言っているが、本心は違う。慶次はこれならまだ怒鳴られる方がマシだと思った。

「キキッ」

いつの間にか夢吉が小萩のそばに寄って来る。

「……?猿?」

驚く小萩。夢吉は素早く肩に乗ってきた。

「夢吉ってんだ。俺の相棒!可愛いだろ?」

「え?ええ…」

小萩は慣れない手つきで夢吉の頭を撫でる。

夢吉のおかげで少しだけ空気がほぐれたところで幸村が話題を出す。

「慶次殿は何故、甲斐へ参られたのでござるか?」

「いつもの旅さ。謙信にお呼ばれされたからよ」

「なんと！謙信殿が？」

「ああ、次会う時は多分…川中島だな」

「む、負けないでござる！」

「楽しみにしてるぜ！」

そんな熱い二人そっちのけで小萩は一人パクパクとご飯を食べていると、不意に視線を感じた。

見上げれば、慶次がこちらをじっと見ていた。

「な、なんですか？僕はこの通り、成長期なので…このご飯はあげません！」

思わず井を抱きかかえ、自分側に引き寄せる小萩。それを見て慶次が苦笑した。

「いや、そうじゃなくて…。さっきからあんたの顔の傷が気になってさ…事故か何かなのかい？」

彼の質問に対して小萩の表情が少しだけ強張る。その様子を心配するように幸村が言った。

「小萩殿、無理に答える必要はないでござるよ？」

「あ、悪いい…今は無かったことに」

と、慶次が再び謝りかけた所で

「…事故ですよ」

顔に走る傷を指でそつとなぞりながら、小萩は呟くように言った。
まるで自分に言い聞かせるように

「単なる事故です」

繰り返して答えた。

「そ、そっか」

流石に慶次も、それ以上は聞かなかった。

その後三人は黙々と飯を食い終わると飯処を後にした。

外に出ると空がもう目にも鮮やかな茜色に染まっている。

「じゃあ俺はこれで。また会おうな二人共！」

「キキツ！」

慶次と夢吉は別れを告げる。ほんの短い間だったが、小萩は夢吉と仲良くなったらしく、名残惜しそうな様子で見送る。

「達者でな、慶次殿！」

「さよならです」

そうして慶次はまた旅立った。

「さて…某達も帰るでござる、小萩殿」

「ええ。…あ、いけない…髪紐！」

小萩が慌てて髪紐を探そうとする。

「すまん、返しそびれたでござる…。これでござるじつ。」

幸村が懐から取り出した。拾ってくれていたのだ。小萩は礼を言うて髪を結び直す。

「師匠にお土産で何か買って帰りませんか？」

「それなら良い事を思いついたでござる！」

屈むと幸村は何やら小萩に耳打ちする。聞いた彼女は顔を輝かせる
と、そのまま二人である店へと向かった。

時を遡ること、数刻前…

佐助は播磨に出向いて城周辺の情報収集をしていた。播磨は昔から物資の供給路にもなっており、人通りが多い。そのため、城下の町もなかなか大きかった。だが情報収集の結果…解決の糸口になるような情報は得られず、仕方無く彼は動きやすい夜を待つ。

その間に佐助は不覚にも眠ってしまい、『ある夢』を見たのだった…。

……………

それは、まだ佐助が幼い頃の記憶。一生に一回一度きりの嵐雪とのまともな会話だった。

『おい…小僧』

一人の青年が稽古中の佐助に声を掛けた。青年は整った顔立ちをしているが、世界を倦んだ様な瞳が特徴的だった。声も態度も、疲れた老人の様にくすんでいる。幼い佐助から見れば、彼は枯木のように見えた。

『猿じゃない、猿飛佐助と云う名前が俺様にはある！』

年上に対し、生意気な答え方…。当時の佐助は十になったばかり

の腕白坊主である、致し方無し。

『…同じ事だろう』

『は、違うね！』

佐助は少年に似つかわしくない所作でせせら笑った。
青年は無視して滔々と佐助に問うた。

『…小僧、口の聞き方に注意しろ。まあいい…お前に問う、《強さ》とは何だろうな…何の為に必要か？』

『つよさあ…？』

猿飛少年は考え込む。抽象かつ漠然な問いに答えようと躍起になるが、所詮子供。答はたわいのないモノだった。

『ん……生きるため？』

『ほう、理由は？』

『じゃないと食いつばくれる』

『……………』

青年は溜め息をついた。

呆れて物も言えぬというその態度に、佐助はムツとして聞き返す。

『じゃあ、アンタの答は？』

『ふむ、儂の場合、《強さ》は《弱さ》の象徴だ…。人である限り
純粋な《強さ》は得られぬ。真の強さを手に入れるのは至難の極み
…だが、それを探すのも一興。
小僧、儂も亦…解らぬよ』

『ちえ…！だつせーの…』

唇を尖らせる佐助。

『小僧…小僧は《強さ》を、【力】が欲しいか？』

『そんなの誰でも欲しいに決まっているさ。俺様だつて欲しいし、
アンタもだろ？』

『うむ』

『何で俺様に聞いたの？』

『…理由などない。偶々お前が目についたからだ。儂は今、新しい
技を作っている。無論、【力】を得る為に』

『ふうん…。てか忘れてたけど、オッサンは誰？』

『もう一度言うが、口の聞き方に気を付けるがいい。儂の名はらん
せつ…八夜、嵐雪だ。猿飛の小僧、覚えておけ…《強さ》や【力】
には魔が宿る。ただ求めるでは何時しか身を喰われる…。それでも
欲しいなら…儂を尋ねるが良い』

『はん、俺様は力も欲しいが安定した生活が先さ。そっちの方が魅力あるもの』

『…そうか。それも亦、悪くない。だが、小僧が言うには些か奇妙だな』

『うるさいな！俺様はげんじつしゅぎなの！』

『現実…か。ならばその現実の為、より稽古に励めばいい…。さらばだ、猿小僧』

嵐雪は涼しい顔をして去って行く。その後、二人は出会う事も無く、時が経つにつれて佐助自身も先程の問答は綺麗さっぱり忘れていた。

……

(ん……夢？らしくねえな、俺様……)

佐助は立ち上がると伸びをする。

(さっきの夢は嵐雪のオッサン？…うーん、《強さ》ねえ…いかにもあの鼬が言いそうな……)

佐助の中で何かが閃いた。

「《強さ》…だって？」

佐助はそのまま地べたに座り込むと何やら思案し始めた。

(颯の嵐雪…強さと力……新しい、技…？まさか、小萩は……？
クソ！どおりで出ないわけだ…！！)

佐助は慌てて姿を消した。

何を考えているのかは彼のみぞ知る。

一方、甲斐では幸村と小萩が城に帰る途中であった。

「真田殿、良い買い物をしましたね」

小萩は壺を抱えていた。ちょっと重そうである。

「小萩殿、重くないでござるか？」

「大丈夫です」

「そうでござるか。そういえば……小萩殿、某を呼ぶなら『真田殿』ではなく『幸村』で良いでござるよ？」

「それはなりません。失礼に値します」

「別に大丈夫でござる。城の皆も小萩殿も家族のようなものでござる

る！」

「そうなんですか…？…なら…幸村殿、と呼ばせていただきます」

二人は黙々と城に続く坂を登っていく。

しばらくして不意に幸村が「隙あり！！」と小萩が抱えていた壺を奪った。

「わ?!なんなんですか、いきなり!!」

「競争でござる、小萩殿!!負けたら明日のおやつを貰うでござる」
「！」

子供のようなふざけたことを言って、幸村は城へと走って行く。
最初は啞然とした小萩も『おやつ』（多分佐助の団子）が懸かっていると分かれば、

「負けません！」

すぐに幸村の背を追いかけた。

数瞬後、幸村と並ぶ。当然彼は驚いた。

「うおおおおおおおおお?!」

「僕は忍です。走りなら、師匠と互角ですよ！」

幸村と小萩は

走って走って

走って走って

それでも小萩は立ち上がると、汗を拭い壺を抱えて

「僕、が…勝ちま、した」

ニヤリと笑う。

「はあ、はあ…負けた…で、いじ…る」

草村に大の字に伸びた幸村は、悔しそうに言うが顔が笑っていた。

「どうしたん…ですか…？いきな、り競争だなん…て」

「特に、意味は…ない、でござる。ただ…ただ言うなら…」

幸村は再度笑うと

「小萩殿の元気、がなさそうだったからでござる」

それを聞いた小萩は俯いた。

「多分…余計元気減りましたよ…」

「んな?!」

「まあ…感謝します。おかげで少し、吹っ切れました」

やはり彼女は傷のことを気にしていたらしい。

小萩は幸村の手を引っ張り、上体を起こすのを手伝う。
その時、目の前に広がる光景が目に入った。

「あ、城下が…！」

行く前に見た城下が今度は夕日の紅に染まっていたのだ。辺りを囲む山々も同じように紅に染まっている。それと対比する様に空は群青色に染まり下に近付く程、朱から紅へと変化していた。

「綺麗……」

彼女は呼吸すら忘れてしまう程、景色に魅入られている。その横顔は少女のあどけなさが現れていた。

「それがしは此処で見る夕日と城下が好きでござる。自分が守るべきものが一望出来るから……」

「守るべきもの？」

「民と領地と和平！御館様の受け売りでござる！」

「民と領地と和平……なるほど」

しばらく二人は黙して景色を見た。

夕日の赤は次第に夜の青へと様変わりしていった。

その日の深夜、佐助は甲斐へと戻ってきた。信玄の命は忠実に果たした。が、播磨での情報収集ではめぼしい物は無かった。

けれども、全てが全てという訳では無い。それを幸村に伝えるべく佐助は彼の部屋の襖を開けて ……………

伝えるのを止めた。

部屋では幸村が、そして少し離れた所で小萩も寝ていた。

佐助を待っている内に寝てしまったのだろう。二人は着の身着のままだった。

そばには何故か壺が置かれている。

(なあんか兄弟みたいだな…)

そう考えると尚更兄弟に思えてしまう。

佐助は笑いをこらえ、部屋に音もなく入ると壺を手に取った。

壺には蓋がされている。蓋を取ると微かに甘い匂いが鼻先をくすぐる。

中には『あんこ』が入っていた。

佐助は思わず苦笑する。

「こいつあ、俺様への団子の催促かねえ…」

(…しょうがない、作ってやるか。)

そんな佐助の背後で、俄かに襖が開いた。

「戻ったか、佐助」

信玄だった。

「御館様、しー…」

佐助が人差し指を立てて『静かに』というジェスチャーをする。首を傾げた信玄も、床で寝ている幸村達を見て合点すると、ふっと笑った。

「まるで幸村に弟が出来たようだな…」

「妹の間違いでしょうよ、御館様」

佐助が言ったその刹那、寝返りを打った二人の腕が佐助の両臑を殴った。

思わず壺を落としそうになる。

「うっ…政宗殿、いざ尋常に…ぐっ」

「……だんご」

寝言だった。

あまりの痛みに佐助は思わず呻く。

「そりゃないぜ、二人共…」

信玄が吹いたのは言うまでもない。

4 (後書き)

感想をお待ちしています。

第五卷

「初陣」

いつもの稽古をすべく、小萩は夜が明ける前に起きた。

佐助から師事される事、早三月が経過していた。時の流れは早いものである。

最初は佐助と一緒に稽古をしていたが、研鑽を積むにあたって小萩は師である佐助にめったに指示を仰ぐ事はなくなり、おかげで今は一人で稽古をしていた。

顔を洗う為に井戸から水を汲むと、桶に入った水が鏡の様に彼女を映した。

思わず覗きこむ。

髪は佐助が時々梳いてくれたおかげで邪魔にはならなかったが、長い髪は自分にとって先の任務をこなすには少々鬱陶しいと思ったのだ。

「髪…切った方がいいかな…」

小萩は意を決して、懐から薄刃のクナイを取り出した。

その頃、佐助は幸村の部屋へと向かっていた。襖を開けずに外から声をかける。

「旦那、今ちよつといいか？」

「どうした？佐助」

外では言いづらいのか、無言で部屋に入る。

そして、彼は不思議そうな顔をしている幸村の前に座ると口火を切った。

「旦那、小萩はもしかしたら厄介な事に巻き込まれているかもしれない…」

「それは…どういう意味でござる？」

「あくまでこれは仮定だが…小萩は、何か『術』を掛けられている」
佐助は神妙な面持ちで続けた。

「小萩は著しく成長が遅い。髪や爪は僅かに伸びるが、背は全く伸びていない。多分十二、三歳で成長が止まっている。俺様も最初は生まれつきかと思ったけど…あれはれっきとした術による【異常】だ」

「その術は、解けるのか？」

「術の種類によるな…。下手に解こうとすると最悪、小萩が死んじ

まづ…ここは慎重に行かないと。本人の動揺を防ぐ為に旦那は小萩に話すなよ?」

「うむ、心得たぞ佐助」

「それと、今度の戦…小萩にも俺様の仕事の手伝いをさせたい。色々不安はあるが、まあ家事手伝いだけじゃあ可哀想だからさ…」

「佐助が良いと思うなら、俺も良いと思うでござるよ」

幸村と佐助は一通り話し合つと、小萩に朗報を伝えるべく庭へと向かった。

庭では小萩が一生懸命、クナイを投げている。いつもの光景。

だが、何かが足りない。そう、違和感があるのだ。

その違和感に先に気が付いたのは

「こ、小萩殿の髪が…少なくなってるでござるうう!?!」

幸村だった。

その声に反応して、小萩がビクツと振り向く。

見れば成る程、髪がバツサリと切れて、散切りとなっている。

「ゆ、幸村殿…?」

驚愕の表情のまま固まっている幸村を佐助がたしなめた。

「旦那、少ないんじゃないかと、短くなってるの。失礼極まりないか

らソレ…」

「かみ…？ああ髪ですね、鬱陶しいと思って切りました。でも…」

「でも、失敗したんだろ？」

佐助が二の句をつなぐと

「はい…」

小萩はうなだれた。

話を聞くと、どうやら最初は肩位まで切ったのだが、バランスを気にしてだんだん切っていくうちに今の散切りヘアになってしまったらしい。

それを聞いて幸村と佐助は声を上げて笑った。

「あははは…！そいつぁ…」苦勞さん

「小萩殿らしい過ちでござる…」

「師匠、幸村殿…！からかわないで下さい！僕もいい加減怒りますよ…」

「はいはい、俺様が梳いてやるから…ほら、後ろ向きな」

「はあい…」

素直に小萩は佐助の前に座りこむ。

佐助は慣れた手つきで髪を整え始める。幸村は信玄に会う為、その場を後にした。

「かなり短くなるけど良いのか？」

「大丈夫です」

「小萩…」

「なんでしよう？」

「何かやるなら相談しろ」

「……はい」

「前髪も…少し切るか？」

「お願いします」

小萩が前を向くと、前髪を切り始める。

「髪…なんで切ったんだ？」

彼女は佐助の問いにしばらく考え、やや歯切れ悪く答えた。

「この傷は、髪を伸ばしただけでは隠せません。ならば、いっそ切ってしまった方が楽かな…」と

「やっぱり気にしてたか…」

「気にしますよ。でも辛いと思う時、この傷が叱ってくれるんです。」

だから…誇らしいんです。むしろ、年の割に身長が伸びてないのが悩みですよ…」

「そうか。ほい、出来たぞ！」

佐助は細かい毛を落とす為に、彼女の髪をくしゃくしゃと撫でる。

「さっぱりしました。ありがとうございます、師匠！」

「はいはい、どーいたしまして」

小萩が頭を左右に振る。その仕草は、水滴を飛ばす仔犬のようだった。

「あ、そうだ小萩…お前に良い話があるぜ」

「なんででしょう？」

「今度の戦、お前にも俺様の仕事を手伝ってもらおう」

「本当ですか!?!」

小萩は瞳を輝かせた。

「ああ、お前も忍として戦場に出る。だからはい、これ」

佐助は風呂敷包みを取り出した。

「風呂敷？これ…なんですか？」

「いいから開けてみるよ」

言われるがままに開けると、風呂敷の中には服が入っていた。

「師匠…これって、まさか…?」

「修行着じゃ危ないからな。お前の戦装束だ。寝ないで作ったんだから感謝しろよ?」

「はい!ありがとうございます!!」

服の他にも籠手などが色々入っていた。中でも目を引いたのは、鈍く光る『額当て』。それに使われている布には…見覚えがあった。

「父上の、帯…ですよね?」

「よくわかったな。そう、初めて出会った夜にお前が首に巻いていた嵐雪の帯だ。本当は別の利用しようと思ったが、返り血で汚れてたからな。そこしか使えなかった」

「ありがとうございます!!汚れていたから、もう捨てられたとばかりに…」

小萩は額当てを握りしめ、お辞儀した。

「捨てる訳ないだろ?俺様、無駄遣いとか苦手なんだわ…」

佐助が頭を掻きながら言う。その顔はまんざらでもない笑顔だった。

「じゃあ、俺様は忙しいからこれで」

「あ…待って下さい、師匠！」

「…？小萩、どうかしたか？」

「えーと、僕の髪…後ろは梳いてくれましたが…何故、横だけ残したんでしょう？」

確かに髪は全体的に短くて軽いが、真横に伸びる髪はそのままだった。

それを見た佐助は困ったように笑う。

「んー…俺様の…趣味？」

そして戦当日…

小萩はいつもよりも早く起きて戦装束に着替えた。

籠手を詰め、腰には忍刀を差し、額当てをつける。

小萩は自身を姿見に写してみた。

サイズは申し分なく、山吹色の服は彼女に似合っていた。裾がわずかに蕾のように膨らんでいて、動き易さを重視したのか、意外と軽く感じる。

鏡の中に写る自分は何故か自分と思えなかった。

彼女は思わず笑ってしまう。

けれども、嬉しかった。心の中に隠しきれない程に。気づけば、見れば空はずいぶんと明るくなっていた。佐助の呼ぶ声が聞こえると、小萩は部屋を後にした。

「小萩、入ります！」

部屋に入ると、信玄と幸村、佐助の三人がいた。

「早いな、小萩」

「おはようござる、小萩殿！！」

信玄にかぶせるようにして幸村が元気よく挨拶した。彼も戦装束に身を包んでいる。額に巻いた赤い紐に赤い鎧、それはまるで焔を彷彿とさせた。首には相変わらず六文銭を下げていた。

「おはようさん」

佐助も迷彩柄の忍装束だ。

「…おはようございます」

小萩は挨拶をすると襖をそっと閉めて佐助の横に座った。

「忍装束…なかなか様になっているな。初の仕事、期待しているぞ」

「小萩殿もいよいよ戦に出るのだな！応援するぞ！やるー！」

「小萩、これよりお前の仕事を言い渡す！」

「はい！」

信玄が厳かに言う。皆が姿勢を正した。

「佐助、地図を」

佐助は地図を取り出すと目の前で広げる。信玄は地図の上に駒を置いていった。

「小萩、お前には佐助の合図で武田騎馬隊の先導をしてもらおう」

「はい！」

小萩は神妙な顔で返事をする。

緊張しているのがわかった。

「騎馬隊を動員し、奇襲する。遅れは許されぬ」

「了解」

「まあ、陣営の方から俺様が合図するからこの地点まで行けば、後はお前が陣営に戻るだけ。仕事としては簡単だ」

佐助が地図に描かれた道を指で指す。

「なるほど……」

「ただ、相手が伊達軍だからな。向こうも先手を打ってくるだろう。小萩は、隊を先導しつつ、常に方向を注意してくれ。最悪、道を変えてもいい」

「了解」

ここで信玄がまとめた。

「ならば、小萩は騎馬隊の先導を、佐助は空からの偵察を頼む。幸村は、存分に闘え」

「了解！」

「了解！」

「承知いたしました！御館様あー!!」

「では、これで解散とする」

信玄の号令で幸村達はすぐ退室した。

(初の仕事…絶対成功させないと)

退室した後、小萩は庭にいた。

少しでも緊張した心を解きたいからだ。けれども、任務の手順を頭で何度も反復する度に緊張が重くのしかかってくる。そしてなによりも重く感じたのが…

「空夜さん…確か伊達でしたよねえ」

そう、彼女からして姉弟子の空夜と闘いになるかもしれないという予想だった。戦で出会えば、お互い忍として戦わざる負えないのが見習いの自分に技術を叩き込んでくれた恩は数知れない。経験の差で負けてしまいかもしれない。それだけは何としても避けなかった。

小萩がもう何度目になるか分からぬ溜め息をついたその時

「心配か？」

信玄がやって来た。

「御館様…!?!」

小萩は急いで立ち上がる。

「よいよい、ワシも座る方が楽だ。小萩も座ればいい…」

「…そうさせていただけます」

信玄が座るのを確認した後、小萩はちょこんと横に座った。信玄が大きすぎて小萩は人形のように見える。

「小萩、お前の気持ちも分からんではない」

「え…？」

「確かに初めての事は誰でも心配するのだよ」

「それは…御館様もでしたか？」

小萩は恐る恐る質問した。

「ん？ワシか？ワシは…どうだろうな。ただ、幸村の初陣の時を思い出す…」

「幸村殿…？」

「ああ、あやつは初陣が決まってから当日までほとんど寝れなかつたらしくてな…夜中じゅう稽古をしていた。五月蠅いから仕舞いは佐助が一服盛って眠らせた覚えがある」

「……………」

「ん、どうかしたか？」

「い…いいえ、何も」

小萩は首をぶるぶると横に降った。

「戦になると人が変わったかのように働くのが奴だ。そして無事に帰ってきた…。大丈夫、お前も無事に帰ってくるとワシは信じているぞ」

信玄は小萩の頭を撫でた。信玄の手は彼女の頭を余裕で包める程大きい。

「御館様…」

「御館様ああ、そろそろ出立にございまする!!」

「む、もうそんな時間か？」

信玄は立ち上がると一際大きな声で命令した。

「幸村、馬を出せ！」

小萩も元の持ち場につく。持ち場には佐助がいた。

「小萩」

「はい？」

「無茶するな。ダメだと思った時は引け。三十六計逃げるに如かず、だ」

「了解しました」

「じゃ、用意はいいか？行くぞ！」

「はい！」

小萩は初めて戦に身を投じた。

佐助と共に先発したが、後からついてくる馬の蹄の音が彼女の心を鼓舞してくれるようだった。

その頃、伊達陣営では…

「うへえ、さす兄相手取るのめんどくさあ…」

空夜がダレていた。地面に転がり伸びをする姿はまるで日向で寝ている猫そのものである。

「そういうな、政宗様の命だ」

鋭い目に左頬にある刀傷が特徴的な男が空夜をたしなめる。男の名は『片倉 小十郎』。

『竜の右目』として有名な政宗の有能な側近である。

「そうだけど、昨日の若が放った仕事の後にこれは無いよ」

「気持ちはわからなくはないが…仕事は仕事だ」

「へいへい」

空夜がやる気なさげに返事をする。

そこへ

「用意は出来たか、小十郎！」

三日月を称えた青い兜に、右目を眼帯で覆った男がやって来た。

そう、この男こそが奥州筆頭にして独眼竜『伊達 政宗』である。

「あ、若！」

政宗は地べたでダレる空夜を見て一喝した。

「ダレてんじゃねえぞ、空夜！戦なんだからシャキツとしやがれ！」

「仕事押し付けた本人に言われたくないよ、ソレ！自分の仕事をちゃんとやってから言いなつて…」

「政宗様、もう時間です」

「Oh！もうそんな時間か！！」

政宗は馬に飛び乗ると、皆を煽るかのよう大声で叫んだ。

「行くぜえ！！Let's party！！！！」

『うおおおおお』

！！！！！！
『』

伊達騎馬隊が大地を震わせるように、そして自身を奮わせるように叫ぶと政宗を筆頭に駆けて行く。
見れば空夜も土煙を避ける為、鳥に乗って空から政宗を追跡していた。

「やれやれ、ま…戦はこうでなくちゃね！」

伊達と武田が今、ぶつかると。

6 (前書き)

初の戦いです。戦闘描写がグダグダです。

第六卷

「空夜 VS 小萩」

「旗を出せえ！！」

「はい！」

「小萩殿！その帯を取ってくれぬか？」

「はい！」

武田の陣営では幸村が慌ただしく動いていた。つられて小萩も働く。

その様子を佐助は胤糸の調整をしながら眺めていた。

「十蔵……」

部下を呼ぶ。

「は……何でしょうか、隊長」

真田十勇士が一人、『算 十蔵』がどこからともなく現れる。

「小萩がやる騎馬隊の先導…何かあったら手伝ってやってくれ。ただし、本人には気づかれないようにな」

「御意」

十蔵は返事をするや否や素早く消えた。

「よし、まあこんなもんだろ…」

佐助もまた、偵察をしに飛び上がった。

かくして、戦は始まった。

とある場所で佐助からの合図を待っている小萩は無意識に父の形見である忍刀を握る。

実は佐助が空への偵察へと飛び立った後、小萩は幸村の戦いを見た。炎を纏い、戦場を駆けるその姿に小萩は驚いた。同時に、魅入られたのだ。

本当はずっと見ていたかったが、任務があるので小萩は騎馬隊と共に陣営を離れた。

小萩はしきりに空を見る。

すると、佐助の凧から光が三回見える。

鏡の反射、それが三度瞬いた時…任務開始の合図だ。

「行きます！ついて来て下さい！！」

『おう！』

騎馬隊の先に回り、小萩が赤い布を持って皆を先導する。

空模様は曇りだが、視界は良好。

障害物や畏も無い。

（行ける！）

しばらく何も無く、騎馬隊は列を成して無事に進軍した。

そして丁度、中間地点まで進んだその時　　∴小萩から見て右側から爆弾が投擲された。

「∴！？」

小萩は素早く手裏剣で爆弾の導火線を切断し、爆発を阻止する。

それを待っていたかのように別の爆弾が破裂した。

その煙から躍り出る黒装束の人物。

「騎馬隊はつけええええん！！」

空夜だった。

小萩は騎馬隊を守るように飛び出す。

「小萩君！」

途端に後方から十蔵も出てきた。

「算殿?!」

「小萩君は行って下さい!!」

「いえ、ここは僕が相手します!算殿は騎馬隊を…!」

「でも…」

「いいから!」

「…了解。ご武運を…!」

十蔵は小萩から赤い布を受け取り、代わりに騎馬隊を先導し始めた。残ったのは小萩と空夜だけ。

「空夜さん…、久しぶりです」

「あれ、小萩?髪短いから分かんなかった…さす兄は?」

「…師匠じゃなく、僕が相手だ。あなたに騎馬は潰させない!」

「ふ、言うようになったじゃん…じゃあやろつぜ、正々堂々と!」

剣呑な笑みで背中にある二本の忍刀を引き抜く空夜。同時に小萩も忍刀を抜いた。

日が陰ったその時、二人はほぼ同時に動いた。

奇襲は成功。

だが陣営に戻って来たのは、十蔵一人だけだった。十蔵が帰ってくるや否や、佐助が問いかける。

「十蔵！小萩は？」

「伊達所属の忍に遭遇、小萩君は只今、交戦中です！」

「何！？空夜と？」

佐助が助けに行こうと立ち上がるが、信玄が止める。

「よせ、佐助。小萩ももう一人前…お前も師であるなら、あやつのが成長を見届けよ！」

「しかし御館様…」

「駄目だ。幸村の援護をしろ！」

「……了解」

渋々承諾する佐助の背中を雨粒が叩いた。雨足は次第に強くなっていき、ほとんど前が見えない程の土砂降りになる。

「小萩…必ず、帰ってこい」

佐助の呟きは雨にかき消されて聞こえなかった。

豪雨である。

視界は不明瞭。

灰色一色の世界に、ぶつかる刀達の火花だけが、一際鮮やかに光った。

「おらおらおらおらおらあー!!」

空夜が優勢。

力の差もさることながら、技も素早い。

「くっ…」

小萩は苦戦しつつも、何とか耐えていた。腕や足には幾筋もの赤い線が浮いている。

雨の中での戦闘では、徐々に体力が削られていく。けれども、互いに攻撃の手を緩めなかった。

正に、【一所懸命】な闘い。

当然二人は巻き込まれる。

「…な!？」

「ああ…!？」

二人は空中に投げ出された。

「ちっ…!!！」

空夜は舌打ちをすると糸を木に引っ掛け、小萩の腕を掴んだ。おかげで木にぶら下がる形となる。

下には増水した川の濁流が轟々と威嚇するように唸っていた。

「しっかり捕まってる！」

空夜が小萩を引き上げようとした時、支えになっていた木の枝が歪な音をたてて折れる。

「……………!？」

二人は濁流に飲み込まれた。

「遅えな、空夜の奴……………！」

「きつと武田の忍と戦っているのでしょうか!」

政宗と小十郎は襲いかかってくる歩兵達をなぎ倒し、雨音にかき消されぬようにお互い怒鳴りながら会話する。

「でも猿はいるぞ?じゃあ、あいつは誰とBattleしてんだ?猿以外ならもう決着ついてんだろ?」

その時一人の足軽が慌ててやって来た。

「筆頭!大変だ!」

「どつしたあ?」

「空夜さんが地滑りに巻き込まれたってさっき伝令が…!」

「What's?そりゃ本当か?」

「へい!」

「……………どつする小十郎?」

「搜索させましょう。政宗様は戦に集中して下さい」

「ああ。空夜が地滑りで死ぬようなタマにゃ見えねえしな」

その頃、武田陣営でも似たようなやり取りがあった。

「信玄様!!」

「どうした!!」

「申し上げます…。たった今地滑りが発生しました。場所は、小萩君が交戦中の…」

「なにっ!?!」

信玄は立ち上がる。その顔には焦りが浮いていた。しかし、そこは甲斐の猛虎…動揺することはない。逡巡し、やがて静かな声で

「算よ、海野を連れ、二人で探しに行ってくれ…」

「御意!!」

ザツとぬかるんだ地面を蹴って算と海野は小萩を探しに行った。

その頃……

「ぶはぁっ!!」

小萩は空気を求めて水面から顔を上げると辺りを確認した。

「空夜さん!?!」

空夜は近くにいた。

当たりどころが悪かったのか意識が無く、糸が切れた人形のように浮いている。

小萩は急いで流木に掴まるとそこに空夜を寄せて気道を確保した。体が小さい小萩にはそれくらいしか出来ない。

一応、首筋を触って生死を確認。

触ると温かい、生きている。

見れば、濁流に押し流されて、周りの景色はどんどん変わった。

今のところ人が来る心配さえもない。

ここで大声で叫んでも無駄と思われた。

(僕は……どうしたらいい?)

その問いに答えしてくれる人間は居ない。

小萩は一か八かで叫んでみた。

「誰かあああああああ！たすけ……」

最後まで言えなかった。

なぜなら、小萩の体を二度目の浮遊感が襲ったからだだった。二人を襲ったモノ……それは

(……………滝!?)

見てみると、高さはそんなでもなかったが問題は……

滝壺に突き刺さる木の尖った断片が、今まさに投げ出された二人を串刺しにせんと揃って上を向いている事だ。

こんな所に落ちたらひとたまりも無い。小萩は体が粟立つのを感じた。

時が止まったかのように全てがゆっくり進んで見える。

そんな彼女の視界の端に何かが映った。それは空中に散る幾枚かの黒い羽 …

(……鳥?)

そして、やって来る『死』を目前にして小萩は目を瞑った。

「小萩くん!!」

「小萩……!!」

箕と海野が探しに行くと、反対の方向からも

「空夜さーん!!」

「どこだあああ!!」

と呼ぶ声がした。

「あれは……伊達の?という事は空夜もか?」

「びびりやぶさつびり……」

「とりあえず、二人を探そう」

箕達は必死に河を辿って呼びかけた。
雨はそんな二人を嘲笑うかの如く更に強く降り注いだ。

一方、戦場では

「Hardな雨だな！真田幸村！！」

「このような雨など…、戦に関係ないでござる！」

「Ha！確かにな！」

政宗は六本の刀を、幸村は二本の槍を構え、身を乗り出し、声高に叫んだ。

「それがしは真田 源二郎 幸村！！伊達 政宗殿、いざ尋常に勝負せよ！！！！」

「奥州筆頭、伊達 政宗！！推して…参る！！！！」

雨の中、紅と蒼の光が炸裂した。

まるでこれからが本番だというように。光の中、幸村と政宗は互いの武器で攻撃を相殺し、一步も引かない。

そんな二人の頭上に大きな紫電がこれまた派手にスパークした。

暗闇の中、誰かが呼ぶ声がする。

「小萩、小萩！！」

薄目を開ける。

そこにいたのは

「小萩！？大丈夫か？！」

ずぶ濡れになつた空夜が必死に小萩の肩を揺する姿だった。

「くうや…さん？」

髪留めを失くしたのか、ほどけた前髪が垂れて一緒誰かと思った。空夜は安心したのか大きな溜め息をつくど、ドツと座り込んだ。

「あれ、確か滝に落ちて…」

「知らん！俺が気がついたら、何故か此処にいた」

「…そうでしたか。てっきり僕達は死んだかと…」

まあ、この川が三途の川に見えませんかね、と小萩は立ち上がろうとして…激痛に襲われた。

「！？」

「どづした？」

「足が…痛くて」

「足?...ああ、こりや挫いたな...。一応、手当てしておこうか?」

空夜は腰の巾着から布を出すと小萩の足を一気に固定した。

「まあこんなもんだろ...。どうする?」

「どうするって...何を?」

「お前、この足じゃあ...陣営帰れないだろ?」

「確かに...」

「それに反対側らしいな。寧ろ伊達に近い...うーん...ま、いいか、背に腹は代えられねえし」

空夜は立ち上がると小萩の腕を肩に回し、立ち上がる。

「来いよ、ここからだったら伊達領が近い」

「...いいんですか?僕は敵ですよ?」

「何言つてんだ...敵以前にお前は俺の妹弟子だろがよ!」

「分かりました。お邪魔します」

二人は森の中に消えた。

とある木の上、気配を消した一人の忍がいた。

顔の上半分を覆った兜をつけているので、口元からは表情を読み取れない。

「……………」

忍の名前は『風魔 小太郎』。伝説の忍という肩書きで名を馳せ、北条氏に仕える忍である。

その彼こそが滝から落ちる一人を救った張本人だった。

そこに何の思惑があるのか、そもそも何故そこにいたのかは彼のみが知る事である。

「……………」

森に入る二人を確認すると、風魔は幾枚の羽を残して去っていった。

戦場では決着が着いていた。

雷に二人共弾き飛ばされ、幸村を佐助が、政宗を小十郎が受け止める形となった。

「その辺にしときな、旦那」

「政宗様、もうこれ以上は…」

従者のいたわりに二人はというと…

「まだまだあ！」

「うるせえー！」

がぜんやる気になっていた。

が、佐助と小十郎がさせなかった。

「あのねえ旦那、地滑りも起きてるし此処危険なんだわ…。また今度やればいいじゃん…」

「政宗様はもう少し退き際というものを学ばれたら如何ですか?!」
言ってる事は穏やかだが、さりげなく言葉に殺意が込められていたので双方渋々承諾する。

「ちつ…悪戯に兵を減らすのは確かにsmartなやり方じゃねえしな…。しかたねえ、今日の所は引いてやる！」

「佐助が言うなら…仕方がないでござる…」

「真田 幸村あ！次、会った時は覚悟しとけ！」

「楽しみに待つでござるー！」

と、両者引き分けのまま退陣する事になった。

「何、小萩がまだ戻ってないだど!?」

陣営に戻り、珍しく佐助は声を荒げた。

「すみません、隊長!!」

「もういい!今から俺様が探しに行く!」

「俺もついて行くぞ、佐助!!」

「旦那は休んでろ!俺様だけで充分だ!」

佐助は小萩がいた場所へと向かっていった。やがて着いたのは地滑りの箇所。

木に残されたのは、糸とクナイだけだった。何が起きたか否応なく佐助にも分かる。

「クソッ……」

雨が、止んだ。

6 (後書き)

次回は筆頭が沢山出てきます。

感想をお待ちしています。

7 (前書き)

史実に基づいたキャラとオリキャラが多数出てきます。筆頭が壊れているので基本グダグダです。

第七卷

「奥州の龍 伊達政宗」

「クソツ……」

佐助は木々を伝い、小萩達をまた探す。手がかりらしきものは空夜の物と思われる糸と小萩のクナイ。

佐助自身、彼女達が死んだとは思いたくもなかった。

現に死体も出ていない以上、生死や安否も分からないのだ。

やがて佐助が川沿いに下ろうとした時、一羽の鳥がやって来た。

「おまえは……?!」

佐助の元へやって来たは、空夜の飼っている【伝書鳩】ならぬ【伝書鴉】だった。

足には紙が括りつけられている。

急いでそれを広げると、中に文がしたためてあった。

文には小十郎の字で、空夜と小萩が見つかったとある。

更に読み進めれば、小萩は風邪を引き、足を挫いているので城で養生させるとあった。

読み終わった佐助は、らしくもなく安堵し、へなへなと座り込んだ。

「……二人共無事で良かった。一時はどうなるかと思っただぜ……」

「…ゆうか…？何だって？」

佐助の言葉には冷気が含まれていた。心なしか、顔に張り付く微笑みすらも氷のように固かった。

「いや、だから…べつ…別に小萩殿が誘拐された訳ではなく、だ…えっとお…ええっとお…」

たじろぐ幸村。しかし、彼に助け舟を送る人は居ない。

「旦那…、語るに落ちまくってるよ」

佐助は笑っていた。むしろ笑おうと無理強いして、頬が引きつっている。当然、青筋も浮いていた。

「さ、さすけえ…こ、これには、深い訳が…！」

先程の勇ましさはどこへやら、幸村は涙目で完全に怯えていた。それはまるで、蛇に睨まれた蛙。現代風に言うならば、浮気がバレて妻に言い訳する夫のようであった。

「いいよ、小萩は無事だったし…」

「あの…」

「話は城で聴こうか…。旦那、城につくまでに話の整理してねえ。後、逃げようと思っても無駄だから悪しからず」

「ひ、ひいいいいいい……!?!」

絹を裂くような（または情けない）幸村の悲鳴が空にこだました。

それから遡る程、半時前：

「筆頭！！空夜が見つかりました！！子供を連れてます！！！」

「Really?!」

「急ぎましょう政宗様……！」

馬の手綱を引き、空夜の元へと向かう政宗と小十郎。
足軽達が案内する場所に空夜はいた。

川に落ちたので、全身ずぶ濡れで寒そうである。

「空夜……」

「よう、若……。もしかして泣いてた？」

「泣くわけねえだろ。お前が死ぬようなタマかったの!」

「けけけ…ざーんねん」

「ああ?」

「空夜…その子供は誰だ?」

政宗と空夜のやりとりが長引きそうだったので、小十郎が半ば強引に話を進めた。

空夜の隣には、なる程…見覚えのない子供が一人。

子供は顔に古傷があり、気を失っても尚、苦悶の表情を浮かべていた。呼吸もなんだか荒い。

「子供?ああ、コイツは小萩。さす兄の弟子だけど、俺の友達だ。敵じゃないよ」

「Friend?お前にか…?」

「政宗様、空夜の友人なら安心できましよう…」

「まあそうだが…。空夜、立てるか?」

「俺は肩がイカレただけで足はなんとも無いが…コイツが立て無い。足を挫いてるし、オマケに風邪も引いちまってる」

「Ok…。なら、治療が必要だな。小十郎、武田にLetter送ってやれ!」

「は…!」

小十郎は懐から携帯用の筆を墨に浸すと文を書き始めた。

その間、空夜は口笛で自分の鳥を呼び出す。文を書き終えた小十郎が鳥の足に文を括りつけた。

「さす兄の所へ…さ、行きな！」

鳥は佐助の元へ飛んでいった。

「よし！じゃあさっさと城に帰るぜ！Speed上げる！！」

『おっ！…！』

小萩の意識が回復したのは城に着いてしばらく経ってからだった。

……………うた？

目覚めにより、研ぎ澄まされる聴覚が拾ったのは鼻唄混じりの女の声。

…だれの？

判らない。けど、優しい声だった。それはまるで…

「はは…うえ？」

目を開けると、自分は見知らぬ寝間着を着て、見知らぬ部屋にいた。小萩はきよとんとした顔で辺りを見渡す。部屋の隅に簡素だが美しい着物を着た妙齡の女性が、鼻唄を歌いながら繕い物をしていた。小萩が起き上がると女性は驚いて作業の手を止める。

「あら？ごめんなさい…、うるさかったかしら？」

綺麗な人だった。髪は漆のように黒く、長い。作業の邪魔にならないよう一つに結ばれている。

「い、いえ…」

「私の名前は喜多。よろしくね、小萩ちゃん」

「え…？どうして名前を…？」

戸惑う彼女に喜多はからからと笑う。

「空夜ちゃんが教えてくれたの。ここは米沢城よ。ああ、無理しな

いで。あなたは風邪を引いている上に足を捻挫したのだから…」

立ち上がるうとした小萩を喜多が優しく止めた。

言われてみれば体に倦怠感が残っている。足も若干痛かった。小萩は黙って布団を被り直す。

「熱は…引いたみたいね」

小萩の額に手を当てる喜多。

その時、襖が豪快に開いた。

「よう！元気になったか？」

空夜である。

何故か片手にネギを持っていた。

格好もいつもと違って紺色の着物に袴の着崩した楽な出で立ちだ。

「空夜さん…。まあまあです」

「それより、肩はもういいの？空夜ちゃん」

「さつき小十郎さんに肩はめてもらったんだよ…。でもしばらく動かすなっって言われた」

空夜は部屋に入り、小萩のそばに腰を下ろすとネギを手渡した。

「それ、頭に巻きな。熱冷ましに効くぜ」

「え…？」

「空夜ちゃん…？彼女の熱はもう下がってるわよ？」

「うそーん?!」

空夜は大げさに目を開けて驚く。

「しまったな…。じゃあ持ってたなよ」

「何故に？」

「それは…まあ、気休め？」

「さてと、私はご飯の用意するから…空夜ちゃん、後を頼むわね」

「あいあいさ〜」

喜多は部屋から出て行った。

「…喜多さんって、綺麗な方ですね」

「城の最強女中だけどな…。小十郎さんの姉なんだよ。まあ、立場的にみんなの『姐さん』な感じだぜ」

「なるほど。あの…」

「なに？」

「色々ありがとうございます」

小萩が畏まって礼を言つと、空夜はフツと笑って応える。

「礼なら若に言え。武田の忍であるアンタを返事一つで受け入れたんだからさ」

「……………」

「とりあえず、ようこそ。米沢城へ…てな」

空夜の言葉は迫力のある濁声に遮られた。

「くうつやあああああああああああああ！！！！」

またしても襖が豪快に開く。

「俺のネギをどこへやったあああ！！？！！」

濁声の持ち主は誰であろう片倉小十郎、本人だった。髪が微妙に乱れている小十郎は小萩の握っているネギを見るなり「無事だったか！」と安堵した。ついてけない小萩。困ったかのように小首を傾げる。

「小十郎さん…病人の前だよ？」

ネギをかつぱらった本人である空夜がたしなめた。

小十郎は空夜に凄まじい目線を送ると小萩の方に向き直り自己紹介した。

「申し遅れた、俺の名は片倉 小十郎 景綱。以後、お見知り置きを…」

「え…は、はい。…お噂は空夜さんからかね…、この様なお見苦しい格好で失礼します」
深々と二人は御辞儀をする。

「ときに小萩殿、できればそのネギを返していただきたい」

「あ…これですね、はい」

ネギを持ち主に返す。すかさず、空夜が茶化した。

「ネギネギネギネギうるせえなあ、小十郎さんは…。畑には幾つもネギが栽培されてんだからまた取ってくればいいんじゃない？」

「空夜！お前には解らないのか！他のネギには無いこの素直な伸び具合…瑞々しい先端の緑色、そして手頃なこの長さ…！こんなのはめったにだな」

「あゝはいはいはい、分かった。わかったよ！」

空夜は耳に手を当て、五月蠅いというジェスチャーをする。

「まあとりあえず、ネギ無事でよかったですじゃんよ…。若は？仕事中？」

「政宗様はさつさとどっかに行ってしまったわね」

「え…また遠乗り…？」

「いや、馬はちゃんと納屋にあった」

「ふうん…」

「今日中に書いてもらいたい書類が山ほどあるのに…どちらへ行かれたのやら」

「ほつときゃ喜多姉が捕まえるっしょ？」

「む…姉上か。確かに」

小十郎は立ち上がるとネギを大事そうに抱えると

「では、失礼した。空夜も小萩殿も政宗様を見つけたら俺に知らせてくれ」

一礼して部屋を出て行った。

「……なんか師匠みたいな人ですね」

「ああ、そうだな。俺もつくづくそう思う…小萩、俺…ちよつくら若捕まえてくるわ。アンタは寝てな」

「頑張つて下さい。僕はお言葉に甘え、もう一眠りさせていただきます」

「おう、お休み」

空夜が出て行くや否や小萩は布団をかぶり直した。体のたるさを少しでも抜かす為に。

やがて眠気に誘われ意識がぼんやりとした頃、誰かがそつと部屋に入ってきた。

喜多だろうか？

それにしては足音がやに重く感じる。

小萩は布団の隙間から音の主を覗き見た。

見事な藍の着流しの裾。足の形からして男か…。

気のせいか、空気の中に酒の匂いが混じっているような気がした。

「うーん、ここに居れば safe か…？」

小十郎かと思ったが、彼より声が若い。まさか…と小萩は思った。

（伊達 政宗殿？）

思っただけで何もしない（むしろ眠気のおかげでやる気も起きない）

状態で小萩は狸寝入りを決め込んだ。

足音は尚も布団の周りを歩いている。

不意に、足音が止んだ。

「ん、布団…？誰かいるのか？」

布団が捲れた。

「で、『誘拐』された小萩は風来坊の旦那に助けられたって…?」

上田城では佐助による事情聴取が続けて執り行われていた。幸村は青ざめた顔をただ頷くばかりである。どうやら、観念したらしい。

「旦那は何で小萩が誘拐されたって分かったんだ?」

「気がついたら小萩殿が居なくて…見たら地面に髪紐が落ちてて…」

「はいはいはい、分かった。で、結局下手人は捕まってるないと、…」

佐助はさっきから一分も表情を変えずに筆で書き起こしている。

「それで小萩に何か変化は無かった?」

「変化? いや、これといって何も…」

「ふむ…。じゃ、戻っていいよ旦那。ご飯になったら呼ぶから」

「てことは…」

「無罪放免。もう俺様に嘘つくなよ？」

「この幸村、もう一生隠し事しないと誓つてござる…」

涙目の幸村。

それを聞いて佐助がやっと

「分ければよろしい！ほい、着替えた着替えた！洗濯物はいつもの場所にね」

表情を変えた。

空気もいつもの優しいものに戻る。

幸村は慌てて部屋を出ていった。

「急がなくても、まだ大丈夫ってか…？なら、俺様も用意が必要だな。でも、とりあえず」

佐助はどこからか割烹着を取り出すと素早く着替え

「飯が先だ…」

厨房へ向かった。

歩くその姿はまさしく《武田のオカン》だった。

「…ガキ？」

政宗は布団を捲って首を傾げた。
布団の中には子供がいた。

「確か空夜が連れてきたんだよね…？」

政宗は更に首を傾げ

「こいつ…girl?boy?どっちだ？」

「梵、いるのか？」

別の男の声がした。

「やべっ…！」

政宗は慌てて何のつもりか小萩の布団に入ってきた。
びっくりしたのは狸寝入りしていた小萩である。

（！？…）

…カラッ

襖が開く。

「梵？…おかしいな…、さっき梵の声が聞こえたような」

そう言つて男は襖を閉め、いずこへと去つていった。

さて問題はその後だった。

政宗は布団に入つたきり出てこない。

(…なにこれ…臭っ！お酒?!)

小萩は寝返りを打つたふりをして政宗をチラ見した。

政宗は

…くう…

寝ていた。

吐く息が酒臭い。

酒瓶を抱えていた。

(師匠…たすけて!)

心の中で佐助に助けを求めた。むしろ、誰でもいいからこの状況をなんとかしてもらいたかった。

小萩は為す術が無いまま、ひたすら誰かが部屋に来ることを願つたのであった…。

それからしばらく経っても、政宗はずっと眠ったきりだった。

小萩は政宗を起こさないようにそっと起き上がる。その時に彼の右目の眼帯が取れかかっているのに気がついた。どうやら寝ている間に結び目がほどけたらしい。

ずれた眼帯を戻そうとしてそっと触れようとした瞬間、政宗の左目が開く。

「あ…！」

小萩は仰け反って距離を置こうとしたが間に合わなかった。政宗が彼女の右手を軸にして、床に組敷いたからである。彼は小萩の細い首を掴んだ。

「かはっ…！」

「空夜の friend と言えども、やっぱり武田の忍か…。生憎俺はヤワじゃねえ、酒呑んでてもな。言え、俺に何かしたか？」

「ぼく、は…何、も」

なんとか言葉を絞り出した。

「空夜に感謝しろ。命は取らねえ。ただ、大人しくしといた方が身のためだぜ？武田の為を思うならな」

奥州を統べる蒼き龍は、そう言ってシニカルな笑みを浮かべた。

「ち、若の奴…どこ行ったんだか…」

空夜は城の隅々まで探し（わざわざ厨房にある壺の蓋まで開けた）、また小萩の部屋へ戻ってきた。

「…小萩、起きてる？」

返事が無い。

やはり眠っているか…。

疲れたので空夜は小萩の部屋に入り浸る事を決め、部屋に入る。そして、信じられない物を見た。

部屋では、いなくなったはずの政宗と寝ていたはずの小萩が互いに睨み合っていたのだ。

しかも、政宗はがっちり小萩の首を床に固定して組敷いている。

空夜が来たことにより二人は固まっていた。

「……………」

「……………」

「……………。……………。あ、さーせん。お邪魔しましたあ」

空夜は襖を閉め直した。

外に出た後、大声で小十郎を呼ぶ。

「小十郎さーん！若、見つけたあ！！」

その声に驚いて

「な！？おい、空夜…！？」

政宗が部屋から飛び出た。

「くそっ！！完璧に撒いたつもりだったのに…！？」

「若ぁ…俺達から逃げられると思ってんの？後、女子に乱暴はマズイよ…」

「はぁ？！あのガキはどうみてもb o yだろ！？え、そうじゃねえの！？」

「政宗さまぁああああ…！」

「げつ小十郎!？」

もの凄い表情で小十郎がやって来た。
因みに、小十郎だけでなく

「梵!この書類どうすんだよ!！」

伊達成実に

「政宗様あ、始末書と書類に判子を!！」

鬼庭綱元…つまり伊達三傑が揃ってしまった。

政宗はたちまち青い顔で三人から逃げようと、空夜の腕を振りほどこうとする。が、なまじ慌てているだけになかなかほどけない。
最終的には

「ちったあ俺を休ませろやああ!！」

逆ギレした。

そして、それが小十郎達の逆鱗に触れたのだった。

「政宗様が毎日仕事を丸投げしなければ早く済むのです!大体、政宗様は幼少の頃からですね…(以下略)」

「とりあえず、来い!！」

「サボってはなりません！この綱元、ちゃんと監視しますから！」
脇を固められ、まるで罪人のように連行される政宗。
その顔からは生気が無く、目が完璧に死んでいた。

「俺のBreak timeが…」

「がんばれ」

そんな城主を空夜は満面の笑みで見送った。

小萩は部屋で座りこんでいた。

(また空夜さんに助けられたなあ…)

耳を済ませば、政宗の逆ギレする叫び声と小十郎の叱責、誰かの脅し文句が聞こえる。

しばらくすると襖が開き、空夜が入ってきた。

「ごめんな、うちの若がド変態で。首、大丈夫か？」

「本当に…。一時はどうなるかと…」

「なんか酔っ払っていたみたいだから許してやって」

「なおさら許せませんよ」

「まあまあ…。それより足は？」

「足？ええ、だいぶ…痛みが和らぎました」

小萩は包帯が巻かれた足をさすった。

「なら良かった。熱も下がったみたいだし…体のたるさはどうだ？」

「若干残っている感じがしますが、問題ないです」

「じゃあ飯にしようぜ、もう少ししたら喜多姉が知らせるだろうしな…」

そう言った直後、喜多が二人を呼ぶ声がした。

三刻程前

小田原城にて…

浅黄色の着物を着た一人の男が砥石でひたすら小刀を研いでいた。

「……………」

男の髪は鮮やかな赤色で遠目から見ると炎のようだった。

毛先がてんでバラバラに伸びているから遠目からすると尚更である。顔は前髪で隠れて、表情も分からないが辛うじて見える輪郭から端正な顔立ちだと思える。

もう誰だか分かるだろう。そう、あの時空夜達を影で見守っていた忍『風魔 小太郎』である。彼は商売道具のクナイなどを研ぎつつ、珍しく考え事をしていた。

空夜の傍らにいた子供、小萩についてである。

空夜達が濁流に飲まれた直後、ちょうど任務の帰路につく途中だった小太郎は、視界の端に黒い物を見たような気がした。

振り向けば、空夜と小萩の二人が流されている。彼は空夜達を引き上げるべく、糸を伸ばした。

その刹那に二人がふっ、と消える。

驚く小太郎。

なぜなら恐怖で竦み上がっていた小萩が、空夜を担いでいきなり別

人のように空を蹴り上げたからだ。そして滝壺にある木々をすり抜けた。

けれども、それでは危機を脱した事にはならない。その先にある浅瀬には岩があり、着地に失敗すれば重傷を負うだろう。

彼は糸を引つ掛け、二人を安全な陸地に叩き込む。

少々手荒ではあるが、命がなくなるよりマシであった。

彼が空夜の生死を確認する為、降りてきた時、小萩は獣のように唸っていた。

その姿は、さつきとは随分様変わりしている。まず、黒髪が銀色に染まり、波打っていた。何より鮮やかなのは橙色をした炎の双玉。

その瞳には敵意と警戒が滲み出ている。

纏っている気配も野生の獣が持つそれ。

どう考えても、人ならざる『何か』だった。

小萩はしばらく小太郎を警戒すると、力尽きたのか倒れてしまった。倒れると同時に、髪も黒に戻っていく。

後は二人の呼吸を確認し、目が覚める前に姿を消しただけだった。小太郎はそこで回想を止め、手裏剣を丹念に研ぎながら彼は考える。見知らぬ子供から溢れ出る殺意や敵意、まるで何かに憑かれてるような感じであった。

あれは、人間の持つ『モノ』では無い。

「……………」

小太郎が全ての武器を手入れし終えた直後、小さな人影が二つ、彼に飛び込んで来た。

『…したあ…』

可愛い着物の幼い女兒達だった。

この二人は戦場で彷徨っていた所を保護された姉妹である。現在、主である北条氏政の命で小太郎が保護者として引き取り、育てていた。

この姉妹、誰かに顔がよく似ていると思うのだが、誰に似ているのか分からない。

「こたあ！仕事なの！！」

「しごとなの！！」

姉の言葉をオウム返しする妹。
続けて言うが

「えーとね、えーとね…なんだっけ？」

「なんだっけ？」

忘れてしまったらしい。

小太郎は黙って首を右に傾げた。

「うーん、うーん」

「うーん…」

「……………」

思い出そうとする姉妹の前に、今度は首を左に傾げる小太郎。首の

角度が違ってしまつのではと思つほどの傾斜である。

「……思い出した！……じいじが腰痛めたの！湿布だつて！」

「しつぷだつて！」

『じいじ』というのは氏政の事を示すのだろう、それを聞いて合点したのか彼は二人の頭を撫でると、引き出しから小さな薬壺を取り出す。

「こたあ！おんぶ」

「こたあ！抱っこ」

「……………」

二人のむちゃくちゃな要求に見事に応える小太郎、その姿に『伝説の忍』の面影は無く、まるで年の離れた兄弟：或いは親子のようだった。

「はい！ご飯大盛り、一丁！！おかわり欲しい人は？」

「はい！」

「はい！！俺も！」

「俺も！！！」

『お願いしやす！！姐さん！！！！』

喜多の声にムサイ男達の返事が集う。

ここは米沢城の食堂。一番やかましい場所である。

小萩から見て、上田とは家一軒分広く感じた。

「うわぁ……」

「小萩、そこだと迷子になるぜ？俺達はこっち！」

「え？……」

二人は先程とは打って変わって、落ち着いた上品な部屋に着いた。部屋の中には見事な漆の御膳が五つ並んでいる。

「ここ……どこなんですか？」

「若の食事部屋」

それを聞いて小萩は酷く恐縮した。

「そんな…！？城主と一緒にの部屋で食事など…！！」

「いいんだよ、若だから！」

「空夜さん！今なら誰も居ないし、引き返しましょう…」

「だあいじょうぶだって！若に礼を言いたいんだろ？ほれ、噂をすれば影だ！」

襖が開いて政宗達がやって来た。

「ほら、食事ですよ政宗様。いい加減元気を出して下さい」

「うるせえ…」

「梵が往生際悪いからだよ」

「全く…。まあ無事に仕事は済んだのですから、後は自由ですよ…
つて早いな空夜」

「ちいつす！珍しいじゃん、若の仕事が早く終わるなんてさ！」

「半分は景綱がやったようなもんだ」

「梵は判子だけ」

「お前等…、余計な一言多すぎなんだよ！つたく」

上座に政宗が座り、順々に皆が座っていく。

「おお、小萩殿。こちらに来られたという事はもう体調は大丈夫な
ので?」

「はい、おかげさまで」

「小萩、若に言う事は?」

小萩は慌てて政宗に礼をする。

「あ、はい!ぼ…僕、は武田の猿飛佐助師匠の弟子『小萩』です。
この度助けていただき、誠に感謝します…!」

「ああ?礼なんか言われる筋合いはねえ。ただ、ちゃんと飯食って
空夜守れる位デカくなりやがれ、坊主!」

「……………」

「どうした?」

きよとんとした政宗の態度に空夜はこれ見よがしに溜め息をついた。

「あのね…若、小萩は女の子だよ…」

「な…!?!?」

「梵…まさか分からなかったのか?」

「あちゃー……………」

空夜が顔を押しさえた。

「嘘だろ！？こいつは空夜のBoyfriendじゃねえのか？」

政宗は小萩の方へ向き直ると事実を否定し、叫んだ。
だが

「僕、女です。年齢は多分、十六です」

小萩の言葉が政宗の脳天に重く響いた。

「そんな…！」

情けなく座り込む政宗。

「いや、事実だし」

「お前ら、知ってたのか…？その、girlって…」

「勿論ですとも！」

「傷あるけど女の子って分かったぜ、俺は」

「元より空夜は『男嫌い』。そんな奴が子供とはいえ男子を連れてくるとはとても思えん」

「俺はさす兄から教えてもらった」

しれっと答える外野達。

政宗は気まずさを覚えた。

「ていうか、若は知らずに『あんな事』したんだっけ？」

「あんな事？ 梵がなんかやったのか？」

成実の問いに空夜はニタリと笑って

「小萩に襲いかかった事だよ」

政宗の失態をバラした。

「く、空夜さん……」

「うわぁ……最低」

「政宗様……」

辺り一帯の空気が冷えた。

政宗は弁解した。

「Wait! Wait! あん時は酔っ払って前後不覚だったん……」

「政宗様 ああー!! 年端もいかぬ女子に襲いかかるなどなんたる没義道!」

ここで小十郎がキレた。膳をひっくり返さんばかりの怒りで小言が始まる。

「ど、どっします……?」

「とりあえず冷めちまうから食おうぜ。若は…ほっときな」

見れば、空夜は両手に二つずつ御膳を器用に持っていた。

「あ、俺の膳ちようだい。綱元のも」

成実と綱元は小十郎と政宗の膳を安全な場所に移していた。

「俺の名前は伊達成実、隣にるのが部下の鬼庭綱元。で、向こうで説教されてんのが、ぼ…じゃなかった…伊達政宗。よろしくな！」

「小萩です。よろしくお願いします」

「とりあえず！いったただっきます！」

『いただきます』

成実、綱元、空夜、小萩の四人はご飯を食べ始めた。

最初は戸惑い気味な小萩も、ご飯を食べると箸が止まらなくなる。

「…おいしい」

「小十郎さんが丹精込めて育てた野菜だからな、不味い訳ないだろ」

「え…小十郎さんが？」

小萩は目を丸くした。

「今朝に収穫したんだっけ？」

「ああ。俺達の日課だからな」

「なるほど、という事は時々空夜さんが持って来る野菜は全部小十郎さんの？」

「ま、そういう事」

そういうと空夜は漬け物を口に放り込む。

他の二人もあつという間に食べ終わってしまった。

啞然とする程の健啖ぶりである。

気がつけば、小言も済んで政宗も小十郎も食べていた。

そこに

「若、この蕪食べないなら貰うぜ！」

突如、空夜が政宗の御膳にあつた煮物の蕪に箸を刺して（マナー違反）素早く奪った。奪われた政宗は猛抗議する。

「てめ、空夜！！返せ、俺のturnip！！！」

「早い者勝ちだつっつの！」

「はあ！？ふざけんな！！！」

「政宗様！行儀が悪うございます！！空夜も！刺し箸などのほか…」

「隙有り！！！」

何故か政宗が小十郎の御膳から蕪を盗った。

「H A H A H A！小十郎のturnip盗ったり！」

自慢気に笑う政宗。対して、空夜達は顔面蒼白。視線は政宗の背後に注がれている。政宗が振り向けば、そこには

「……………ほう」

極殺モードの小十郎がいた。

彼が立ち上がると同時に、四人は政宗を見捨てて一気に部屋の外へと避難する。

部屋から出た瞬間、政宗の悲鳴が城中に響いたのだった。

7 (後書き)

えー…グダグダに終わりました。ギャグを加えた結果の失敗です。今回は政宗と空夜くくやが沢山登場しました。空夜は友達から借りたキラなので、正直動かしづらいです。まあ、モデルがいるのでなんとかありますが…。

次回は喜多さんが暴れます。乞うご期待下さい。

8 (前書き)

ひたすら政宗がサボりまくりです。政宗ファンの皆様ごめんなさい
m (——) m

第捌卷

「女豹」

小萩が米沢城で保護されてから約三日。足の捻挫も良くなり、彼女はそろそろ甲斐へ帰る準備をしなければならない。

だが城で色々世話になったので、何か礼をしないと失礼だと思った小萩は何か手伝いをしなければと決意した。

朝方、小萩は城の廊下を歩く空夜を呼び止める。

「空夜さん！」

「ん、どうした？」

「何かお手伝いとか…僕に出来る事ありますか？足の調子も良くなったので、少しでもいいからお礼がしたいんです」

「うーん…手伝い？手伝いねえ…」

空夜は天井を見上げ、しばらく考えると

「あ、じゃあさ、小十郎さんの畑仕事！それ、手伝いなよ」

「解りました！では畑に行ってきます！！」

小萩は顔を輝かせ、急いで畑へ向かった。

その背中を見て空夜は思わずため息をついた。

「なあんか悪い事しちゃったなあ……」

「おい、空夜」

見れば成実がいた。書類の束を重そうに抱えている。

「ヤバっ……」

露骨に嫌な表情で呟く空夜。

「あれ？今日はお前が畑の当番じゃなかったか？」

「うん、小萩に譲った！」

「お前なあ……」

「いいじゃん別に。つーか、小萩が言い出したんだぜ？」

「はあ？そう言っつて小萩ちゃんを陰で脅したんじゃねえだろうな？」

「ああ？！この善良かつ清廉潔白の塊である空夜様が脅しなんて狡つ辛いマネする訳ないだろが！」

「腹まで真つ黒の全身黒尽くめが良く言えるよな……」

成実はわざとらしくやれやれと肩を竦める。

「で、なんで小萩ちゃんがそんな事言い出したんだ？」

「実はさあ……」

空夜は小萩が言っていた事を成実に説明した。

「なるほど……。やっぱり良い子だなあ、小萩ちゃん。どっかの黒尽くめと違って健気だねえ」

「畑に埋めるよ？」

わざとらしく袖を目元にあてる成実に、空夜が笑顔で忍刀を突きつけた。

「でもさ小萩ちゃんって……小十郎さんの畑の場所知ってたっけ？」

「あ……」

空夜は急いで小萩を追いかけた。

「はたけ？ああ畑なら、この先を真っ直ぐ行って、角を左に曲がればあるわよ」

「ありがとうございます、喜多さん！」

「ふふ…どういたしまして。でも、いきなりどうしたの？」

「お世話になったのでお礼をしたいと思ひまして…迷惑、ですか？」

「いいえ、素直にお礼をするのは素晴らしい事よ、小萩ちゃん。弟なら話を聞けば一、二もなく承諾するでしょうね」

「そうですか…」

「畑に行くなら…はい、これ！」

喜多は見事な藍色の手拭いを小萩に差し出した。

「今はそんなでもないけど…、昼間はかなり日が照るから私の手拭いを日除けに使いなさい」

「え、いいんですか？」

「いいの。さ、早く畑に行かないと小十郎が仕事を終わらせてしま
うわよ？」

「はい！これが終わったら喜多さんの仕事の手伝いさせて下さい！
それでは！」

そう言つて小萩は畑へと向かった。

「喜多姉え〜！〜！」

入れ替わるように空夜がやって来る。

「小萩見なかった？小十郎さんの畑へ向かったみたいなんだけど？」

「それならさつき私が道を教えたわ」

「ほんと？助かったあ…。あいつが迷子になったらどうしようかと思っただ…」

「あらあら、ふふ…すっかり、お姉さんね」

「年近いから姉妹もへったくれもねえけど、俺の妹弟子って事にや変わらないからな！」

「はいはい、ああ…空夜ちゃんに手伝って貰いたい事があるんだけ
じ…」

「何？」

「それはね…」

「ふんっ…！ふんっ…！！」

小十郎は鍬を振り上げて畑を耕していた。

すぐ傍には新しい畑が瑞々しく段々と軒を連ねている。

畑仕事をしつつも、小十郎は小萩の姿を確認すると作業の手を休めた。

「…小萩殿、何故此処に？」

「喜多さんに此処にいると聞いて…。お手伝いしてもいいですか？」

「はあ……とりあえずワケを聞こうか？」

「此処で沢山お世話になったので、少しでも礼をしなければと思いまして…そこで空夜さんから係を譲って貰いました」

「うむ、小萩殿が良ければ…」

「あ、ありがとうございます…！」

「では小萩殿、畑の手入れを手伝ってもらいたい」

「分かりました。あの、僕の名前、小萩でいいですよ？僕、それで構いません」

「ん、そうか…。ならそう呼ばせてもらおう」

小十郎は急いで畑を耕し終わると、隣の畑へ小萩を案内した。

「此処って何の畑ですか？」

「ゴボウだ。俺は根の育ち具合を見るから小萩は雑草を抜いてくれ」

「はい！」

しばらく二人は黙々と作業をしていた。

雑草を根まで掘り起こすと土の独特の匂いがする。

最初は調子良かったが、日が昇るにつれて辺りはジリジリと焼けてきた。

急いで残りの雑草も抜いてしまおう。小萩はせっせと籠に雑草を放り込んだ。

やっと畑一つ分の雑草を抜き終える。

「休憩にしよう」

小十郎が切りの良い所で、そう言った。

気がつけばかなりの時間が経っている。

二人は土手に腰を掛けて休み始めたのだった。

長閑な風景だった。周りを見渡せば、胡瓜や茄子が植えられている。

だが、隣の畑には何も植えられていない。雑草だらけであった。

それを不思議に思った彼女は小十郎に質問した。

「片倉殿、これは…？なぜ雑草が…？」

「雑草？ああ…あれは休耕中の畑だ」

「きゅーじゅー？」

「そうだな…分かりやすく言えば休耕とは『土地休め』だ。繰り返

し同じ土地で作物を育てると、その土は荒れて痩せてしまう。だからこうして休ませて、養分を蓄えさせるのだ…」

「なるほど…こうする事で、片倉殿の野菜は美味しくなるのですね」

「…まあ…そうだな」

牧歌的かつ和やかな雰囲気…。しかし、その時だった。

「小十郎様！政宗様がまた消えました！」

部下が慌てて畑にやって来たのだ。

「なんだと？」

小十郎は険しい顔で尋ねる。

「馬は…？」

「今、確認に…！小十郎様も政宗様を探すのを協力して下さい！」

「わかった…今行く！」

「あの、僕も手伝います！」

「じゃあ小萩は森を頼む！」

「わかりました！」

二人は道具の片付けもそこに政宗を探しに出かけた。

途中から別れてやって来た小萩は、やがて森の中の一本道にさしかかった。

「伊達殿お！どこですかあ？！伊達どのお！」

呼んでみたが返事はなく、小萩は森の中を行ったり来たりした。その時、大きな杉の木から手がニョキッと生えて小萩を捕らえた。口を押さえられ、引っ張り込まれる。

「むが…！？」

(シー！…Be quiet！)

正体は政宗だった。傍には馬が伏せている。どうやら隠れてるらしい政宗は小声で耳打ちした。

(今バレたら即Outだ、大人しくしろ！)

(何やらかしたんですか？！)

(空夜に『サボりたいから、馬出せ』言ったら蹴り飛ばされた…)

(自業自得です…！)

(仕方ねえだろ？馬は部下に用意させた…そこでだ、今から俺はDriveするから小十郎に会ってもアンタは「見なかった」と嘘つ

いとけ！絶対！)

(そんな…！)

(これはアンタにとっても良い話なんだけどな？)

(…は？)

(礼したいんだろ？これで俺を助けりゃお互いにCharaだ)

(…本当に、ですか？これで恩返しが成立しますか？)

(Off course！)

(…………解りました)

しばらく逡巡した後、小萩は力強く頷いた。

(よし…！頼んだぜ、小萩)

(お力になれば…ですが)

(Ha！十分だ！)

そう言うと政宗は颯爽と馬に乗った。

「じゃ、あとは頼んだぜ！」

「はー..」

返事をする、小萩は大きく息を吸っていきなり叫んだ。

「見つけました!!森です!!!!」

「お、おい!話がちが…」

最後まで言えなかった。

なぜなら一陣の白い『風』が、長い黒髪を靡かせ政宗に近づくと腕を伸ばし、見事に頭をロックしたからだ。

そして、素早く彼を馬から引きずりおろすと、鞍に備え付けていた縄で捕縛する。

その間、僅か数瞬。

実に鮮やかな手つきであった。

「Shit!?!いつの間に…!!」

『風』は妖艶に髪をかき上げると凄絶に笑った。

「かつて奥州の女豹と謳われた私、この喜多に速さで勝てると思ったら大間違いよ、政宗様?」

『風』もとい、喜多は政宗を引きずって行く。

「ぐ…離せえ…!!」

「おーほっほっほ!!さあ政宗様、向こうで小十郎達が待ちかねていますわよ…!!」

「何!?!」

政宗は青い顔で小萩に助けを求めた。

が、小萩は笑顔で立っているだけ。役に立ちそうに見えない。しかも、喜多に言われるがままついてきているではないか。

「小萩ちゃん、大手柄ね！ありがとう」

「小萩…俺を裏切ったな！」

「いえ、喜多さんには逆らえないので……それによく考えれば伊達殿のサボりを阻止する方がマトモな礼かと」

小萩は微笑んで答えた。

「クソ！テメーを信じた俺が馬鹿だったぜ……！！」

政宗はあんまりにも五月蠅く抵抗するので、猿轡を入れられて連行された。

政宗を連行した後、小萩は様々な人々の手伝いをして回った。今は休憩の為、部屋にいる。

小萩は文机に置いてある手紙を読んだ。手紙は佐助からで、明日の朝迎えに行くことだった。

「師匠……。帰ったら師匠やお館様、幸村殿にも謝らなければ……」

その時、襖越しに喜多が呼んだ。

「小萩ちゃん、ちょっといいかしら？」

「なんででしょう？」

「ちょっと手伝ってもらいたいの……」

「はい、分かりました」

「じゃあ、ついてらっしゃい……」

喜多は小萩の手を引くと別の部屋に向かう。小萩はしばらく彼女の横顔を見つめていた。

「どうかしたの？」

「いえ、喜多さんを見てると母上を思い出すなあ……と」

「ふふ、似てる？小萩ちゃんのお母様はきっと綺麗な人でしょうね……」

「ええ、美しい人でした。凜として強い女性で……僕もいつかあんなりたいです。もう亡くなってしまわれましたが……って、すみません……変な話をして」

「いいのよ、小萩ちゃん。はい、この部屋に入って」

喜多が襖を開けると中には沢山の女中がいた。何故か目が爛々と輝いている。正直言って不気味極まりなかった。

「……………」

「小萩ちゃん！」

喜多が笑う。

「は、はい?!」

小萩は怯える。

「小萩ちゃんはお洒落したことあるかしら？」

「へ…?! な、無い、です」

「なら好都合ね！」

「な、何が…?」

小萩の疑問に他の女中が答えた。

「ほら、ここって男ばかりでむさ苦しいでしょ？空夜ちゃんはあるあだし。ね、だから小萩ちゃん！」

女中達は声を揃えた。

「あたし達が縫った着物で可愛くしてあげる！」

気がつけば、小萩は女中達に囲まれていた。逃げ場は無い。皆眩しい笑顔なのが本当に怖かった。

小萩は涙目で逃亡を諦めた。

人間、潔さが大事。

しばらくして

「きゃあ！可愛い！可愛いすぎるー！」

「傷なんて関係ないじゃない！」

「こっち向いて…きゃああ、可愛い〜！！」

などなど、部屋中に黄色い声が湧いた。

「…はあ………」

小萩は空夜の持つ濃紺の作務衣から、薄紅色の牡丹の着物に着替えさせられていた。

なまじ背が小さいので、まるで日本人形の様。

髪飾りを付けられ、口にも紅を引かれた。

「あの…これ…」

「いいの、いいの！ほら可愛いわよ！自分で見てみなさい」

喜多が持つてきた姿見に写る自分を見て小萩は驚嘆した。

「これが僕…ですか？」

「そうよ。さ、御披露目しましょ」

悪戯な笑みで喜多が小萩をまた違う部屋に連れて行く。

喜多に背中を押され、部屋に入った小萩はそこにいる人物を見て思考が停止した。

「……………小萩？」

「小萩殿！？」

佐助と幸村がいた。ちなみに隣には空夜と政宗がニヤツと笑って座っている。唯一、小十郎だけが平然としていた。

「あ、あ…にやああああ…！?!」

小萩の頭の中で何かが爆発した。顔が熱くなるのが自分でも分かる。小萩は急いで喜多の後ろに隠れようとするが、空夜に阻止された。

「な…なんで師匠が…幸村殿があ！？」

「空夜殿に呼ばれたのでござる…」

「そついつこと」

幸村が元気よく答えた。

「やっぱり小萩は女の子だねえ…俺様びっくりしたぜ？」

「似合っているでござる！」

「良かったじゃん」

「馬子にも衣装…ってやつだな！」

「政宗様、失礼です。よく似合ってるな、小萩」

空夜は小萩の腕を取ると無理やり座らせた。

「今日帰るんですよ？なら荷物を。恥ずかしいから着替えてきます！」

「勿体ないでござる！」

「そつだそつだ！御館様にも見せようぜ！」

そついつと途端にブーイングが来た。

結局、小萩は着物のままで帰ることになった。着いてすぐ信玄にも見られ、小萩はしばらく引き隠ってしまったらしい。

このネタは小萩にとってタブーとなった。

8 (後書き)

これでギャグパートは終わりました。政宗…キャラい感じにおわってごめんね…。いつか君でシリアス書くから！

これからはシリアス編に突入です。舞台は金ヶ崎。例のあのキャラが出ますのでお楽しみに！

9 (前書き)

バサラ3の金ヶ崎睡魔戦に脚色を付けました。
楽しんでいただけたら幸いです。

第九卷

「第五天魔王」

やめて…

兄様、濃姫様、蘭丸…

様

……何故？

何故、置いて行くの……？

嗚呼…今宵もまた、眠れない…

何も、見えない…

なに…も…

金ヶ崎で織田の残党が暴れているという噂が流れ始めたのは、夏から秋に移りゆく頃だった。

最初は虚言ではないかと思っただが、そうではないらしい。

更に、『魔王復活』という耳を疑うような噂も流れ始めたので関ヶ原に備え、同盟を組んだ石田三成の指示の下、武田は金ヶ崎に進軍する事が決まった。

だが、前の戦で信玄が突然病に倒れた。

そのことで武田の兵達はかなりの衝撃を受け、中でも一番衝撃の度合いが大きかったのは幸村であった。不安定な彼の肩に突如として掛かった大役：それは幸村を追いつめるには充分だった。副将の佐助が、なんとか幸村を支えているものの、戸惑いや不安感は拭い去れず、小萩もまたせわしなく働いた。

休もつとは思わない。何故なら休めば、城の中に立ち込める雰囲気、の暗さに負けてしまう：そう思っていたからである。

佐助の仕事が倍になった以上、当然嵐雪の調査は中断せざるおえなかった。

そんな中での金ヶ崎進軍である。

金ヶ崎に続く道、その手前の村。そこに陣を張りその晩、武田軍は村に停泊する事になった。

小萩は貸切となった宿の一部屋に佐助と一緒にいた。

「師匠…最近寝てませんよね？」

クナイを研ぎながら小萩は佐助に心配そうに言った。

「ああ、でも俺様は大丈夫。ん…ほとんど寝る暇なんて無えけど。真田の大將は…どうだかな…」

明るく答える佐助。だが、その両目の下にはくつきりとクマがあった。

「……………また、例の悪夢を見ているのでしょうか…」

「…多分な」

信玄が倒れた後、幸村はしばしば悪夢にうなされるようになった。ここ最近は何く頻繁にうなされている。

本人曰わく、原因不明なので処置無しである。小萩に出来る事は、彼の額から流れ落ちる寝汗を拭き取るくらいだった。

「明日には金ヶ崎だ。小萩も、もう寝ろ…。今夜だけは、俺様もゆ

「つくり寝させてもらおうか」

「はい…あ、師匠」

「ん、どうした？」

「絶対、ご無理はなさらぬように…」

「ああ、お前もな」

「僕は、大丈夫です。多少の無理も出来ます」

小萩は真っ直ぐな瞳で佐助を見る。

その眼差しはまるで鏝の切っ先のようだ。と佐助は思った。
そんな彼女の頭に手を置いて、彼は優しく諭す。

「馬鹿な事言うな、お前の仕事は無理する事じゃない…死にに行く
ようなもんだぜ？」

「死ぬとは言ってます。僕は、師匠や幸村殿に死なれるのが一番
嫌です。だから…」

「はいはい、じゃあ明日は小萩に目一杯頑張ってもらおうよ。再三言
うが、無理は禁物だ」

「はい。では、お休みなさい」

金ヶ崎へ続く道が土砂に埋もれていた為、武田軍は迂回してやっとたどり着いた。陣を張り、兵を揃え、戦略を立てた頃には、もう辺りは真つ暗になっていた。

佐助から渡された仕事をこなし、戦開始の合図を待つ為そこらの茂みに隠れていた小萩は不審な人物を見かけた。

薄幸な顔立ちの美しい女性であった。戦装束を着ている。見れば、顔色が悪かった。しかも数歩歩くと、突然音もなく倒れ伏してしまつたのだ。しばらく様子を見たが少しも動く気配はない。

(あの人は…織田軍の捕虜…？逃げ出したのかな？)

小萩は心配になって女性に近付いた。

「大丈夫…ですか？ここはもうすぐ戦になります。よろしかったら避難を手伝いますが…？」

小萩が肩を揺ると、女性はゆらありと上半身を立てた。

「まあ…可愛い仔犬さん…おいで、市が…なでなでしてあげる……市が抱きしめて、あげる……」

小萩に話しかける優しい慈愛に満ちた声…だが小萩は彼女を見て背中に悪寒が走った。

(この人…目の焦点が定まっていらない！?)

お市が手を僅かに上げたその時、小萩は反射的にクナイを取り出し、
てしまった。その拍子にクナイの切っ先がお市の指先を掠り、ぷつ
りと紅い血の玉が一筋流れ落ちる。

「あ………」

「どうして…?市、嫌われたの?」

小萩は謝るより先に彼女から距離を取った。

彼女は尚も呟く。

「どうして…?いや…いや……市を独りにしないで…独りは、いや
!!!」

叫んだのと同時に彼女の足元から影が湧き出た。影は人間の手の様
になると、威嚇するようにならざる。小萩はその光景を見てゾッ
とした。そして、恐怖で動けなくなつた小萩を、《手》は乱暴に掴
むと、無理矢理主の元へ引き寄せる。

「ひ、い…?!」

「兄様達…市を置いて行つたの…寂しいの…だから、仔犬さん……
市のそばで眠ってね…、そうしたら…市がお友達にしてあげる………」

面妖に、妖艶に、凄絶に、幽玄に、美麗に、邪悪に、無垢に、純粹
に、闇が…魔が桜色の唇を僅かに歪めて『嗤った』。

法螺の貝笛を合図に織田の残党との戦が始まった。残党は思ったより人数が多く、苦戦を強いられるのが容易に想像出来た。

「跳ねて回るのは猿飛の技、ってな！ほれ、一丁上がり！！」

敵を一ヶ所に集め、あらかじめ張った罠に次々と嵌めて佐助は敵を薙ぎ倒す。

「うおおおおお！！」

幸村も鮮やかに敵を蹴散らし、爆進していた。

「調子良いじゃん、真田の旦那！」

「全ては御館様の為！佐助も熱くたぎるのだ！！」

「無茶言つなよ、旦那じゃあるまいし…！」

ひたすら二人が進む先に第一の門がある。

「これは…？」

「繭…とか？」

門には大きな『黒い繭』が巣喰っていた。

幸村が繭ごと門を蹴り破ろうとした時、なんと繭がほどけ始めたではないか。

「ああ…見えない…そうよ…そうなの… …なんて綺麗で、残酷な人…。病痾の海から、市をそっと引きずりだすのね… …あの甘くてやさしい、暗闇の夢から… …」

…ずるううううううり…

お市が逆さ吊りのまま眩き、地面に舞い降りた。お市を孕んだ繭もとい《黒い手》はさながら赤子を産み落とす妊婦の腹のようで不気味であった。

二人の背筋が凍りついた。

「な…！？」

「魔王の、妹…?」

「お市殿、でござるか…?」

「どなた…?市と、お話したいの…?」

お市が音もなく立ち上がる。

「お市殿、出来れば退陣を願いたい。此処から先は危険にございませぬ!」

「…たいじん?いや、嫌よ…市は探しているの…市の場所を…取らないで…」

「探している?誰をだ?」

今度は佐助が問いかけた。すると、彼女は悲しそうな表情で答えた。

「解らない…」

「はあ…?」

「解らない…けど、探すわ…だから」

お市は、天から吊された糸に操られる様にするすると腕を上げる。

「市のじゃまを…しないでね…?」

彼女の背後から出てきた巨大な影が二人に襲いかかった。反射的に、二人は散り散りに避ける。

《手》は地面を叩くと、一斉に細かい手となって攻撃し始めた。

「お市殿!？」

「旦那、諦める。見ただろ？あの目…アレは何も映しじゃない…何も見えちゃいないのさ」

俺様達のことなんか尚更な、と佐助が独り言のように呟く。

「く…お市殿、御免!!」

幸村が槍を構え、攻撃した。

「うおおお…烈火あああああ!!」

幸村の炎が蠢く幾千もの《手》を怯ませ、次々と斬る。意外と呆気なく敗れ、彼女は地面に倒れ伏し、哀しそうな顔で息絶えた。

幸村は沈痛の面持ちで合掌すると、門を開け、先へと向かう。佐助も後に続く。

二人の背後で、お市が地面、否『闇』に沈み込んでいったことに気づかぬまま…。

門を過ぎると、そこには沢山の残党達が待ち構えていた。
槍や鉄砲で襲いかかる。

それを武田の足軽達が率先してぶつかって阻止し、幸村達に道を開けた。

「ひええ！？お市様ああああ、お助けええええええ！！」

「残念だが、魔王の妹は死んだよ！死にたくなけりやあ、とつとと撤退しな！！」

「ふ…我らの第五魔王は死なない！また黄泉返るのだ！」

「なぬっ？！」

「旦那、耳を貸すな！！人が黄泉返るなんて、そんなのあるわけないだろ！」

「…なら、後ろにいるのは誰なんだろうなあ？その目で確認したらどうだ？」

その言葉に幸村は佐助に前を任せ、そつと振り向いた。
そこには…

「嗚呼、痛い…いたいね…ふふ…」

さつき殺した筈のお市が座り込んでいた。幸村の目が一回り大きく見開かれる。

「なああああ!?!」

「あり得ねえだろ、どうなってる!?!」

黄泉返った死人…辺りは騒然となった。

「ふはははは!言っただろう…我らの第五天は『死なない』と!さあ、お市様…曲者はそこに!…その素晴らしき《魔ノ手》で跡形無く切り裂くのです!」

「うん…うん…」

そうしてお市の反撃が始まった。今度は火縄銃の攻撃まで加わったので、二人とも遮蔽物のある場所まで撤退する。

「さつきのは幻覚でござったか!?!」

「いや、それにしては確かな手応えはあつた筈だぜ、大将」

激しい攻撃を紙一重でかわすが、《手》がどんどん速度を上げるので、なかなかに苦しい。

「とおざかるの、ちかづくの…はなれるの、つかまえるの…しんでゆく、あきらめるの…かぎりある、ゆめをみるの…夢を見る夢

を見るゆめをみるゆめをみるゆめをみる……」

ガラスの様な瞳は何を映す事無く只々虚空を仰ぎ、お市は人形のようにぎこちなく歩く。

今にも倒れそうな彼女……しかし攻撃は一切緩めず激しさを増す。

《手》が大きく幸村を始め、武田の兵達を薙ぎ払った。

「ぐあああ……！」

悲鳴が上がる。

「何も見えない……ここはどこなの……？眠らせて……誰か市を眠らせて……！」

「どりゃああああああ……！！！」

幸村の攻撃が掠ったその時、槍から発せられた炎が彼女の髪を焦がした。

すると、人形のような彼女の表情に変化が起きる。

炎に対して異常に怯え始めたのだ。それに合わせ、手も防護の姿勢になる。

「あかり……もえる……あ……ああ……やめて……ほのお……ひかり……いや……！」

お市は幸村達から離れ、逃げ出した。

彼女に続いて足軽達も逃走し、門を堅く閉じてしまう。

「あかり……？なるほど……そうか……！」

「佐助！何かわかったのか?!」

「魔王の妹の弱点は光だ！俺様、忍隊を使って火を調達してくるぜ！！旦那あ、門を越えたら松明にどんどん火を付けてくれ!!」

「承知した!!」

「朝日が出りゃあ、こつちのもんだ!」

そう言うと佐助と幸村は二手に分かれた。

「うおおおおおおお!!」

「幸村様に続けえええー!!」

幸村が先陣を切り、道々にある松明に火を放つ。

お市はすぐに見つかった。

彼女は少し先の砦で地べたに座って誰かと『会話』をしている。

「…痛い、痛い、痛いね…かわいそうにね…本当にひどいのね…ふふ…ええ、そうね…そうよ、そうなの…」

背を向けている彼女に好機と思ったのか、幸村は鋭い突きを入れた。感触は有り。だが、お市は無事だった。

「酷いわ…市の友達を、傷つけないで……」

幸村は驚く。が、お市という人物を見て彼は更に驚愕した。

「こ…小萩殿!？」

小萩が彼女のそばにいた。

首が据わっていない所を見ると、どうやら寝ているらしい。

脇腹には傷があり、出血していた。

幸村の手が震える。自分が刺したのは小萩だったのだ。

「こはぎ…?そう…仔犬さんは、小萩というのね…なんて素敵な…名前…」

妖しい微笑みで、動かぬ小萩を抱きしめた。

「安心して…市が、そばにいてあげる…お友達…だもの」

「く…小萩殿!！」

カラカラ渴いていく口で幸村は小萩を呼ぶ。小萩はぴくりとも反応しない。

「目は醒めないわ…。だって、この子は…夢を…見ているもの…市のおそばで、ずっと…ほら、見て…可愛い寝顔…でしょう…?」

小さな手が小萩の手足や頭を掴み、無理やり立たせる。

市はまるで傀儡士のように沢山の《手》を操り、人形否、小萩に手を振らせた。

「ふふ、兄様…お友達が…出来たの…市、うれしい…」

虚空を見つめ、再び笑うと彼女は小萩を連れ、幸村から逃げた。

「お市殿！小萩殿を返すでござる！」

「いや…なぜ？市のお友達をとるの…？この子は…渡さない。朽ち果てるまで…市の隣で…ずっと一緒なの…」

「お市殿…！」

「この子を傷つけたあなたは…お友達じゃないわ…みんな呼んで
いるから…もう行って良い…？…さようなら」

お市と小萩を引きずり、鉄製の砦の大門は固く閉じた。

幸村は叫んで門に何回も何回も自身の拳を叩きつける。
頭の中が真っ白だった。

小萩を刺してしまったという事実と感触、その先にある最悪の結末
が幸村を絶望に叩き落とした。

「なんてことだ…俺は…あああああああああ…！！！」

その叫びは遠くの佐助にも聞こえる程に響いた。

自分の不甲斐なさを嘆き、見苦しく慟哭するその姿は、牙を折られた『若虎』以外に他ならなかった…。

9 (後書き)

感想をお待ちしております。

第拾卷

「眠れ緋の華」

いいですか？貴女様は魔王…死んでも甦る無敵の第五天魔王なので
す……！

うん……うん……

さあ、俺達を率いて天下をその手に収めてくれ！

そうすれば…兄様達はもどるの…？

ああ、そうですね！必ず信長様は戻ってらっしゃる…！

ふふ…市、うれしいわ…兄様…濃姫様に蘭丸…そして…あれ…？

どうかなさいましたか？

何か…大切なものを…忘れていたような…？

大切なもの、とは？

解らない…。けど、とても大切なの…

はあ…

探さないかね…

……

そうしたら、きっと…きっと…市は帰れるの…あの優しくて甘い…
暗闇の夢に…

「さっきのは……旦那の……？」

忍隊と共に火を周りに放った佐助は、幸村の叫び声が聞こえてきた方向に目を向ける。

「何かあったのか？それに…小萩はどこへ…？」

「いたぞお！」

「殺せえ！」

「やれやれ見つかったか…なら俺様は忍らしく、ドロンっと消えますか！」

やって来た織田軍の足軽達に閃光弾を投げつけた。

《雲隠れの術》である。

佐助は誰にも気付かれる事なく、無事その場を後にした。

幸村の叫び声を頼りに皆へ向かった佐助を待っていたのは、門をこじ開けようと奮闘する武田の足軽達であった。

「副将！この門を破り次第、突入しますか？」

合流した別部隊の隊長が佐助の前に現れた。

「朝日を待とう。今は休め、他のやつらにもそう伝える！」

「はは！」

「で……真田の旦那は？」

「幸村様は、その………」

隊長が向ける視線の先に、幸村はいた。門から少し離れた場所で地面に座り込んでいる。握る拳には血が僅かに滴っていた。

「旦那……何があつた……？」

「すまぬ、佐助……小萩殿がまた浚われた……俺の、せいだ」

幸村が掠れた声で言うなり、地面を殴った。点々と血の花が土に咲く。

幸村はさっきの出来事を訥々と話し始めた。

「俺は小萩殿を刺してしまった…あの夢は、俺の力の至らなさを示していたのか…！」

殴る、また殴る。

地面を殴りつけ、幸村は涙を流した。

佐助は黙って見ている。

「俺は…俺は大将失格だ…！」

「言うことはそれだけか？」

佐助は幸村に近づくと、やおらに彼の頬をきつく平手打ちした。

「…周りをよく見るよ！ここは夢の中か？戦場だろ！アンタは戦をしに来たんだ！違うか？」

「……………」

佐助は溜め息を吐くと幸村の胸倉を掴み上げ、門に彼を叩きつけた。門が激しい音をたてて震えた。

「……………ぐっ!？」

「小萩が怪我して浚われたのは、旦那のせいじゃない…アンタがやるべきは、大将としての務めを果たす事だろ！背負うべきは俺様を含めた兵達全員の『命』と『誇り』…お館様が居ない今、副将の代わりになる奴あ他にもいるが俺様達の大將は、アンタ以外に『替え』が利かないんだよ…!!！」

「皆のもの、お館様の為…勝って帰るでござる…!!」

『おっ…!!…!!』

「んじゃま、ほちほち行きましょうぜ、旦那！」

再び門をこじ開けようとした時、門の内側…織田陣営からいくつもの悲鳴が上がった。

「あなた怪我してるの…??よしよし…」

お市は相変わらず暗く微笑むと、小萩に話しかける。

「紅い華が咲いているわ…綺麗な…みんな染まればいいのに…あの綺麗な紅色に…」

そして彼女は子供をあやすように歌い始めた。

彷徨い入れ底の宿

娘来たりて根色闇

背や震わせ胸抱き

腸を食らうは彼の根っこ

死にゆく呻き華のやう

開け根の国根の社

尋ね訪ねて幾千里

あなた離れて閻魔様

明日の行方を尋ねや来られ

恋の行方を尋ねや来られ…

「お市様…じき、夜明けになります。武田軍は日の出と共に突入…
…如何なさいましょう?」

「……守って」

「は…!では、鉄砲の用意を」

防衛隊長の一家号令で鉄砲隊が作られる。

「みんな偉いわね…そうよ、偉いのよ…ね、仔犬さん…」

お市が小萩の髪を撫でた瞬間、いきなり腕を掴まれる。

「…仔犬さん?」

「うう…うう…」

薄目を開け、苦しそうに呻く小萩の瞳は次第に鮮やかな橙色に染ま
っていった。

「ちっ…!!何がどうなってやがる!!」

「小萩殿は無事なのか!」

その時、門が内側から勝手に開いた。

「突入—————!!」

『うおおおおおおお!!』

佐助は逃げようとした織田の足軽の一人を捕まえ、問い詰めた。

「おい、何があった?」

「ひ、ひいいいい…!!」

「答える!」

「ば、化け物が…」

「はあ？」

「佐助え、援護を頼む！！」

「チツ…命拾いしたな、アンタ！」

命令通り、佐助は幸村の援護にまわった。

「旦那あ、化け物がいるってよ！！」

「なに、バケモノにござると…?!」

「ああ、魔王の妹のこともあるし…此処は氣い引き締まっていくぜ、大将！」

「承知！！」

幸村達は本丸に雪崩れ込み、そして息を飲んだ。

「いや……来ないで…やめて…市の場所を奪わないで…！！」

お市が《手》をかき集め、盾の防護体勢で構えている。

闘っている相手はなんと、小萩であった。

押し寄せる《手》や織田の兵達をもともせず、洗練された無駄の無い動きで薙ぎ倒し、命を取る。

その俊敏さは父、嵐雪を想わせるものだった。しかも傷を負っても瞬く間に治癒されていく。

よく見れば小萩の瞳は橙色の光が燦然と輝いていた。

「ガ……がああアああアアアア……！！！！」

獣のように叫び、荒れ狂う、その光景は唯ひたすら狂気に満ちていた。

「ふ……ふふふ……あはははは……是非も……無し！」

そしてお市もまた、何かが憑依したかのように応戦したのだった。それは彼女の亡き兄……織田信長を思わせるおぞましい姿。

「来たれ、集え！夢を見よ！開け根の国、底の国……嘆き、喚いて、朽ち果てよ！来たれ根の闇、底の闇……！！」

一際大きな《魔ノ手》の攻撃が雨の如く降り注ぐ。

「小萩……！？」

師である佐助の声を無視し、小萩も独特の印を構えた。

（あれは……火遁の……まさか全部燃やすつもりじゃ……！？）

「小萩ど……」

「逃げる、真田の旦那!!」

佐助が幸村を突き飛ばした。

同時に業火が襲いかかる。小萩が発生させたのだ。そして、一度燃え広がった炎は螺旋状に渦巻き、お市を逃がさない。追い詰められた彼女の瞳に光が宿った。

「あ……ああ! ……眩しい! ……兄様……が、もえ……て……いや……いやあ……燃やさないで……全てが消えてしまう……! 市から……全てを、奪わないで……!」

《手》は苦しそうに燃え移った火を払うが、火はなかなか消えない。それどころか、さらに燃え広がって空を焦がし始めた。

「止める、止めるんだ小萩!」

佐助が止めに入る中、彼女はお市に近づくと、いきなり首を絞め始めた。

「あ……っ」

小萩の手に力が加わる。このまま頸椎を折るつもりらしい。瞳に物騒な光が宿っていた。

そこを横から佐助と幸村がすんでのところで彼女をお市から引き剥がそうとする。

「小萩!!手を離せ!」

「小萩殿…もういいでござろう…！」

「……………」

「小萩！」

「…！？……………え？…ぼくは…あれ…？」

小萩の瞳が元の黒になった。

それと同時に意識も正気に戻ったらしい。

彼女は慌てて、お市の首から手を離す。一方、お市は腰が抜けたのか、ずるずると地面に座り込んでしまった。

「僕は、一体何を…？」

「…覚えてないのか？」

「え…………？」

彼女は周りを見渡した。

辺りには屍の山と血の臭い。

その中でまだ息のある足軽の一人が憎しみを込めて吐き捨てた。

「この…バケモノめ…！！」

小萩の表情が固まる。

「これ…全部、僕が…」

目から涙が溢れ、そっと流れ落ちる。

佐助も幸村も沈痛の面持ちで見守るしかなかった。
二人の背後で座り込んでいたお市は、音もなく立ち上がると、足輕
達に命令した。

「退却」

「お市殿……………？」

幸村が驚き、振り返った。

「あなた、優しいのね…また会いましょ…」

「しかし…！」

戸惑う二人を見て、お市は泣きそうな顔で微笑んだ。

「夢を見た…泣きたいくらいに幸せな夢…あの時の雨は、まだ降り
続けているのね…嗚呼…遠くに来てしまった…こんなに遠くに…
探さなきゃ…」

ゆらゆらと妖しく、頼りなさに、お市は部下を引き連れて何処へ
と去ってしまった。

「行ってしまわれたか…お市殿、寂しい目をしていた…大丈夫だろ
うか？」

「解らないさ…そんなことより今は小萩だ」

佐助は小萩の肩を軽く揺らした。

「大丈夫か？」

「ししゅう…」

彼女は目元を腫らして呟く。

「忍つて…なんですか？強さつて、なんですか？僕は…一体何なんですか?!」

佐助の表情に僅かな動揺が走った。

「答えてください、師匠!!」

「小萩殿…」

「僕はバケモノなんですか？」

「落ち着け、落ち着くんだ…お前はバケモノなんかじゃない」

「そつでござる！小萩殿は普通の人間でござるよ！」

「嘘だ！師匠も幸村殿も見た筈だ、僕が無意識に人を殺している所を！傷が勝手に治癒されていく所を！僕は…絶対、人間じゃ…」

「もういい…これ以上、何も言つな」

泣き叫ぶ小萩を佐助が抱き締めた。

「すみません……」

「いや、大丈夫さ」

刹那、小萩の首に手刀が降り下ろされる。

「っ……!?!」

「佐助！一体何を?!」

「悪いね、小萩…今は何も言えないのさ。でも絶対救ってみせる。約束だ…多少手荒だが、今だけは休め」

佐助は動かなくなった小萩を肩に担ぐと武田の本陣に向かい始めた。

「さ…行くつぜ、旦那」

「佐助、まだ俺とお館様に話してないことがあるはずでござろう…。俺はそれが知りたい」

「鋭いね、大将…確かに俺様は不確定な事項は報告してなかった。まだ確信が持てなかったんでね…でも今回の小萩のことで全て繋がった。…勿論帰ったらじっくり説明するさ」

「そうか…」

「その前にやることは沢山あるけどな。小萩に掛けられた術…アレを封印する」

「俺も手伝っぞ」

「いや、気持ちはありがたいんだけどね…今回は危険だから助っ人を呼ぶ」

「助っ人…？誰でござる？」

「旦那もよく知ってる奴さ」

「はあ…なるほど。いずれにせよ、佐助に任せるしかないでござるか…なんと歯痒いことよ」

「そんなこと無いさ」

佐助は先に進む幸村に聞こえない位に小さく呟いた。

「小萩も…俺様もアンタから貰ったモノが一番、多いよ」

その言葉は、紫紺の空に吸い込まれるようにして消えていった。

こうして武田軍は甲斐へ凱旋した。

そして佐助の抱えている事態が急変するのはもう少し後になってか

ら
だ
っ
た。

10 (後書き)

お市のセリフはゲームのを参考にしました。

ここからどんどん暗くなります。では、また次回！

第拾巻

「封印」

「……………」

夜更けの長谷堂から突然現れた人影。その形は鳥のような不気味さを醸えていた。影の持ち主は誰であろう、風魔小太郎である。彼は一冊の古い書物を大事そうに懐に仕舞うと、音もなく去ろうとした。だが、そこを夜闇に紛れ、彼の行く手を遮る者がいる。

「ちょっと待ちな……」

空夜だった。漆黒の髪と服のせいで普段から白い彼女の顔が、尚一層白く闇に浮いていた。

「此処を奥州と知っての狼藉かい？北条のジジイもボケたなあ……その本、返してもらっぜ」

「……………」

小太郎は忍刀を構える。返す気はさらさら無いらしい。

「まったく…俺をナメんなよ、風魔の兄ちゃん」

空夜もまた短刀を構えた。

「『夜流蒼星』 双月空夜、参る…!!」

互いの刃が月光に煌めいた。

「遅いな……」

佐助は部屋の窓から空を眺め、ため息を吐いた。
その傍らでは小萩が布団に寝かされている。

「俺様迎えに行こうか……でも絶対向こうが拒否するだろうし……や、
ここは好かれるという奇跡も……」

「ごちゃごちゃ 五月蠅いぞー!」

凜とした艶のある声と共に、背後から佐助の喉元にクナイが突きつ
けられた。

「おいおい……」

佐助は両手を上に挙げ、降参のポーズを取る。

「久しぶりだな…猿飛佐助」

「よう、かすが。アンタ相変わらず良い女だねえ」

「…殺す！」

やって来たたくの「『かすが』は物騒な事を眩くなり、部屋の中にもなく降り立った。

「この子供が嵐雪の…？」

「ああ、そつだ」

「目元や鼻筋に面影があるな」

かすがは小萩の頭をそつと撫でる。

「で、軍神の旦那からの預かりモノは？」

「事情は聞いた。これがそつだ。ふん…謙信様の御心の広さに、感謝するんだな！」

「はいはい」

佐助はかすがから巻物を受け取った。巻物には『封』とだけ書かれている。

「空夜は、来てないのか？」

「ああ…頼んだモノが来ないとちよいと心配なんだがねえ」

「頼んだモノ？」

その時、空夜の伝書鴉がやって来た。

早速、鴉の足に括りつけられた手紙を読んだ佐助の顔が凍りつく。

「っ…！？」

「どうした？空夜の身に何があった？！」

佐助はかすがに手紙を渡す。

手紙にはこう書かれていた。

『すまねえ、さす兄。書が盗まれた。下手人は風魔の兄ちゃんだ。

一応必要な所だけ、もぎ取ってきた。キズの手当てを受けた後、小

田原に向かう。本当にすまねえ 空夜』

「なんだと…？伝説の忍が…一体何の為に…！」

「解らない。けれど、空夜はよくやった。この部分さえあれば、俺様でもなんとかなる」

「本当にやるつもりか？」

「ああ！時間がない！」

佐助は眠ったままの小萩を抱き上げると場所を移動した。

その頃、安芸の厳島神社では一つの取引がなされていた。

「ありがとう、おかげで僕は助かったよ」

海斗が一冊の本を持っている。

彼の姉、空夜が守ろうとした『書』であった。

「で、姉さんはちゃんと生きてるかな…？まさか、殺してないよねえ？」

「……………」

小太郎はうなずいた。

「死んでないならそれでいい。実の姉を殺したんじゃ寝目覚めが悪くなるし…それじゃ、報酬はその巾着に。北条にはまた改めて御礼をすると伝えてもらおうか」

「……………」

小太郎は小さく頷くと、黒い羽を幾枚か残して消え去った。

「…解りづらい男だね。まるでもっさんみたいだ」

「もっさんではない。我が名は毛利元就…学習しろ」

元就が音もなく襖を開けた。

それを見て、海斗はつまらなそうに鼻を鳴らす。

「へえ…見てたんだ？」

「あたり前だ…。海斗、何のために我に無言で北条から忍を借りた？」

「奥州の中尊寺にある調伏の書が欲しくてさ」

海斗は愉しそうに話し始めた。

「もっさんが欲しい『戦力』が素直に僕らの配下に下るとは思えないから…せめてもの保険ってやつだよ」

「くだらん…その時は、我の力でねじ伏せるまで」

「『アレ』に力は通じないと思うけどね…」

その時、二人の元に一人の部下がやって来た。

「元就様、行商人の老人と男が何やら用があると…」

「追い返せ。でなければ斬り捨てよ」

「それが…」

部下は元就に耳打ちした。海斗は顎に手を当て、ニヤニヤと微笑みながら様子を見る。

「ちっ…！致し方ない…通せ」

「は…！」

「なんかあったの？」

「ふん、情報の方から我に寄ってきたようだ…」

襖が開き、客が二人やって来た。よく見れば、その二人は前に小萩を誘拐しようとした老人と若い男である。

「毛利元就様にございますか」

「いかにも。我がそうだ」

「私共はその…えー…」

「行商人風情が我に何用か…御託はいい…手短に話せ」

「あ、あの、貴方様が探しておられるのは鼻の上に傷がある子供で
しょうか？」

「子供…？」

「私共はとある行商を生業としております。前にその子供を見た時は普通でしたが、しばらくしてまたその子供を見た折……子供の瞳が橙色に光って……そして、化け物のように荒れ狂っていたのです……！」

「その子供をどこで見た……」

「甲斐……でございます。人相書もここに……」

「……なるほど、それを我に知らせるとはなかなか頭の切れる……。褒美を出そう、その前に……酒は呑むか？」

元就は海斗に酒を出させた。

「へ……？は、はい！有り難き幸せにございます」

老人と男は渡された盃を手を取った。元就も盃を手に取り、そこに酒が注がれる。

「さあ……呑むがよい」

注がれた酒を三人は一気に飲み干した。

「これはなかなかの逸品ですわい。すつきりとした後味が老骨に染み入……うぐっ！？が、があああ……？！！」

盃を落とし、老人が泡を吹いて痙攣し始めた。男も胸をかきむしり、床を転がり回る。

「唐から取り寄せた特殊な毒だ。我からの褒美…ありがたく受け取るがいい」

元就は冷ややかな顔で二人を眺めた。まるで路傍の石を見るかのよう
うに、その瞳には感情らしいものは一つもない。

老人は畳をかきむしり、ひたすら痛苦に喘ぎ、呻いた。

「な、…何故…！」

「ごめんね…もっさんはこの通り性悪だから許してよ。でもさあ、
爺さんも人のこと言えないよね？あ、そうそう…情報って、知る人
が少ないとその分価値が上がるでしょ？つーまーりいー、あんまり
他の大名とかに知られたくないんだあ…。わかった？じゃあね」

海斗が笑顔で理由を話し終わると同時に、老人は息を引き取った。
同じくそばにいた男も息絶えていた。

「海斗、片しとけ」

「いやだよ、もっさんがやりなよ…盃に毒塗る命令出した本人なん
だからさ」

「…我は輪刀より重い物は持たぬ主義だ」

「あつそ…大した主義だね」

海斗はやって来た部下に死体の片付けを命令した。

「とりあえず、これでどうにかなるでしょ…あれ？」

「なんだ？」

「いや、何でもない」

そう言つて海斗は元就にバレぬよう、そつと姉がもぎ取つたであるうページ跡を指でなでた。

(やつてくれたね、流石は姉さんといったところか…でも、残念ハズレ…僕が狙っているのは違う場所さ)

上田城の地下の奥深く。

そこに三人がいた。松明で照らしているものの、元が地下牢だったらしく灯りの先は見えず辛い。

「よし！かすが、小萩をこの巻物で包んでくれ」

「ああ…いいのか？」

「何が？」

「もし失敗したら…この子は死ぬぞ。術を掛けた貴様もな」

「……………」

佐助は何かを答えようとして、止めた。その顔には自身の覚悟が滲み出ている。

「俺様は約束したんだ。必ず術を解くと」

「そうか…ならいい」

かすがが巻物を小萩に巻き付ける間、佐助は塩で陣を描いた。

「出来た…始めよう」

佐助とかすがが印を結び、呪文あるいは真言を唱える。

しばらくして巻物が燐光を放ち、辺りがぼんやり明るくなり始めた。

「…し、しょうっ?」

薄目を開け小萩が呟いた刹那、瞳が橙色に光る。

そして、絶叫。

「ひ…ぎゃああああアアアあああああ!!?!アアアアあああ

!…!!」

同時に巻物の文字が動いて彼女の体を這い上がり、肌に吸い込まれていった。

「…!?!」

「く…耐える、小萩…!」

「ぐ…くう…!」

「

…!?!」

ふいに悲鳴が止んだ。

「終わったか!」

「いや、ちょっと待て」

二人はしばらく小萩を注視した。

見れば煌々と光る瞳が普段の黒さを取り戻していく。そして小萩は見開いた目を瞑り、どつつと床に倒れた。髪が揺れ、うなじが晒される。そのうなじには奇妙な痣が浮いていた。

まるで目のような…奇妙な紋様だった。

「これは…なんだ?」

「蛇目封じの法。この目が開いている間、小萩に掛けられた禁術は発動されない。ひとまず第一段階は無事終了。二回目は俺様だけで

も何とか持つか……。いやあ、今回は助かったぜ」

佐助は小萩を抱きかかえ、巻物を外していく。

「禁術：いまいち要領を得ないのだが、何のために……？」

「嵐雪が掛けたのは確かだが……動機は未だ不明さ」

「……………。私は謙信様の巻物さえあればいい。それに貴様の間抜けた面は、見飽きた。帰る」

「なあ、かすが……」

えらく神妙な顔で佐助が呼び止めた。

「なんだ？」

「いや……なんでもない。軍神の旦那によろしくな」

「き……貴様ごときが謙信様をそのように軽々しく呼ぶな……！」

そう言っつかすがは忍らしく闇に消えた。

残された佐助は彼女が出ていった後、少し困ったように微笑んだ。

「佐助！封印は成功したでござるか？」

「まあ第一段階はね…ただ、回数を分けて少しずつ封印を強めない
とあの手の術は弱まらないのさ」

「なんと…ご苦労だった！それと、御館様が御呼びだ」

「へいへいどうも」

二人は信玄の部屋へと向かう。

「猿飛佐助、入ります」

「同じく真田幸村入ります！」

「ふむ。小萩の容態はどうだ」

「第一の封印で高熱を発しましたが、じきに引くでしょう。今は部屋で寝かせてあります」

「そうか。ご苦労だった」

「いえいえ、労いは給料に繁栄していただきたく…」

「ははは、考えておこう…それより佐助、金ヶ崎での小萩の一件…
一体何があったのだ？」

「それがしも聞こう」

佐助は言葉を選ぶように紡ぎ始めた。

「あくまで推測ですが、小萩には実の父から禁術を掛けられています。術は身体に眠る『強さ』を強制的に特化させるもの…そのおかげで彼女の成長が妨げられていた。ただ、彼女の身体の変化は解らずじまいです。これは本当。そして播磨での調査でわかったのは、あの落城騒ぎに毛利の旦那が一枚咬んでいることと、小萩が一人で城を破壊したこと。それによって他国の武将達が彼女を狙っている可能性があります。その考えを見越して父親が俺様に小萩を預けた…が、変なんですよ…何故、術を掛けた張本人がそんな行動に出たのか？」

「やはり自分の娘という負い目があったのでは？」

「小萩殿が誘拐されかけたのも合点にござる…」

「佐助、一人で城を破壊するとは…その術で可能なのか？」

「はい、御館様…落城騒ぎは術を掛けられたことによる暴走が主な原因かと…ただし、ちゃんと扱えば国一つを潰せる代物になっちまいます」

「…?!」

「ふむ…ワシが思うに、毛利が絡んだのはその『力』欲しさだな。

長宗我部との一件もある」

「だが、実の子にその様な術を掛けるとは……『外道』そのものにござる！佐助……今さら過ぎるのは解っているが、小菡殿を信頼の置ける家の養女に出すという手もござらんか？」

「それは駄目だ。危険過ぎる」

「だが……！」

「幸村よ、彼女の為を思うなら他所へ養女に出すより上田にて匿う方が遥かに安全だとワシは思うぞ……」

「く……無礼を申し上げたこと、お許し下され御館様！」

「面を上げよ、幸村。なれば一先ず解散だ。佐助も休め」

「は……！」

佐助が腰を上げたその時、算がやって来た。

「隊長、大変です！」

「どうした？」

「小菡が居ません！」

「何だと?!」

「手拭いを取り替えようと部屋に入ったらすでもぬけの殻で…海野が部屋でこれを」

算が半紙を差し出した。引ったくるように見ると下手な字で

…『ごめんなさい』

と書いてある。

佐助の頭の中が急速に冷え、半紙を握る手がガタガタと震えた。

「…畜生!!」

事態は更に悪い方へ傾いた。

11 (後書き)

誤字脱字等ありましたら御一報願います…。

12 (前書き)

毛利ファンの方にはオススメ出来ない話となっております。

第拾貳卷

「仇討」

残された手紙。

そして、失踪した彼女。

空夜の怪我に次ぐ思わぬ事態に、佐助は頭を悩ませた。

だが、それと同時におおよその見当がついていた。

封印術の後、小萩は高熱を出して倒れた。佐助自身が小萩を彼女の部屋に運んだのだ。忘れようがない。

しかし小萩はしばらくして目が覚めたのだろう。そして、先程の話を聞いてしまったに違いない。

『ごめんなさい』 … たった一つの短い言葉には、沢山の意味が隠されていた。

「佐助…」

「ああ、解ってる。算、今すぐ海野を連れて搜索の準備をしる。まだそんな遠くには行ってないはずだ」

「御意！」

「本当は忍隊を総動員したいところだが、いつどこで戦が起るかわからない…悪いが真田の旦那は留守番してもらおう」

「な…?!」

「大将の代理を勤める旦那が今、城を抜けるのはマズイ。御館様や民衆の為に…解ってくれ」

「しかし…」

「旦那、これは俺様と小萩の問題…分かってるよね？」

佐助の瞳に静かな怒りが宿る。
流石の幸村も言葉をなくした。

「まさか小萩殿を、抜け忍として処理するのではござるまいな…
…？だとすれば俺は」

「そんなわけないでしょ、必ず助けると約束したんだから」

「そうか…すまぬ。では佐助、小萩殿と共に必ず戻って来ると約束してくれ！」

「言われなくとも…連れて帰るさ、必ずね！だから給料弾んでよ、旦那？」

「無論！」

そうして、佐助達は小萩の搜索を開始した。
見送る幸村。その背中を信玄は恐ろしく静かに眺めていた。

「っ……っ……っ……」

小萩は山の中を疾走している。

行き先は『安芸』。

目的は父の仇討だった。

枝から枝へ飛び渡る度に自分の息切れと、笛のように鳴る喉が邪魔に感じる。

もはや理性ではなく、唯ただ憎悪だけが体を支配していた。冷たい憎悪の焰が身を焦がすのが分かる。

もう、止まらないのだ。

何もかも。

『播磨での調査でわかったのは、あの落城騒ぎに毛利の旦那が一枚咬んでいること…』

脳裏に先程の佐助の聲がこだまする。小萩は正確には佐助達の話に十分に聞いていない。

彼女が知ったのは、『播磨の件は毛利が絡んでいる』という情報だけ。

それを聞いた時、耳から辺りの雑音がすうっと一斉に消えた。

それだけで充分だった。

だから抜けて来たのだ。

父の仇を取るために。

記憶はまだ完全には思い出せてないが、ぼつりぼつりと浮かんでいった。けれど、そんなことは彼女にとって些末なもの。

小萩は、気付けの為に兵糧丸を取り出すと二つ三つ口に押し入れ、噛み砕く。しばらくして山を一つ越えると、彼女はやっと休むことを決めた。

今…小萩は上田からしばらく風で移動し、播磨の国境をずっと上に走って移動している。

足取りが佐助に知られぬよう、痕跡を丹念に消しながら。

(そろそろ水を調達しないと…川はどこに…?)

小萩が木の枝に静かに降り立った時、意外な人物が姿を現した。

「……！」

やって来たのは、山の中でも目立つ派手な出で立ちの男…前田慶次

だった。

(ま、前田殿…!?!何故?!)

小萩は一層息を潜め、慶次が通り過ぎるのを待つ。
だが、思いもよらぬ邪魔が入った。

「キキキ…!!」

「…!?!」

彼の相棒の仔猿『夢吉』が突然現れ、小萩の顔に張り付いたのだ。
彼女はバランスを崩し、木から落下する。

「…むが…!?!」

「うおおっ…夢吉?!どこに遊びに行ってたんだ?お、もしかして
…お前『いいひと』でも見つけてって、ん…?」

慶次が夢吉を小萩から引き剥がす。当然、両者は目があった。

「……………」

「……………」

「……………?」

「……………」

沈黙に耐えられず、小萩が口を開いた。

「…………ご…ご無沙汰です」

「…………小萩？」

「はい…」

若干諦め気味で返事した。もしかしたら、彼が彼女を他人の空似だと勘違いしてくれるかと思ったが、それは甘かった。とりあえず小萩は立ち上がって服に付いた埃などを払う。

「不思議な縁でまた会ったけど…こんなところでなあにやってんだ？」

「それは…」

「まさか、夢吉との会瀬とか…?!」

「ちがう…!」

思わず地が出てしまった。

おかげで調子が狂う。

「ふーむ…………じゃあさ、任務ってやつ？」

「え…?ええ…まあ、そんなところです」

ここで返答に詰まったが、なんとかやり過ごした。

「へえ…出世したねえ…。あれ、てことは迷彩の兄さんも一緒じゃ

ねえの？」

「いいえ。師匠とは別れての任務ですから」

「ふーん…：ていうかさ、忍がそんなに喋ったらいけないじゃない？俺、敵かもしれないよ？」

「あっ…！？」

「アハハハハ…！」

「笑わないで下さい！」

「悪いわいい。さっきのは冗談だって…！」

慶次とのやり取りの間、熱で辺りがぐらぐらと揺れているように感じる。小萩は自身の体調不良を悟られるまいと、足を少し強く踏ん張った。

「というより何故…：前田殿がこんな山奥にいるのですか？以前は確か上杉殿の国へ向かっていたはず…」

「ああ…：まあ謙信から頼まれ事があったさ。引き受けたんだ」

「そうですか」

「友達だからな」

その時、雨が降り始めた。
時雨の粒が木々の葉を叩き、まわりは緑が滲んで鬱蒼とした景色に
早変わりする。

「お、こりゃしばらく降るね…小萩もこの樹の下に入んな。そこだと風邪引いちまうよ!」

「僕は…いえ、もう行きます」

「いやいや、雨宿りしていけて!」

慶次が小萩の腕を掴み、樹の下に引き込む。
いきなりのことにびっくりした彼女は多々良を踏む。

「大丈夫か?…て、おい?! すっげえ熱じゃん! まつ姉ちゃんもびっくりだぜ!？」

腕から熱が伝わったのか、慶次は小萩の額に手をやるうとした。
だが、小萩は彼の手を払いのけた。鋭い音が、空間に響く。

気がつけば、雨は霧に変わっていた。

お互いの姿が霧で包まれる。

「…単なる、熱、ほっとして下さい」

「でも…ふらふらだろうが!」

「気の、せいでしょう…僕には大事な仕事があります。だから、邪

魔しないで、下さい」

「そこまでしてやり遂げる大事なもんなのかよー!!」

「ええ大切ですよ…、僕の体なんかよりずっと、ずっと！もう、僕に構わないで!!」

小萩がそのまま進もうとした矢先、彼女を阻むように目の前の地面に大刀が突き刺さった。

「…なんの、真似ですか？」

「見りゃわかんだろ！お前を止める為だ…今からでも遅くない。甲斐まで送ってってやんよ」

「止めて下さい。迷惑だ…」

「迷惑じゃない！小萩、お前さ…死ににいくつもりだろ！」

小萩の目がわずかに大きく見開かれた。

「迷彩の兄さんはアンタに危険な仕事は頼まないはず…ただの仕事なら、何故そんな死を覚悟した面をするんだよ!!」

「……………」

「小萩!!」

「…………僕は、嘘をつくのがどうも苦手のようですね…」

小萩は肩をすくめた。
そして慶次の元へ歩を進める。

「分かりました…お言葉に甘えて送ってもらいしょう」

「よし、じゃあ甲斐まで送り届けてや…あ、れ？」

「キキイ…？」

慶次の視界が歪む。

今度は彼が膝をついた。

なんのことだか解らない。

その刹那、慶次の脳裏にとある疑問が浮かんだ…。

(この森ってこんなに霧、多かつたっけ…?)

「霧が出てて助かりました」

小萩は平然と立っていた。

口と鼻に布を当てて、苦しそうである。いや、霧を吸わないようにしているのだ。

「この香は無臭ですが…貴方に警戒されたらことですからね」

慶次は驚愕の眼差しでおうむ返しに言葉を言う。

「じつ…?…」

「ええ、そうです」

見れば茂みの中に煙玉の燃えかすが転がっている。

小萩がやったのだ。

慶次は泥の中、倒れた。

視界はさらに歪み、白く染まる。いつの間にか、再び雨が降り始めていた。

「安心して下さい。少し意識と記憶を失うだけです。本当は、こんな手を使いたくなかった。あなたが起きる頃には、もう僕と出会った事を忘れているでしょう。さよならです」

小萩の声と雨の音が頭の中に木霊する。

臉が降りる直前、臍気に見える彼女の頬に流れた一筋の粒が、涙だったのか、雨だったのかは…結局、慶次には解らずじまいだった。彼らが意識を失うのを見守った後、小萩は申し訳程度に慶次が携えていた唐傘を開いて彼らの上にそっと差した。

佐助達が小萩を探し始めてから、一日が過ぎた。

「隊長！見当たりません！」

「雨のせいで痕跡が途中から消えています！」

「ちつ…やっぱり安芸に向かったか…」

佐助は小萩が途中で行き倒れている方に賭けたかった。だが、甲斐の周辺及び他国の国境まで足を運んでも彼女は見つからなかった。

おそらく、小萩の意識は気力だけで体力を繋いでいるのだろう。度しがたい精神である。

否、復讐心か。

そして、今…三人は播磨の国境で留まっていた。

「算、海野…すまねえが安芸へは俺様だけで行く。少数とは言えども、毛利の旦那の斥候に気付かれちまうしな」

「でも、隊長…」

「これは命令だ」

「……………」

「…承知しました」

海野達は佐助を残し、急ぎ甲斐へ帰還した。

佐助は二人を見送ると一人、安芸へと歩を進める。

(安芸に到着するのは、見積もって二日…それまでにさっさと見つ

けねえとな。が、その前に…)

「…いい加減、出てきたらどう?!」

佐助が森の奥に向かって呼び掛けた。

刹那、奥からクナイが飛ぶ。

当然、大手裏剣でクナイを弾き返した。

「気付かれたか…」

森の奥から人が出てきた。

思わぬ人物の登場に、佐助は冷や汗を流す。

「ふん、幽霊でも見たような顔だな、猿小僧……いや、猿飛佐助か」

「おい…嘘だろ…? アンタ、嵐雪だよな…?」

「儂を覚えていたのか。左様、小萩の父で、死に損なった八夜 嵐雪とは儂のこと…さて聞くが、小僧…儂の可愛い娘はどこにいる?」

そして嵐雪はシニカルに唇を歪めて笑う。その表情は年を重ねても尚、昔と変わらなかった。

安芸の厳島神社に着いた頃には、もう辺りが夕日で赤く染まっていた。

警備が手薄な場所を探し、足音も立てず侵入する。だが、違和感があった。

（おかしい…人が、少な過ぎる…）

それでも細心の注意を払いながら屋根伝いに移動する。舞台のように広い本殿に出た。

幸い、見張りは居ない。

そして、舞台のちょうど中心に、緑の兜と甲冑を身につけた男が座って夕日を眺めていた。

誰だか分かった時、小萩の視界が橙色に染まり、熱で弱った体が嘘のように軽くなる。

「毛利、元就…！」

次に何をすべきか、この身体は知っていた。

小萩が飛び降りると同時に、男が振り向く。

「何者だ、貴様!?」

「僕の名前は八夜 小萩、播磨の落城で亡くなった父、八夜 嵐雪が娘！その命と首、貰い受ける!!」

小萩は忍刀とクナイを構え、突進した。

「だらあああああああああああああー!!」

忍刀が喉を切り裂く感触：次の瞬間には男の首が宙を飛び、血が勢いよく噴出した。

辺りは血の雨が降り、小萩は頭から爪先まで真っ赤に染め上げられる。

けれども、首を斬っただけでは彼女の怒りは収まらない。

「この……っ!!!!」

彼女は次第に冷たくなりゆく男の体に刃を刺す。

それを何度も何度も繰り返した。

刃が骨に耐えきれず、刃零れても更に切りつける程の執念である。

その姿は、まるで悪鬼羅刹も裸足で逃げ出す程に凄絶で狂っていた。その時だった。

「それで、満足か？」

背後からの問いかけに、今度は小萩が振り向いた。

「そこまで殺されるとはな、我は余程そなたに恨まれているらしい……」

男は緑の奇妙な兜と袖の異様に長い甲冑を身に付けていた。手に持つ武器もまた、珍妙である。

「…なにを、言ってる…?」

カサついた唇でなんとか言葉を紡ぎだす。
男は鼻を鳴らして、呆れたように言った。

「二度も言わせるな。そこに転がっている肉の塊は、私の影武者…
つまり、そなたが来るのを見越した崇高な私の策の捨て駒ぞ」

「あなた…だれです…?」

「我が名は『毛利 元就』。日輪の申し子なり。橙色の化け物よ…
我が叡島神社の本殿を血で汚した罪、身を持って償え」

元就の持つ輪刀『霸幻』が怪しく揺らめいた。

13 (前書き)

やっと完成しました。
地震に揺られて出来た最新話です。

第拾参卷

「詭計智将・毛利元就」

「我が名は『毛利 元就』。日輪の申し子なり。橙色の化け物よ……我が巖島神社の本殿を血で汚した罪、身を持って償え……！」

小萩は輪刀を紙一重で躲す。

が、その動きは目に見えて鈍くなっていった。

「どうした……父の仇を取るのだろうか？」

「うるさい……い、うるさい！五月蠅い！！僕は化け物じゃない！」

「ふん、くだらぬ……今、降参すれば悪いようにはしないがどうだ？」

「は……！」

今度は小萩が鼻で笑った。

「ははは……そうやって播磨の主様を殺したくせに………そうだ、思い出した！……毛利元就、播磨が貴方に同盟を持ち込んでから父上はお

かしくなった！…より『強さの高み』を見出だそうとした…貴方、父上に何を言った！！」

小萩の細腕から大量のクナイが放たれる。

「何も」

元就は全てを弾いた。

「ただ…私は城主に『同盟を組みたいなら相應の戦力を用意しろ』と言ったまで。結局は決裂、故に潰した。そなたの父上は単なる捨て駒に過ぎず…」

「父上を、父さんを！捨て駒と呼ぶな！！」

怒鳴りながら小萩は忍刀で鏢追り合う。火花が飛び散って目に入った。思わず目を瞑る。

その好機を元就は逃さなかった。

「今だ。やれ！」

海面から縄が飛び出した。

(え………?)

縄は一気に体に巻き付いて、小萩は身動きが取れなくなった。必死に藻掻くが、そうすると更に縄が肌に食い込んで血が滲む。

「これが策だ。そなたもよく覚えておけ、我の策があるかぎり我を倒すことなど出来ぬとな」

「この…卑怯者…！」

「なんとも言え、化け物め。海斗、こやつで間違いないな」

いつの間にか、元就の傍に男がいた。声からして少年に近い、とても柔らかな顔立ちの男だった。

「うん、そうだね。顔に傷もあるし、人相書と一致する」

「ならば牢に閉じ込めておけ。縄は緩めるな、少々鬱血しても構わん…」

「はは…！」

「毛利元就！お前は僕が必ず殺してやる！絶対に！！絶対に、許すものか…！」

彼女が罵った呪詛の言葉は牢へ連れていかれても尚、訝した。

佐助は嵐雪と共に安芸へ向かっていた。

「小萩はアンタが死んだと思っている…一体播磨で何があったんだ？」

「播磨の落城は話に聞いておるだろう、そして騒ぎの元が娘なもの…」

「ああ」

「儂には、弟がいる。双子の弟だ。小萩は弟を父と思っておる…」

「なんだって？じゃあ、アンタは…？」

「儂はなりそこないだ。怖くなったのだよ、あやつのお父になることを」

嵐雪はくたびれた声で寂しそうに呟いた。

小萩は牢の中で縛られたまま横たわっている。
牢に入れられてしばらくは叫んだり暴れたりしていた。が次第にそんな気力も失せてしまった。
その瞳にさつきまでの狂気は無く、自暴自棄に荒んだ鈍い光が揺らめいている。

（惨めだな…僕）

このまま舌を噛み切りたいが猿ぐつわのせいで失敗に終わった。それすらも惨めで滑稽に思えて…哀しくなった。

（僕が処刑されれば、幸村殿は安芸と戦をなさるのだろうか。最後の最期に師匠に迷惑をかけるとは…父上に、申し訳ない…）

その時、格子の向こうから誰かの足音がした。

「ひなた様、ここは貴女のような尊き方がお越しなさる場所には…」

「大丈夫です。通してください」

「ですが…」

「お願いします！一目だけ…」

「……………わかりました」

ひなたと呼ばれた女の声と牢番が動く音がした。
足音が近くなる。

そして

「みぎやつ！」

やって来た女は盛大に転んだ。おかげで顔が間近で見える。
年頃は小萩とそう変わらない。格好は巫女の装束だろうか。
彼女、『ひなた』はあどけなさの残る少女だった。

「あの、もうし…私、『ひなた』と申します。私の声、聞こえますか？」

「……………」

「あの…」

「聞こえてます。僕になんの用でしょう？僕はこの通り下手人。故
に、明日には消えてなくなる命です。放っていただけますか…」

猿ぐつわをなんとかずらし、ありったけの皮肉を込めた言葉を相手にぶつけた。

しかし、ひなたは臆することなく

「ごめんなさい」

小萩に頭を下げた。

その行動に、小萩は面食らつても面に出ぬよう努力する。

「貴女に謝られる理由など、ありません」

「いいえ、あります。播磨のこと、御父様のこと。就兄様の代わりに謝らせて下さいませ…。明日、あなたは処刑されません。それよりもっとひどいことを…」

「ひどい、こと？」

「はい、それは…」

「ひなた様！もうそろそろお時間です！それ以上は元就様もお許しには…」

牢番が小走りに寄ってきて彼女をひき止める。

逆らえずにひなたは引きずられるようにして連れ出されようとしていた。

「けれど、まだ…」

「だめです！」

「もういいです」

小萩が遮った。

驚く牢番とひなた。

「ひなた殿…でしたっけ？」

「は、はい！」

「僕の名は小萩です。忘れても構いません。取るに足らない名前ですから」

ぎこちない笑顔でそう言った。なんて寂しい笑顔、とその時ひなたは思った。

「いいえ、素敵な名前です！」

世辞ではない、本心からの応えだった。

「ひ、ひなた様！これ以上は…！」

「わかりました。では、小萩さん…力になれなくて本当にごめんなさい！」

その言葉を残して、ひなたは去っていった。

彼女が言いたいことはなんとなく解っていた。

多分、甲斐の情報だろう。
その為に明日行われるのは…

(拷問……か)

本当は怖いはずなのに…どうにも感じなかった。

むしろ、『どうにも感じない自分』が怖かった。

とある双子の忍の話をしよう。

兄はとても強い忍だった。
弟はとても弱い忍だった。

しかし

二人でいれば『最強』だった。

やがて双子は別々の国に奉公するようになり、お互いの所在はわからなくなった。そんな時、兄に任務が渡される。

『播磨の真琴姫を殺せ』

兄は知らなかった。

弟が播磨の姫を護衛していることを。

自分が姫と恋に落ちることを。

結局、姫を兄は殺せなかった。

知らなかった。

知りたくなかった。

弟も彼女を密かに好いてるなんて。

けれども彼女が取ったのは兄。一夜の契りの後、兄は恐ろしくて逃げた。

だが

運命はそれを許さなかったのだ。

しばらくして姫が子を身籠った事が発覚。

下手人は不明。

だけど確実に兄の子。

不義の証。

出産は密やかに行われた。

弟は殿様から命を授かる。

『赤ん坊を殺せ』

生まれてきた赤ん坊は女兒。

兄に似ていた。

弟は赤ん坊の首に手をかけて殺そうとして、止めた。

妙案を思いついたのだ。

それに投資する為の利用価値は赤ん坊にはあった。

弱い自分を強くする方法を試す実験台として。

表向き、赤ん坊は死産ということになった。

姫にも知られず赤ん坊は弟に密かに育てられ、男として暮らすよう強いられた。

ほどなくして兄が死んだという知らせを聞いてから更に弟は『強さ』に執着し始める。

兄の名を使い、最強たろうとした。

姫は薄々勘づいていた。

お抱えの忍の息子が、実は自分の子ではないかと。

出産から十年経ち、姫は病で死んだ。

我が子の本当の名前を残して。

その子供の名は

「小菽：それが原点であり間違った娘の出生さ。儂が死んだとしたのは世俗が嫌になったからだ」

「…手紙を託したのはどっちだ？」

「播磨の落城は儂も駆けつけた。手紙を託したのは儂だ。術をかけたのは弟だな」

「あの術は…何なんだ？」

「一種の転生さ。体を蝕む、狼の呪いの術…それが奴が作った『炎下橙狼の禁』」

「転生だと?! 禁術中の禁術じゃねえか！」

「そうだ。そしてその原案を作ったのは…」

話込んでいるうちに安芸領に入った。

そこで佐助と嵐雪の二人は毛利の門兵達を襲撃。

「で、続きは？」

「儂だ。弟に原案を与えたのは儂なのだ」

嵐雪の告白に佐助は固まった。

朝日が昇るか昇らないかの頃に小萩は牢から出された。
首枷に手枷、足枷おまけに目隠しまでされ、身動きがほとんど取れないまま歩かされる。

しばらくして目隠しがはずされた。

場所は砂浜。薄ら寒い夜明けの下、元就、海斗、ひなたの三人が待っていた。

「そやつを所定の場所へ」

元就の指示に従い、兵達は木の板の上に小萩を座らせ、縄を掛ける
と楔を打ち付け固定した。

「僕は何をされても絶対に口を割らない…!」

「黙れ。貴様を呼んだのは拷問する為では無い。貴様の中にも
のに、我は用があるのだ」

「何を…言っているのかわからないな」

「海斗、説明しろ」

海斗は前に出ると小萩に顔を寄せた。
柔らかな笑顔、しかし目は冷えている。

「甲斐の忍、君は封印術をかけられているのさ。それを今から僕ら
が解き放ち、眠ってる力を利用してもらうって寸法。おわかり？」

小萩は更に困惑していた。

同時に何かを感じたのか、海斗を恐れてもいた。

そして、首を横に振る。

「わからない？しょーがないなあ…つまるところ、君は」

今更になつて恐怖の原因を小萩は知った。

自分の知らない正体が明かされるのが恐いのだ。

しかも正体は自分が予測した……………。

言うな、これ以上聞きたくない! そう思っても耳は手枷のせいで塞
げない。

そして、無慈悲にも海斗は続けた。

「君は自分の祖国を潰した掛け値なしの『化け物』なんだから…！」

ああ、やっぱり。

僕は化け物か。

小萩の中で何かが壊れた。

それは人間の自分か、もしくははずがった希望か…。

小萩は、はらはらと雫を流した。

彼女が何も反応しなくなったのをいいことに元就は儀式の準備をした。

「ひなた、唱えよ」

「……………はい」

ひなたは震える声で祈る。

従うのは、元就への敬愛なのか。

「海斗、準備しろ」

「はいはい。えーと、『汝、その枷を解き放て。我らに調伏し、永久に忠誠を誓え』」

書物を開き、護摩を焚き、そこから立ち上る煙を小萩に振りかける。

煙は甘い匂いがした。

その匂いが忌まわしい記憶をよみがえらせる。

次の瞬間には、自身は炎に包まれていた。

「あ」

炎の中、人が殺されてる。

あるものは切り刻まれ、あるいは引き裂かれ、抉られ、捻切られて
凄惨極まりない。

残虐な行いをしている人物は小菫に向き直った。

炎に照らされ、見えた顔に彼女は目を見開いた。

それは

その獣は

「ぼ、く……」

13 (後書き)

ひなたは元就にとって年下の従妹いとこという設定です。彼女は巫女なので、神事に詳しいです。

感想、ご質問をお待ちしております。

14 (前書き)

拙い戦闘シーンでごめんなさい。

込んできた。

「キヒ…!!」

「化け物め」

突進する小萩を薙ぎ払うように元就は輪刀で切りつける。が、有り得ないスピードで攻撃をすり抜けた。そして小萩の爪は地面を抉りながら『ひなた』へ向かう。

「ひなたちゃん！」

「ひなた!!」

腰が抜けて動けぬ彼女の前に元就は躍り出た。輪刀が小萩の鋭い爪を弾き、火花が散る。間一髪で攻撃は反れ、元就の頬には朱線が走った。

「海斗、ひなたを連れて逃げよ。今は時間稼ぎしか出来ぬ」

「了解」

「か、海斗君…それでは兄様が！兄様が危のうございます…!!」

「早く逃げよ！我の命令が聞こえぬか!!」

「ひなたちゃん、今はもっさんに従おう。さ、行くよ」

海斗はひなたを無理やり抱えてその場を離脱した。
二人が安全圏まで避難するのを確認して、元就は再び輪刀を構え直した。

「さあ来い。貴様には獣としての死に様が似合いだ」

小萩が今度は強く地面を蹴って襲いかかる。いつの間にかその手にはクナイが握られ、物凄いスピードで切り裂く。対して元就はクナイの軌道の全てを外し、彼女の脇腹に蹴りを叩き込む。当然、小萩はふっ飛んだ。

その好機を逃がさぬとばかりに、輪刀が彼女の首目掛けて振り落とされる。

だが、彼女の首は繋がったまま。

それもそのはず、小萩は輪刀を口で受け止めていたのだ。牙が鋼の刃に食い込み、刀は意図も簡単に折れる。

まるで飴細工のように。

「馬鹿な…計算してないぞ」

動揺した元就の攻撃が外れ、代わりに小萩の回し蹴りが彼の薄い胸に入った。体はくの字に折れ、肋骨が嫌な音を立てて折れる。

元就は血を吐きながら、海の浅瀬に落下した。

ひなたが絶叫して駆け寄ろうとするが、海斗がさせない。

地獄かと思紛うような真っ赤な炎の中に、髪を振り乱し微笑む彼女の瞳は炎に負けぬ程の輝いて不気味極まりない。

ゾツとするような光景に毛利の部下達は怖じ気づくも矢を放つ。だが、炎から発する風を纏う小萩には通用する訳もなく、逃げる者が続出した。

オオン…オオオン…！オオオオオン！！

業火が声高く絶望を謳う。

それを煽るように小萩だった獣は吠えた。

その頃、安芸の異変をいち早く察知した者達が沖にいた。海賊と名高い長宗我部軍である。

「大変だぁアニキ！」

「うるせえ野郎共！」

強面の男達が慌てふためくのを一人の男が叱り飛ばした。

男は短い銀髪、左目を眼帯で覆っている。『長宗我部 元親』だ。

「何かあったのか？」

「へい！安芸が燃えとりやす、アニキ！」

「なんだと！？」

元親は急いで甲板に出ると、望遠鏡を覗きこむ。

「どうやら安芸じゃなくて厳島が燃えてるらしい。あーあ、本殿が燃えてら」

「元親さん、何かあったの？」

元親の傍らに青年が駆け寄る。彼の名前は『マダラ』。元親が拾った忍である。顔に走る炎のような不思議な痣が特徴的だ。

「ああ?!安芸が燃えてる！」

「マダラか。ちょうどいい、平助を起こしてこい」

「……………」

「大丈夫か？」

「なんだろ、これ」

ふいにマダラが両耳に手を当てる。

「ん？」

「この声が聞こえないの？」

「声？風じゃないのか？」

「ううん、声だよ。唸ってるし、叫んでる」

マダラはそのまま座り込んでしまった。

「ほら、聞こえる。頭が、痛い……」

「大丈夫か?! あ、平助! マダラを頼む!」

平助と呼ばれた男がマダラに近寄った。

「大丈夫ですか？」

「平助さん。この声、泣いてる。すごく悲しそうだよ」

「え……」

「苦しそうで、なんだろ……ここが悲しい」

マダラは手を胸に当てた。

彼には何かを感じるらしい。

彼は涙を流していた。

「そうですね。とりあえず、今は部屋に戻りましょう」

「うん」

二人は船室へと帰って行った。

「アニキ、安芸に向かいますかい？」

「いや、このまま待機だ。見る、海がシケってやがる。しばらくしたら一旦、沖に出るぞ、野郎共！！」

『おう、アニキい！！』

長宗我部軍の船は沖へ向かう準備をし始めた。

「今回は俺の出る幕無しだ…。だが毛利、簡単に潰されてくれんなよ…。」

元親は吐き捨てるように呟いた。

「とうとう始まったか…」

「なあ、嵐雪の旦那…小萩を止める方法ってある？」

「無いな」

「…はあ…？」

「仕方がなからう。一番最初に掛けた術よりも、小僧の封印よりも、弟が掛けた術が強かったのだ。止めるとしたら、もう……力づくしかない」

「ち…。りよーかい…と！」

佐助と嵐雪は小萩の前に出て、その変わり果てた姿に二人は驚愕した。見慣れた彼女の未成熟な肢体はすんなりと伸び、胸から腰にかけて

の曲線は『少女』のものから『女性』に成りつつある過程にあった。つまり、彼女は本来の肉体に成長しているのだ。

「小萩、なのか？」

小萩だったモノは二人を見て、にやりと唇を歪ませる。

「なんだ、誰かと思えば兄者に…猿飛か。久しいな」

「アンタ…誰だ」

「ワタシ？私は黄漠^{こうぼく}。『砂の黄漠』さ」

「やはり小萩に取り憑いたか…黄漠」

「なんだよ兄者、その顔は…？折角生き返ったのに、そんな顔をされては…」

不意に小萩もとい黄漠が掻き消え。

「殺し甲斐が、ないであろうっ？」

目の前に現れた。

クナイが振りかぶる。

横から佐助が手裏剣で弾いた。

「ちよーとさ、兄弟喧嘩ならさあ…余所でやんな！」

「ほお…？大きくなったな、餓鬼が」

「とりあえず、小萩から離れな。じゃないと…」

「『じゃないと』？何をするつもりかな？」

黄漠は小萩の顔で笑う。

その笑顔はあどけなさが残った無垢そのままの魅力を放っていた。が、血みどろの頬や両手、辺りに散らばる死体が台無しにして狂気しか感じない。

「小萩には悪いが、死なない程度に苦しめる。アンタが出ていくまでな」

「戯けが…：君に出来るかな？」

「…出来るさ。やってやる」

佐助は手裏剣を構え直して距離を詰めた。ぶつかる位に近付いて、黄漠は目を伏せて呟く。

「師匠…、何故？僕を殺すの？」

「く…！？」

佐助の動きが僅かに鈍くなった。

「避ける、小僧!!」

嵐雪の注意に気付く頃には、黄漠の足が顔に迫っていた。なんとか緩衝する為に腕を交差するが衝撃は殺せず、慣性の法則に従って蹴り飛ばされる。

「かはっ…!!」

背中からモロに打ちつけられた。口内を切ったのか、唾に血が混じった。

「ふふ…ほら、騙された！忍の癖にだらしないなあ…し、しよ、う！あっはははは」

「いつっ…う…クソっ…」

悪態をつくものの、佐助は動けない。

嵐雪が庇うように間に入って懇願した。

「止める黄漠！もう、止めてくれ！これ以上小僧や儂の娘を痛めつけないでくれ…」

「娘？自分から棄てといてよく言える言葉だな、兄者。鷹丸は今、怯えてるぞ？私の頭の中で。混乱して泣いている。私が代わりに育てたのだから、アレをどう扱おうが私の勝手だ。むしろ感謝して欲しい位だよ。命を取らないで、立派な道具に仕立てたのだからな！それを播磨の時、私に成り済まし後僅かで完成するところを邪魔するとは…」

「憎まれてもいい…それでも僕は小萩の父親だ！」

嵐雪は更に声を張り上げる。

「聞こえるか小萩！僕は怖じ気づいて手離れた後もお前を一時も忘れられなかった。それは、お前を愛しているからだ！」

「止める…！！戯言を、語るな！」

「小萩！」

「とうさん…」

一瞬だけ、小萩の意識が黄漠を押し退けて戻った。それに追い縋るように嵐雪は、震える手で彼女に近づく。それを佐助が止めようとした。

「駄目だ！まだ行くな！」

佐助の制止も構わず嵐雪は小萩を抱きしめる。

しかし

「うおおおおお…死ねえええ、兄者ああ！！」

意識が黄漠のものに戻ったと同時にクナイが首を掠った。血が噴き出す。

佐助から見て、全ての時が止まったかのように感じた。それでも、カウンターで嵐雪を回収して手当てする。

「馬鹿野郎が！」

嵐雪は目を閉じて動かなかった。息はあるが苦しそうに唸るばかりである。

「忌々しい。空っぽの入れ物に過ぎないモノが生意気に！」

毒づく黄漠を見て、佐助は覚悟を決めた。

「アンタ、黄漠って言ったっけ…？」

「んん？生きていたか」

「小萩はまだ中にいるのか？」

「ふ…鷹丸は死んだよ。あれが最後の足掻きだったようだな」

「あつそ…ならさ」

佐助は分身した。表情は氷の様に冷たい。

「死んでくれ…本気だ！」

佐助の周りが闇に包まれる。

まるで怒りや悲しみを呑み込むような闇…影縫の術である。闇に沈んだ数瞬後、三方向から目にも止まらぬ速さの斬撃。これには黄漠も苦戦する。

「やっと、本気、になった、か…！」

「……………」

黄漢の挑発を無視して斬撃を続ける。

だが、斬った箇所の方が瞬間に治癒されていくので余り意味が無い。

佐助が攻撃を止めて距離を取る頃には黄漢は傷だらけになっていた。無論、先に斬られた傷から癒えていくので本人は気にも止めない。

「その治癒力、小萩の成長を代償にしているのか？」

「見切ったのか、術のクラクリを…そうだ、この『烈火橙狼』《れつかとうろう》は術者の命から漏れ出る力を代償に強靱な肉体を得る私独自の編み出した禁じ手さ」

「へえ、そんな凄い術を編み出す為だけに忍の矜持を捨てたって訳か…。俺様には無理だな。そんなくならない事に命賭けるとかさ」

「黙れ！」

佐助の足元が爆ぜた。

間一髪で嵐雪を抱え、上空へ避難する。

「はは…おっかないねえこりゃあ…」

「一つ良いことを教えてやる猿飛。私の目的は最強の忍になること。それと」

君の身体を乗っとることだ。

そう聞こえたとき、意外にも佐助の心は動揺しなかった。ただ、その時の心中を表すならそれは一つ…

(あーめんどくさ…)

それだけである。

「なに、用が済めば解放してやる。私が目指している肉体は『風魔小太郎』。こんな貧相な肉体では『強さ』を高められないからな」

「それは無理なんじゃない？だってさ、アンタはこれ以上強くなれないからさ？」

「死にたいようだな」

「あれ？地雷踏んだ？でも一時の目的は俺様なんですよ？だったらさ、そんな短絡的に三下臭い言葉紡ぐなよ」

佐助が言い終わらない内に、叩き込まれた回し蹴り。

その苦しさに悶えつつも、嵐雪を守るように落ちながら佐助はにへら、と笑う。

「さて、御二人さん…後、頼んだわ」

佐助達と入れ替わるように、爆煙から二つの影が飛び出した。

「夜流蒼星、双月空夜…参る！」

「天霸絶槍！真田 源二郎 幸村！！ここに见参！！！」

さて、役者は揃った。

14 (後書き)

さて、なんかストーリーがぐちゃぐちゃになってきました。終わリまで後僅か(?)です。しばしのお付き合いを願います。

今回は友達とコラボになりました。ちょべちかの傍にいたマダラ君は友達が作ったバサラの夢小説の主人公に当たります。彼が気になる方は調べて見るのも一興かもしれません。

では次回でまた会いましょう。

15 (前書き)

やっと最終回です。

第拾伍卷

「父の愛 母の問」

幸村と空夜が駆けつけた理由。
それは佐助達が小萩を探しに出た所まで遡る。

佐助が去ってから、幸村は心底穏やかではなかった。

（追いかけてようか。いや、そのようなことをすれば佐助との約束を破ることになる…それに……）

幸村は信玄を垣間見た。

（病身の御館様を一人残すわけには参らぬ）

無意識に拳を握る。

幸村が右往左往する反面、信玄はというと『岩』のように静かであった。

ひたすらに目を瞑り、穏やかに座っている。

その静かさが不気味で。

幸村の焦燥感を更に募らせた。

もう何往復したか分からない…すると、唐突に信玄が沈黙を破った。

「幸村よ、佐助を追いかけたいか…？」

信玄の問いに幸村は生真面目に答える。

「御館様を残して私情に走るなど、この幸村には…」

「馬つ鹿もんがあああああああ！！」

突然だった。

視界が反転した。

そのまま壁にぶち当たって、ようやく幸村は殴り飛ばされたことを知る。

「お…おや、おやかたさ…ま？」

頬を抑え、脳震盪で苦しみながらも幸村は立った。

「そんなにワシが弱く見えるか」

「え…？いえ…」

「本心は追いかけたいのだろうか？」

「そ…そんな！！病の御館様を残し…」

言い切る前に顔に拳が入った。

「この大馬鹿者が！！ワシの病など関係ないわ！お前はどつした
いのだ？！」

「……………」

「答えよ、幸村！！」

「そ、某は今すぐにでも小萩殿を探したい…でござりまする」

「なら行け！ワシに構うな！！漢なら、迷うべからず！」

「お、お館さまあ…！」

「幸村ああああ…！」

「おやかたさばあああ…！」

「ゆっきむらあああああ!!!!」

「お、や、か、た、さばあああああああ!!!!」

「ゆ、き、むうらあああああああ!!!!」

心行くまで殴り合い、いそいで幸村は馬にのる。
行き先は佐助の部下から聞いている。

「待っていて下され、小萩殿!佐助!!」

幸村は馬を一層速く馬を走らせた。

一方、空夜は。

「なんだよ、これ…?!」

小田原は拍子抜けするほど城に誰も居なかった。

(ちっ…！ジジイらしい作戦だ…全く)

意を決して小田原城に侵入する。やはり誰一人居ない。だが、角から影が差し込んだ。身構える。誰が居るのか、空夜には分かった。

「やっとお出ましかい？」

「……………」

風魔だ。

空夜が手裏剣を投げようとするのを、彼は手で制した。戦うつもりはないらしい。纏う空気にも殺気は含まれていない。

「なんだよ…？」

距離を取りつつ首を傾げる彼女の足下にクナイが放たれた。

「…！？手紙…？」

クナイに結びつけられた文を空夜は慎重に取り、読んだ。内容は《調伏書》の在処。

「…………… 本当に、ここに行けば書はあるんだな？」

こくり。

風魔は頷くと同時に黒い羽を幾枚か散らせて消えた。

そして空夜も小田原から去って書が現在ある場所…安芸に向かう。

その途中で空夜は幸村と出会い、小萩の失踪を知り二人で安芸へと突入したのだった。

佐助と入れ替わりに登場した二人を見て、黄漢はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「雑魚が二匹…どけ、私は貴様等の後ろにいる奴に用があるのだ」

「小萩、殿……？」

「いや、雰囲気が違うし……なんか成長してない？アンタ……本当に小萩……？」

「左様。よく分かったな、女。……私は黄漢。この器の育て親だ」

「器？」

幸村は首を傾げた。

「そう。もう貴様等の知っている『小萩』は存在しない」

「なんだと」

「そんな顔をするな、私は父として守られるしか能の無い脆弱な娘を守ったのだ」

「……………これ」

「……………？」

「黙れ」

空夜がゾツとするほど無機質な声で呟いた。

「小萩は強い。父親だろうがなんだろうがテーマが知ったような口を利くな」

「黄漠殿。小萩殿を返してもらおう」

「ふっ、哀れな」

気だるさ全開で黄漠は右手をユラリ、と上げた。

とたんに地面から火が吹き出し、それが人を型どり始める。

二体の分身だ。

「殺れ…！」

分身が二人めがけて飛びかかった。

ひなたは高台にいた。

元就が攻撃された時は酷く取り乱していたが、今は甲斐甲斐しく元就に応急処置を施していた。

元就は息はしているが意識は無い。海斗が回収していなければ今頃灰になっていただろう。

「就兄さま…」

「ひなた様、もう休まれよ」

「いいえ、大丈夫です」

「ひなたちゃん、ちょっと頼みたいことがあるんだけど」

海斗がやって来た。

「海斗君…では、皆さん兄様を…！」

「は…！」

「ひなたちゃん、今…雨雲呼べる？ 巖島の火を消したいんだ」

「え…あ、はい！大丈夫です！」

「ありがとう」

「いえ、私にはこれくらいしか出来ません故…頑張ります」

ひなたは懐から榊の枝を取り出した。

『海風よ、雨雲を運べ。雨雲よ、巖島に恵みを降らせ。潮よ、泡で
神殿を浄めたまえ。巖島の巫女の名の元に…此处に天地の理を歪め
ん』

ひなたは潮の流れ、天候を変えることができる巫女である。
そのため、水上合戦の時は重宝された。

よって毛利軍は彼女をこころ呼ぶ。
『海神わたつみの巫女』、と。

次第に空が暗くなり、ゴロゴロと稲妻が走り始める。

…つ、ぽつ、ぽつ…ぽつぽつぽつぽつ…！

雨が降り、巖島の炎が徐々に鎮火した。

「雨…？」

黄漢は不審そうに空を見上げた。

「余所見を…！」

「すんじゃねえ！」

幸村の力強い突き。

黄漢は身を翻す。そして入れ替わりに分身が反撃。

が、幸村がここで上半身を反らし、その背後から空夜の上段蹴りが分身に入る。

なかなか息の合った攻撃であった。

そして空夜は幸村の背中を蹴って空高く飛んだ。

(この雨に…雷…イケる！)

チラツと高台に目をやると海斗（うみうた）が高々と手を挙げている。どつちから餓別らしい。

(やってくれるじゃねえか)

ピリピリと帯電し始める身体。それはまるで竜の鱗のようだった。

空夜は微弱な電流を流した短刀を真っ直ぐ上に向けて投げる。

(来る…！)

即座に目を瞑り、耳に手を当てた。

ズガアアアン…！！

短刀に雷が落ちる。

その短刀からの放電に空夜は包まれた。

（充電完了…！）

青い雷を身に纏い、空夜は攻撃体勢に入る。

（喰らえ！！双月流雷遁、雷羽…いかすちはね…！！！）

「行っけええええええええ…！！！」

短刀を交差させ空を斬る。

沢山の雷のつぶてが羽のように放たれた。

幸村が勢いを着けて離れれば、青白い光の羽は真っ直ぐ黄漠に向かう。

「な…！？」

黄漠の足下が爆ぜる。

辺り一帯が真っ白に染まった。

僕は闇の中にいた。

体に纏わりつく闇、それは気だるさを与えてくれた。

その中に反響するくぐもった爆音や、けたたましい化物ほくの笑い声。

でも、どこか遠く感じていた。

播磨の城で暴れている化物が僕自身だと知り、そして父が双子だと知った時には、混乱してやたらめったら叫んでいたような気がする。

もう今はただ屍の様に浮いていたい。

もう…疲れたんだ、何もかも。

ここにいるのは僕で小萩で鷹丸だったモノの搾り滓。

悲しくなった。

父と慕っていた人が父では無く、僕は人間ではなかった。

所詮は入れ物：中身は空っぽだったんだ。

仇討ちも無駄に終わった。

父（今は叔父？）は強い。

多分並の技では倒せないだろう。

僕の肉体に憑依し、暴れているから。

僕は人として愛されてなんか無かったのだろうか…。

『忍は道具。道具に感情は要らない』

まさにその通りだったよ。

世界はなんて欺瞞に満ち満ちているのだろう…。

笑えてくる。

もういいや。

このまま身を任せれば、僕はいずれ融けてしまつ。
消えるんだ。

そう、いなくなるんだ。

『憎まれてもいい…それでも僕は小萩の父親だ！』

『聞こえるか小萩！僕は怖じ気づいて手離れた後もお前を一時も忘れられなかった。それは、お前を愛しているからだ！』

…だれ？

また目を開けた。

もう消えるのか。さっきまでは消えてもいいと思っていたのに、いざさうなるところも見苦しく足搔いてしまうのか…。

ああ…僕は、なんて脆い…

『小萩……強さとは、何でしょうね…』

突然だった。

女の人の声。

それが記憶の扉を叩く。

瞼の裏に浮かぶ女性。

その御人は、かつての僕の主である播磨の姫…真琴様。

いや、違う。

この人の前では『姫』と呼ばないって病床で約束したじゃないか…。そうだった。なぜ忘れていたのだろう…。

この人は

僕の

かけがえの無い…

『ははっえ…』

涙が溢れる。

闇の中、どこからともなく白い腕が伸びて僕の胸に手を当てた。

景色がまた変わる。

そこは播磨の城。

今は亡き母上の御部屋。

これは思い出…？

確か、この時の僕は十になるかならないかだった。

そして、真琴様が自分の母とまだ知らなかった。

『つよぢ…ですか？』

『ええ、そうよ小萩。強いて、どついうことだと思つて。』

母上は手を僕の胸に当てて、僕に聞いた。

『はあ…多分、沢山任務をこなして業績を挙げることでしょうか…。
あの…』

『なあに？』

『僕のことは鷹丸と御呼び下さい。小萩って…その…女っぽくて慣
れません』

『でも貴方は女の子でしょう？』

『いいえ、女ですが『男』です。父上が言っていました。男とし
て生きる』

『あらあら…？ふふふ…』

母上は笑う。

そっか、喜多さんと母上が似ていたのは笑顔だったんだ…。昔の僕はそんな母上の様子にふて腐れていた。

『何が可笑しいのでしょうか…』

『ああ、ごめんなさい。貴方って…本当にお父さんにそっくりね』

『当たり前です。僕は父上の子ですから！』

得意げな顔で答えていた。

当時の僕は、それが母上にとってどんなに残酷な答かを知らなかった。

『姫様、なぜ僕を小萩と呼ぶんですか？』

『昔、産んだ子に付ける筈の名前だったのよ』

『姫様の御子様？』

『そう、もう死んでしまったけど…育っていたら貴方位の年ね』

母上は目を細めた。

『失礼な事をお聞きしました。ご無礼をお許し下さい』

居たたまれなくなった小さな鷹丸はくは謝った。

謝ってどうこうなるモノではないと、ひっぱたいてやりたくなる。

『いいのよ。大丈夫だから。ただ…』

母上は寂しそうに笑いながら続ける。

『時々でいいの。小萩と呼ばせて』

『…解りました』

そう…ここから僕は小萩になったんだ。

景色が歪み、また違う記憶に飛ぶ。

また母上の御部屋。そして母上は床に伏せ、青い顔で苦しそうに息をしていた。

僕を見るなり母上は御人払いをなさり、部屋の中は母上と僕の二人となる。正確には今の僕も含め、三人になるが…。

『こはぎ…これから言うことを、よく聞いてね…』

過去の僕は頷いた。

『こはぎ…小萩…《強い》ってね…何も力だけじゃないのよ。本当の強さがある場所はここ』

母上は、ぼんぼんとまた胸の真ん中に手を当てる。

『自分を見失わない、そして誰かを信じ抜き、護る心が一番強い』

『誰かを、まもる？』

『そう』

『じゃあ僕は、僕は姫様を護ります…だから…』

死なないで…。遠くに行かないで…。

『小菟、一度だけで良いから…私を…おかあさん、って呼んで…』

『え…』

『…本当は、貴方の母なの』

『な…何を…だって父上は母は僕を産んですぐ亡くなったって…』

驚く僕。

母上は喘息に喘ぎながらも、続ける。

『それは…嘘。私が昔産んだ子は遺骸すら見せて貰えなかった…。』

貴方は…私が産んだ子。私とあの人の子。分かるの、貴方は私と似てるから…』

だから、母と呼んで。

真琴様が…自分の母と知った瞬間だった。

この時も泣いたっけ。

でも僕は我慢したんだ。

ちゃんと言ったんだ。

『母上…』

『ああ…小萩』

『母上、ははうえ、はは……うえ……一度じゃない、なん……ども呼びま
ず…！呼びまず、がらあ……！…！』

でも我慢出来なくて途中から涙声になって…

『小萩…！』

母上はそんな僕を抱き締めてくれたんだ。

仮に嘘だとしても本当でも、僕の母は真琴様で良い。

何度も呼んで、母が元気になるなら……何度も呼ぶ。

そして記憶は溶けて消えた。

母の言葉を聞いた時、何かは僕の頭の中でカチツと鳴る。

そうか…

そうだったんだ…

僕は逃げていたんだ。僕もまた、黄漠ちちと同じように強さを求めてい

た。

『強い』って何だろうと思っていた…。

なんで忘れていたんだろう。

僕はもう、その答えを知っていたじゃないか。

大切な人から、貰っていたじゃないか。

師匠や幸村殿、武田軍の人々に空夜さん…皆、僕のかげがえのない人達。

僕はそんな人達を守れるような優しい強さを…求めていた。

優しい強さを持つと、母上は最期に言った。

ごめんなさい…母上。

思い出せなくて…。

でも、僕は…その強さを示す為に頑張ります。

下手すると死んでしまうかもしれないけど。

その時は御側に居させて。

誉めて下さい。

それが、最初で最後のたった一度の『我儘』です。

雨の中、佐助は嵐雪に治療を施しながら今まさに幸村達が戦っているのを見ていた。

空夜が技を放つたらしい。

一瞬、辺りが眩い光に包まれた。

「やったか…」

「いや、まだだ…」

嵐雪は空を睨みながら答える。

「本当に手はないのか？」

「たった一つだけ、ある」

「…一つだけ？」

「ああ。儂しか使えん、一度きりの技がな」

「…どんな技だ？」

「……………××××××」

雨が一層激しくなった。

黄漠が立っていた辺りには、煙と肉が焦げる嫌な臭いが立ち上っていた。

「小萩殿は…？」

幸村と空夜は肩で息をしながら、相手の様子を窺う。

煙が晴れると泥水の中で黄漠が倒れていた。腕や足に大きな火傷を

負っている。

とても生きているとは思えなかった。

「小萩…!？」

「な……!！」

空夜は思わず近寄った。

その声に反応するかのようになり、小萩もとい黄漠の肩が僅かに動いた。黄漠の身体から殺気が出る。

それに気付いたのは幸村だった。

「…!空夜殿!！」

空夜が振り向く。

その後ろでは黄漠が立とうとしていた。

そして、空夜の腹に蹴りを入れる。

「!?!……!」

唸る間も無かった。

無言で血を吐きながら宙に浮く空夜。

そんな彼女に黄漠は踵落としを極め込む。彼女の代わりにあばら骨が悲鳴を上げた。

幸村にとって、全ての時が止まって見えた。

「空夜殿おおおおお……!!」

「次は貴様だ、甲斐の若虎」

黄漢が襲いかかる。

もう火傷は治り掛けていた。

急いで二槍を振るうが、間合いを詰められた。

「っ……しまっ……!!」

黄漢の細い指が幸村の首に食い込む。

緩めようと抵抗するも凄まじい力でなかなかほどけない。

意識が遠退く。

膝が地に着く感覚がした。

カランっ、と鳴ったのは自分の槍が落ちた音だろうか…。

「ぐ…うっ……」

「ふっふふ…このまま逝くが、う………!!?」

指の力が緩まった。

酸欠状態の意識を総動員させて槍を握ると、幸村は力の限り黄漢を突飛ばした。

首を押さえてゲホゲホと咳き込みながら、幸村は黄漠を見た。

「あゝ ああゝ ああああああああゝ……！！！！」

頭を押さえ、苦しそうに絶叫する黄漠。

髪が次第に銀髪から本来の色を取り戻していく。

「あゝ うゝ ぼゝ くゝ はゝ …… の に …… う じ ゃ な、 い ……」

紡がれる言葉。

玉のような汗を流し、また叫んだ。

「僕は！猿飛佐助が弟子、八夜 小萩だ！！！！貴方の人形なんかじゃ、ない……！！！！」

叫んだのは黄漠ではなく、小萩だった。

空夜も幸村も目を見開く。

「こ…小萩殿…で、ござるか？」

「は…ははは…やっと、戻って来やがった…」

「空夜さん、幸村殿…遅れてすみません」

ちよつと寝坊しました。
そう言つて疲弊しながらも、なんとか笑顔を作る。
だが、また表情が変わつた。

『なぜだ！？なぜ出てきた！！お前はもう私の意識に沈んだはず…！』

小萩の意識は戻りながらも、まだ身体は黄漠の支配の元にあるらしい。

小萩も負けじと声を張り上げた。

「うるさい…！僕の大事な人達は僕が護る、母上のように！貴方ごときに僕の最期は決めさせない！！」

『最期だと…まさか……！！』

小萩は寂しげな笑顔で告げる。

「僕の最期は僕が決める……貴方は僕と一緒に死ぬんです」

お世話になりました叔父上、と言いながら、小萩は地面に突き刺さつた刀を手に取つた。

『止める！！止める止めるやめるやめるやめるやめる…！！！！』

黄漠の声が次第に悲鳴に近くなる。

それでも小萩の腕は作業を止めない。乗っ取られる側の恐怖が今更になつて彼を襲つた。

それを見て幸村が止めようと駆け寄る。

が、空夜が手で行くなと制した。

小萩は刀を自分の首に押し当てようとするが、黄漢がさせなかった。刀が首の手前で震える。

『自害しても無駄だ。また他の肉体に乗り移るだけで私は死なない』

「どうでしょうか？貴方が僕に掛けた術は不完全。ならば、貴方は僕の肉体に繋ぎ止められてる可能性だってあります」

刀が当たる。

『ぐ……う……』

「こんな僕で良ければ喜んで冥府までお供します。僕と貴方の人生はここで……終わりだ」

首から血が僅かに流れた。

刀を更に食い込ませようと大きく振ったその時、大手裏剣が弾き飛ばす。

「あ……」

「馬鹿なことするな。真田の旦那や空夜はアンタにそんなことをさせる為に来たんじゃない」

「儂より先に逝くな、小萩」

「師匠：父上？」

小萩の目が更に見開かれる。

佐助と嵐雪は穏やかな笑みで答える。

「でも…よくやった」

「流石は俺様の弟子」

「あ…はい…」

頑張りました、小萩は泣き笑いのような顔ではにかむ。
途端に、体中が疼き出した。

「うづ…ぐう…う…!!」

「大丈夫か!!」

嵐雪が肩を掴む。

『猿飛佐助ええ!!!今度こそ身体を貰う…!!』

小萩の瞳がまた燃え盛る橙色に光った。

またもや黄漠に変わっていた。

二本の腕が佐助に伸びる。

佐助は躲した。

「アンタにやれる身体なんか無いっての!俺様、今の雇い主が気に入ってるしそれに」

食いつぱぐれたくないんでね、と佐助は不敵に笑った。
その表情が少年時代の佐助と重なる。

「ふ…変わらんな」

「そお？そりゃありがと」

『ごちゃごちゃと！五月蠅い！！』

嵐雪を突飛ばし、回し蹴りを入れるがまた外れる。
そしてまた佐助に襲い掛かろうとした。が、途中で固まってしまっ
た。

『あ…が…がががが…！！身体、から…私が…私が離れて
行く…！！』

見れば小萩の鼻の上の傷がまた切れて、そこから炎のような色の霧
が出ていく。

霧は枯れ木のような人形を形成しだした。

『身体……身体をくれええええ…！』

黄漠の本当の『姿』だった。

「身体なら、いくらでもくれてやる！余命僅かな僕の身体をな！！」

嵐雪の身体に霧は吸い込まれていく。

『止めるお…止めるおお兄者あ……やめ』

「哀れな弟よ、こうなってしまったのは僕の責任だ。なあ黄漠よ、もう娘を許してやってくれないか…時の呪縛をほどいてやってもいいじゃないか」

『こは…ぎ…まこと…ひ…め…』

「そうだ、小萩は僕らにとって姫様の忘れ形見だ」

『……………』

「認めよう、お前は…僕より強い」

『…兄…じゃ……………』

その言葉を引き金に、黄漠だった靄の残滓は霧のように消え失せた。

「……………黄漠……………」

「終わったか？」

佐助が小萩を抱き寄せて嵐雪に聞いた。
嵐雪は黙って頷く。

その後ろから

「佐助、無事だったか…」

「さす兄…小萩は…?」

幸村が空夜の肩を担ぎ、やって来た。

「大丈夫だ、寝てる。真田の旦那…ずいぶんやられたね。空夜も、重症だな」

「マジ肋骨が痛い。折れたかも。本当、容赦ねえぜ…」

「空夜殿、あれは小萩殿のせいではないでござるよ?」

「わかってらい…」

空夜は舌を出して笑った。

「んん…」

小萩が起き上がる。

「父上…?」

「小萩!」

「小萩殿!!」

幸村と空夜が抱き締めた。

困惑した表情で抱き締められる小萩。
しかし幸村の力が強すぎたのかすぐ痛い！と悲鳴を上げた。

「二人共、ごめんなさい。あの…父を知りませんか？」

「う…はぎ……」

嵐雪が喘ぐように呼んだ。

その頃、元就も目が覚めた。

感覚が研ぎ澄まされると、何やら暖かい雫が顔に落ちてくる。薄く目を開ければ、逆さに映るひなたの目から涙が溢れていた。どうやら自分は彼女の膝に頭を乗せているらしい。

「ひなた…？」

「兄様……」

ひなたの目が丸くなる。

「そなたがいるという事は…我は、生きているのか…？」

「はい…」

「そうか」

元就はまた目を閉じる。

「社は焼けてしまったか…」

「いいえ。廊下や屋根は焼けましたが、落ちてはいません」

「化け物は？」

「武田の人達が来てくれました。あの……」

「なんだ？」

「就兄様…無理をしないでください。まだ他に方法はあるはずですから…だからあんな酷い手は…人の心を曲げる所業は……その…」

えつと…」

「ひなた」

元就の手が彼女の頭に添えられる。

叩かれる、と思った彼女は首をすくませ目を閉じた。が、珍しく彼の手は軽く頭を撫でただけだった。

「もうよい。解っている」

「兄様？」

「我も所詮は人。時期尚早過ぎたのだ」

元就は溜め息を吐く。

ひなたは相変わらずぼろぼろと泣いていた。

「とりあえず…兄様が生きてて良かった…です…ぐすつ…ふええん…」

「泣くな。姦しい。傷に響くわ…」

「は…はい…」

「あと」

元就が眉を寄せて涙を拭きながら続けた。

「我を兄様と呼ぶな」

「はい！元就様！！」

「海斗はいるか？」

「ふえ？海斗君？海斗君は確か…あれ？」

ひなたは辺りを見渡した。

海斗は消えていた。

「やれ、もの見事に蹂躪されたの」

「そうだね」

海斗は元就達がいる場所から離れた所にいた。しかも、石田軍の軍師『大谷吉継』と共に…。

「まあ今回は失敗かな。いやあ反省反省」

「反省しておる顔には見えぬかな」

「あらら…」

海斗は笑った。

「主は我に何か言いたい事があるのだろ。さつさと申せ」

「そうそう…今回の事、石田三成には内密にしといて」

「何故に？」

「露見すると面倒だし、何より西軍の為さ」

「ほう…」

「毛利と武田は一応西軍の括りに入る。その両軍の大將が間接的に
とはいえ、問題を起こしたら徳川に目を付けられちゃうしね」

「問題を起こしたのは主の方だろ…」

大谷は鼻で笑う。

「まあまあ。とりあえず穩便に済ませたいんだよ。それに」

時間が無いでしょ、と呟く。

「……独眼竜の事が…」

「そつ！あの独眼竜が徳川に入る可能性が高くなってる」

ちらつと海斗は浜の方に目を寄せた。

浜には自分の姉、空夜がいた。

「主の姉か。ひひつ…主とはあまり似ておらん…そういえば、かの

女は独眼竜の…」

「おっと、手を出さないでね。姉さんに手を出したら……アンタの戦略ブチ壊すよ？」

さて、どんな番狂わせが起きるかなあ…と、笑う海斗の笑みにどす黒い物が混ざり、凄みが増した。
大谷は少しだけ震えた。

「仕方なし。三成には…特別に黙っておいてやる」

「ありがとう。礼は関ヶ原にて返すよ」

「ふむ。しかし、主のような子供が戦場を狂わせていると思うと…
我は安心して眠れぬ」

未恐ろしい、と大谷は吐き捨てるように呟いた。

小萩は嵐雪の手を握ってそばに駆け寄った。
その光景を見ながら、佐助は嵐雪の言葉を反芻する。

『……………儂が身代わりとなる』

『は？』

『小萩の顔の傷は儂が施した。あれは出口だ。黄漠を引きずり出す
為の』

『…だが、アンタが身代わりになったら…』

『ああ。儂は死ぬ。でもそれで良い。儂が娘に出来ることは弟の呪
縛を解くことだ。それに今さら父親面は出来ん。唯一心残りがある
とすれば……………母に似たあの子の顔を傷つけてしまった事だ』

「…け。…佐助」

「ん、なんだ大将」

「あの御仁は？」

「小萩の本当の父親だ」

「助かるのか？」

「……………」

佐助は黙って首を横に降った。

嵐雪は苦しそうに小萩を見つめ、何かをしきりに呟いている。

「父上…大丈夫ですか？」

「ああ。すまん」

「いいえ」

「お前は、本当に…立派に成った」

嵐雪は小萩の顔の傷をそつと撫でる。

「傷つけてしまった…女にとって…命である顔…あの御方によく似てるの、に…すまぬ」

「大丈夫です」

「黄漠にも…愛はあった。ただ、儂が壊してしまった。お前は…姫様と儂、黄漠三人の子だ」

「ええ」

「儂を…儂を許してくれ」

「許すも何も、貴方は僕の父親です。黄漢さんも父親です。僕は…確かに貴方達の娘。だから、それを誇りに思っています」

小萩は誇らしく力強く言いになった。

「……………」

嵐雪の目に一筋の涙が零れた。

「真琴様…黄漢…聞こえたか？この子は…強い。真琴様、貴方と同じ強さだ。儂は…なんて…果報者…なんだ……………」

微笑んでそのまま、嵐雪は動かなくなった。

小萩は気丈にも泣かなかつた。

「お休みなさい、父上」

「これから…小萩はどうする？」

「どうする、とは？」

「忍であり続けるのか、それとも…」

「僕は忍です」

小萩は振り返った。
その顔に迷いは、無い。

「僕は鮠の嵐雪の娘、八夜 小萩です。こんな覚悟では師匠…駄目
ですか？」

じつと佐助を見つめた。

「……………そんな顔で、そんな覚悟出されちゃ俺様、何も言えないよ」

俺様からは何も言うことないよ、と佐助は笑う。

「それならば師匠…一つだけ我が儘を」

「え？」

「泣きそうです。泣いていいですか？」

佐助は黙って頷いて小萩を抱き締めた。

途端に、ぶわっと泣き始める。

佐助に出来る事は彼女の背中を撫でることだけだ。

それを見た幸村や空夜はお互いに顔を合わせると、くすっ…と笑っ
たのだった。

その後、海斗が現れ、毛利はこの件は不問に付すただけ伝えた。そのことに釈然としなかったが、お互い疲弊していたので一先ず退散と相成ったのである。

当然、甲斐に帰ってからは佐助の説教三昧であった。

そして、嵐雪の遺体は丁重に荼毘に付され、墓に眠っている。甲斐の静かな山の中で。

山の中を一人の少女が歩いている。

少女は十六、七歳か。

小柄だがすらっとして髪が短く、薄い栗毛だった。

そして瞳がうっすらと橙色に光っている。

山の天辺には小さな墓があった。

少女は墓参りに来たのだ。

けれども、その墓標には名前が無い。

少女は花を活け、供え物を置くと手を合わせた。

「父上：お久しぶりです。あれから身長も少しだけ伸びました。この前は鍛練で師匠に誉められましたよ」

そのまま他愛ないことを話した。

どれくらい時間が経ったのか、佐助が後ろからやって来て少女の肩を叩く。

「小萩、そろそろ時間だ。行くぞ」

「はい！では父上、行って参ります！！」

決戦の地、関ヶ原へ。

そう言った少女、小萩の瞳は炎のように綺麗に光っていた。

『炎色の萩』・完

15 (後書き)

炎色の萩を最後までお読み下さった皆様、ありがとうございます。

ここまで行くのに沢山の困難がありました。

友人や家族に時には支えてもらい、時には叱咤され、ようやく形にして終われました。

そして皆様のアクセス数がかなりの支えになりました。

小萩は私が今まで描いた主人公の中ではかなり異質です。

展開や終わりが見えづらく、成長過程も書きづらい…。でも無事育ってくれました。

いやぁ良かった！

さて、本編はこれで終了です。これからは書ききれなかったギャグ満載の番外編になるでしょう。

予告ですがコラボします。誰とコラボするかはお楽しみに！

気が向いたらその後の話も書いていきたいです。多分スピンオフ作品になる可能性大ですが…。

とりあえずは読者の皆様々に数えきれぬ『ありがとう』を。そして自分にお疲れ様。

本当にありがとうございました！！

番外編・巻（前書き）

短めですが、甘めに作りました。

番外編・壱

『明けてまして…』

「へっぶし…！」

「大丈夫か？」

盛大にくしゃみした小萩の背中を擦った。

「はい、大丈夫です」

「無理すんなよ？もう一枚羽織りな、ほい」

小萩の頭に分厚い綿入りの半纏を被せる。

「うう…ありがとうございます……」

俺様達は何処にいるかと言うと上田城の屋根の上。

初日の出を拝む為に、真田の旦那には秘密で二人きりで待っているのだった。

「もうすぐですかね、日の出」

「ああ、そうだな」

お互いに半纏のおかげで少しは寒さを凌げたが、やはり体は震えて

いた。
あー寒い…。

「……………」

目の前には小萩がいる。

よし、決めた。

俺様は小萩を抱き寄せた。

「にやう!？」

なに変な声出してんの。

「温かいだろ。風邪引いたら大変だからな」

温めてやる。

小萩は面白い位顔を赤くしてたけど、拒絶はしなかった。
うん癒されるね。

小萩の身体は半纏越しに熱くなっていた。
心臓もかなり早鐘打ってる。

こりゃ湯気出てるな…。

「…小萩？」

大丈夫か？

「師匠」

上ずった声で言葉を紡ぐ。

「…あつたかいですね」

そう言つて振り向いた小萩は小動物みたいで愛らしかった。

いや…そういう趣味とかじゃないよ？
ただ、可愛いと思つただけで。

うん…でも、もう少しだけこのままでいいね。
温かいから。

抱き締めたまま時間だけが過ぎた。

やがて

「あ……師匠！日の出です！…日の出ですよ！」

小萩がきちゃつきゃつと山際を指差す。

そこから日がのっ、と顔を出した。

元旦だ。

「明けましておめでとつございませす、師匠」

「ん。こちらこそ明けまして」

「今年もよろしく願いします」

ふふ…と微笑む小菘は幸せそうだ。

旦那は猛獣だが、弟子は仔犬だからね。

可愛いよ、うんうん。

……………鼻屑かな？

後もう少しだけ、このまま日の出を眺めよう。

こんな格好だと旦那は多分破廉恥なんだと叫ぶかもしれないけど。

明けましておめでとう。

今年もよろしく、旦那！

番外編・壱（後書き）

あたしも猫で暖まります…。
ぬくぬく…ぬくぬく…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2686u/>

炎色の萩

2012年1月1日02時48分発行